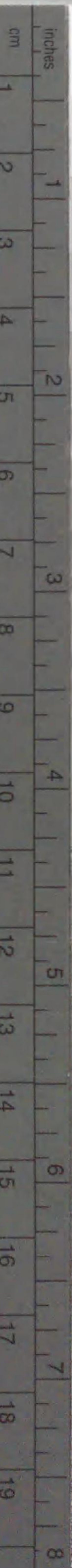


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



GB22

7



00707209

添附物

附圖

2枚





東京帝國大學
學文科大學
史料編纂掛編纂

大日本史新

第十二編
之十九

東京帝國大學藏版

第二十編之九十

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
目次一	八	部分圖三枚	部分圖四枚	一六五	六	倉立	念立
三七	一一	同同	同四	一九〇	一一	討死	討死
六六	一三	平さも	上さも	二〇三	一〇	拙者ハ	拙者組ハ
一二五	二	ゑ、こ	多候	二〇六	五	能筆	能書
一二六	七	小兵衛	少兵衛	二二二	一一	先	先々
一二七	一一	書付申候以來、我等所	書付申候、以來我等所	二二一	一〇	指添被越	指添罷越
一三七	一三	定芳	定房	二七四	見出シ	前田	前田利貞家臣
一四二	一四	右衛門尉	左衛門尉	五四〇	六	玄馬頭	玄蕃頭
一五二	二	佐右衛門	佐左衛門	七一九	九	旗本業	旗本衆
一五六	一二	將某頭	將某頭	八五五	見出シ	舊戰	奮戰
一五八	九	妹尾團仙	妹尾團仙	九五五	五	奉之	表之

~~210.08~~
~~To 456d~~

GB22
7



707209



大日本史料

第十二編之十九目次

元和元年

五月

七日 家康、秀忠、軍ヲ大坂ニ進ム、○大坂ノ將真田幸村等、出テ茶
 白山岡山附近ニ防戦ス、○東軍ノ將小笠原秀政、同忠脩、竝ニ
 本多忠朝等戦死ス、○大坂方終ニ敗ル、○幸村等多ク之ニ死
 ス、○大坂城亦火ク、(大坂陣圖屏風、全圖一枚部
分圖三枚部、大坂卯年圖、大坂安部
 之合戦之圖、真田幸村書狀、大坂夏陣之圖、最上
屏風)
 茶臼山方面ノ戦況……………三八
 其一 本多忠朝竝ニ其組……………三八
 其二 榑原康勝竝ニ其組……………七二
 其三 酒井家次竝ニ其組……………一三二
 其四 松平忠直……………一四三

目次 元和元年五月

其五水野勝成竝ニ其組……………一七二

其六本多忠政竝ニ其組……………一八〇

其七松平忠明竝ニ其組……………一八八

其八伊達政宗……………一九九

其九松平忠輝……………二〇八

其十山内一唯……………二〇八

其十一生駒正俊……………二〇八

其十二德川義利直義同頼將宣頼……………二〇八

其十三家康麾下……………二四〇

岡山方面ノ戰況……………二五一

其一小鋒前田利常……………二五一

其二本多康紀、同康俊……………二七六

其三遠藤慶隆、宮城豐盛、片桐且元……………二七八

其四井伊直孝……………二八二

其五藤堂高虎……………三二三

其六細川忠興……………三八六

其七黒田長政加藤嘉明……………三九四



其八高木正次竝ニ其組……………三九四

其九青山忠俊竝ニ其組……………四〇二

其十水野忠清竝ニ其組……………四一八

其十一水野忠元竝ニ其組……………四二三

其十二成瀬正武竝ニ其組……………四二四

其十三板倉重宗竝ニ其組……………四二五

其十四井上正就竝ニ其組……………四二九

其十五内藤清次竝ニ其組……………四三〇

其十六松平定綱竝ニ其組……………四三一

其十七阿部正次竝ニ其組……………四三三

其十八牧野信成竝ニ其組……………四三九

其十九牧野忠成竝ニ其組……………四四一

其二十本多正信竝ニ其組……………四四二

其二十一酒井忠世竝ニ其組……………四四四

其二十二土井利勝竝ニ其組……………四五一

其二十三安藤重信竝ニ其組……………四五三

其二十四使番……………四五四

其二十五秀忠麾下等 四六八

京橋方面ノ戦況 四七六

其一京極忠高同高知 四七六

其二石川忠總 四八二

其三松平乘壽 五〇八

天滿船場方面ノ戦況 五〇八

其一池田玄隆隆利 五〇八

其二森忠政 五二一

其三加藤明成 五三九

其四有馬豊氏 五四〇

其五堀尾忠晴 五四〇

其六關一政 五四一

其七加藤貞泰 五四一

其八毛利秀元 五四二

其九中山照守 五五一

尼崎方面ノ戦況 五五一

水軍ノ戦況 五五三

大坂方ノ戦況 五五六

参考 五八一

總裁 五八一

家康竝ニ麾下ノコト 七一八

秀忠ノコト 七四七

徳川義利直義ノコト 七五五

本多忠朝組ノコト 七五五

榊原康勝組ノコト 七七三

酒井家次組ノコト 八〇七

松平忠直ノコト 八〇八

水野勝成組ノコト 八二一

松平忠明組ノコト 八二三

伊達政宗ノコト 八二五

松平忠輝ノコト 八二八

前田利常ノコト 八三四

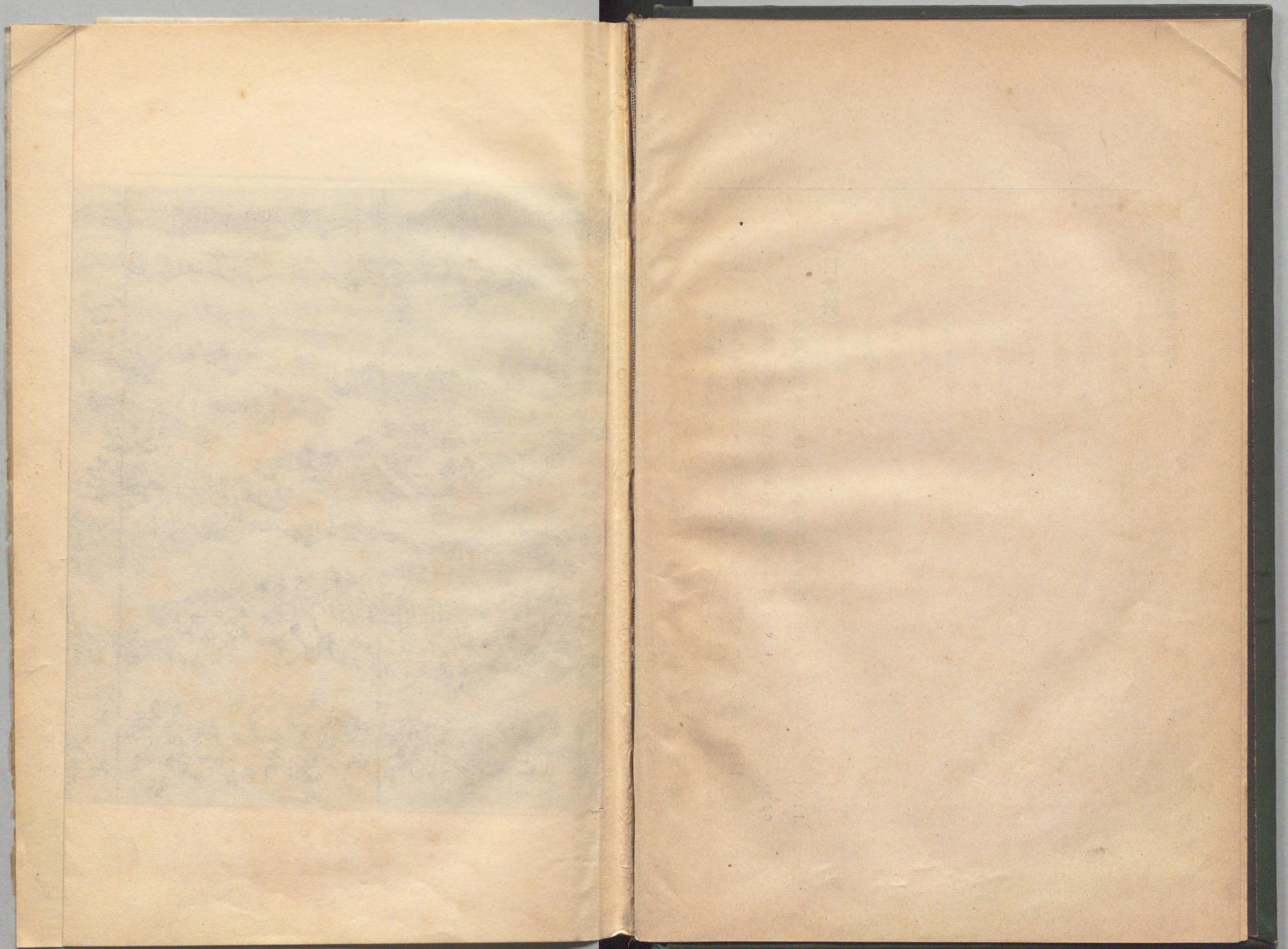
本多康紀ノコト 八四三

井伊直孝ノコト 八四四

藤堂高虎ノコト	八五〇
細川忠興ノコト	八五〇
黒田長政、加藤嘉明ノコト	八五一
高木正次組ノコト	八五五
青山忠俊組ノコト	八五五
水野忠清組ノコト	八六一
酒井忠世組ノコト	八六三
安藤重信組ノコト	八六五
使番ノコト	八六六
森忠政、加藤明成、毛利秀元ノコト	八六八
九鬼守隆ノコト	八七一
部屬未詳ノモノ	八七二
眞田幸村ノコト	八七八
毛利勝永ノコト	九二五
大野治房、御宿正友ノコト	九三五
明石全登ノコト	九四一
渡邊胤、正榮尼ノコト	九五八

(目次終)

堀田圖書等ノコト	九七〇
大野治長、秀頼夫人、徳川氏 <small>千姫</small> ヲ城ヨリ脱セシム、○使ヲ家康 ノ行營ニ遣シテ、秀頼母子ノ助命ヲ請ハシム	九八〇
蜂須賀至鎮、黒田忠之、福島正勝等、大坂ニ抵ル	一〇一一

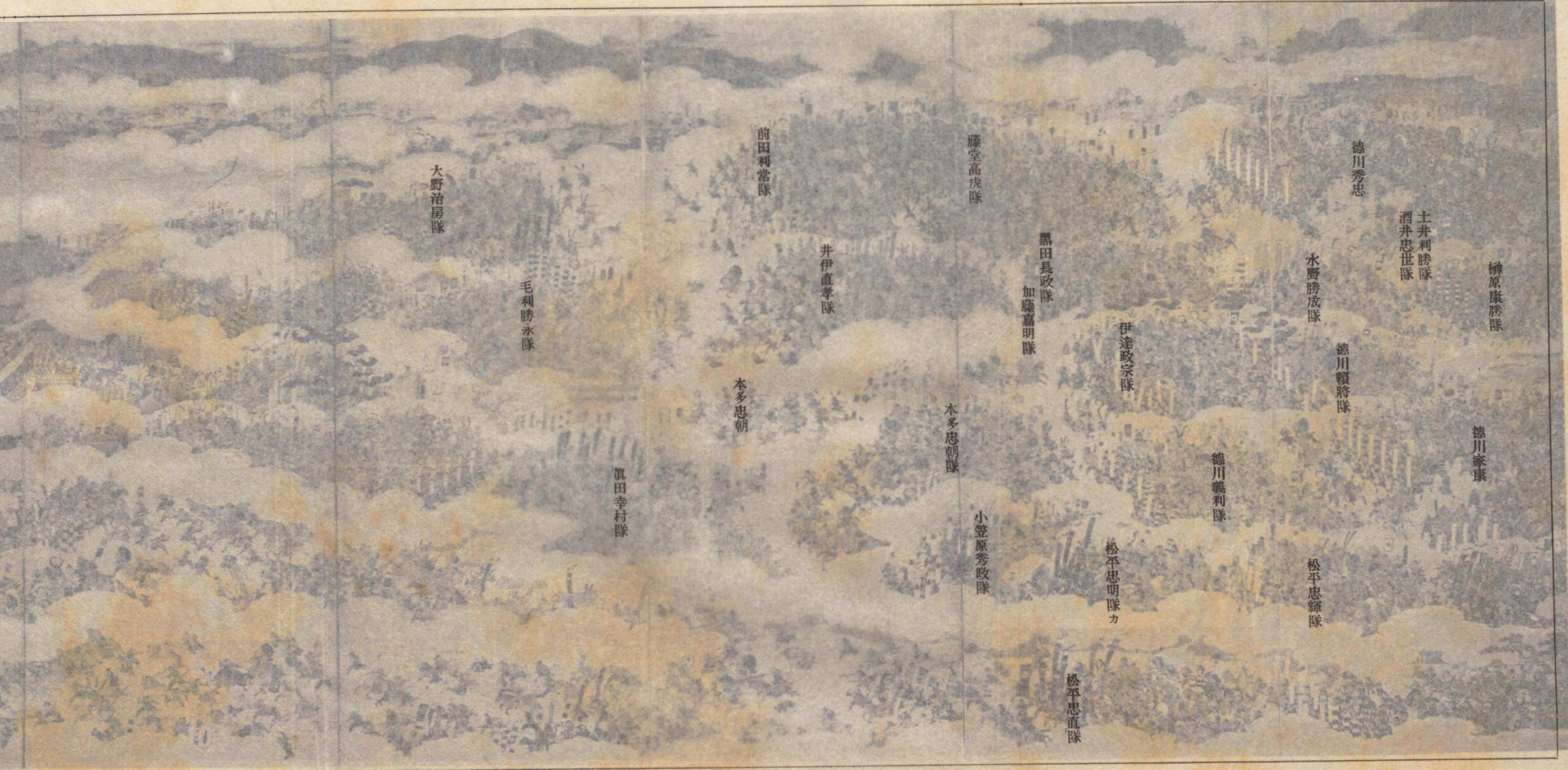


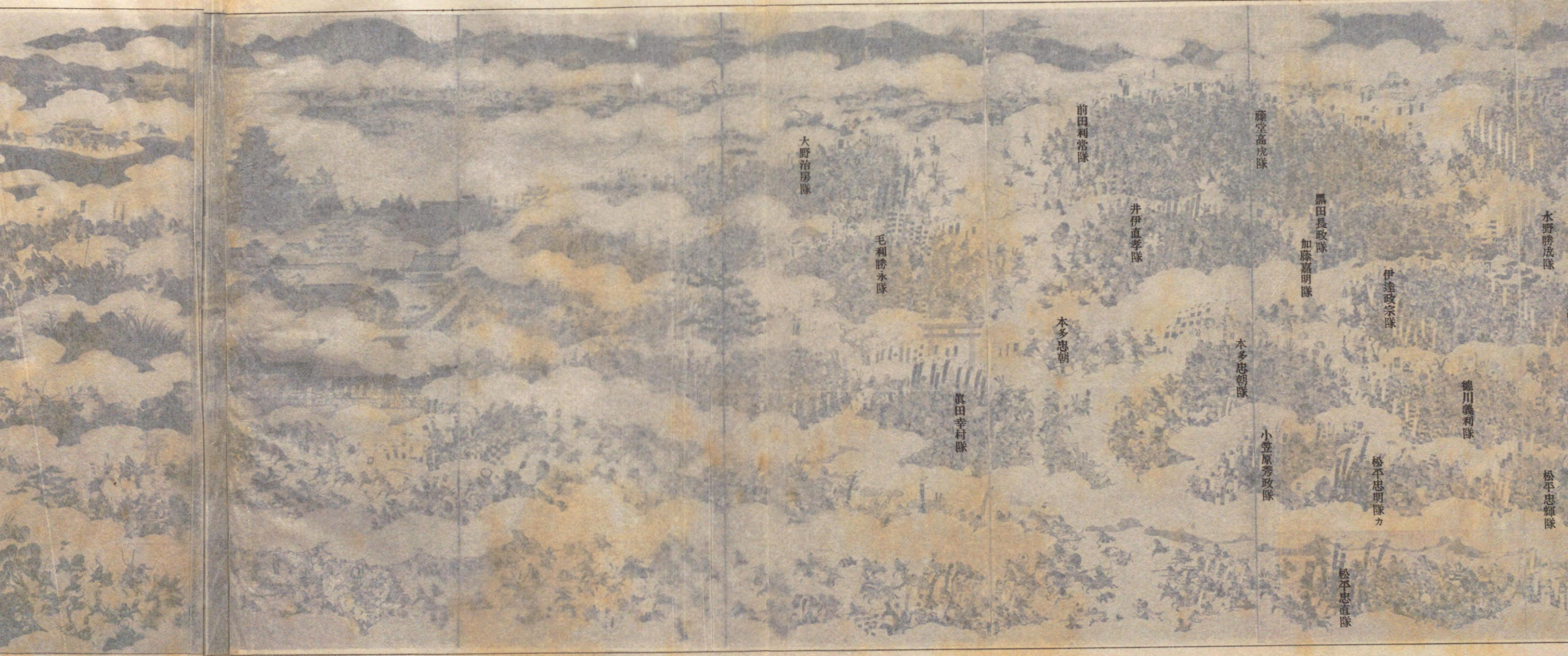
大坂陣圖屏風

侯爵黑田長成氏所藏

原寸

縱四尺九寸六分
横一丈一尺九寸五分





水野勝成隊

松平忠輝隊

徳川義利隊

伊達政宗隊

松平忠明隊力

黒田長政隊
加藤嘉明隊

松平忠直隊

藤堂高虎隊

本多忠朝隊

小笠原秀政隊

井伊直孝隊

本多忠朝

前田利常隊

眞田幸村隊

毛利勝永隊

大野治房隊

榑原康勝隊

徳川家康

土井利勝隊
酒井忠世隊

徳川秀忠

徳川頼將隊

水野勝成隊

松平忠輝隊

徳川義利隊

伊達政宗隊

松平忠明隊カ

松平忠直隊

黒田長政隊
加藤嘉明隊

藤堂高虎隊

本多忠朝隊

小笠原秀政隊

井伊直孝隊

本多忠朝

前田利常隊

眞田幸村隊

毛利勝永隊

大野治房隊

徳川秀忠

水野勝成隊

徳川頼將隊

松平忠輝隊

徳川義利隊

伊達政宗隊

松平忠明隊

松平忠直隊

黒田長政隊

加藤嘉明隊

藤堂高虎隊

本多忠朝隊

小笠原秀政隊

井伊直孝隊

前田利常隊

本多忠朝

眞田幸村隊

毛利勝永隊

大野治房隊





大坂陣圖屏風

侯爵黒田長成氏所藏

原寸

縦四尺九寸六分
横一丈一尺九寸五分

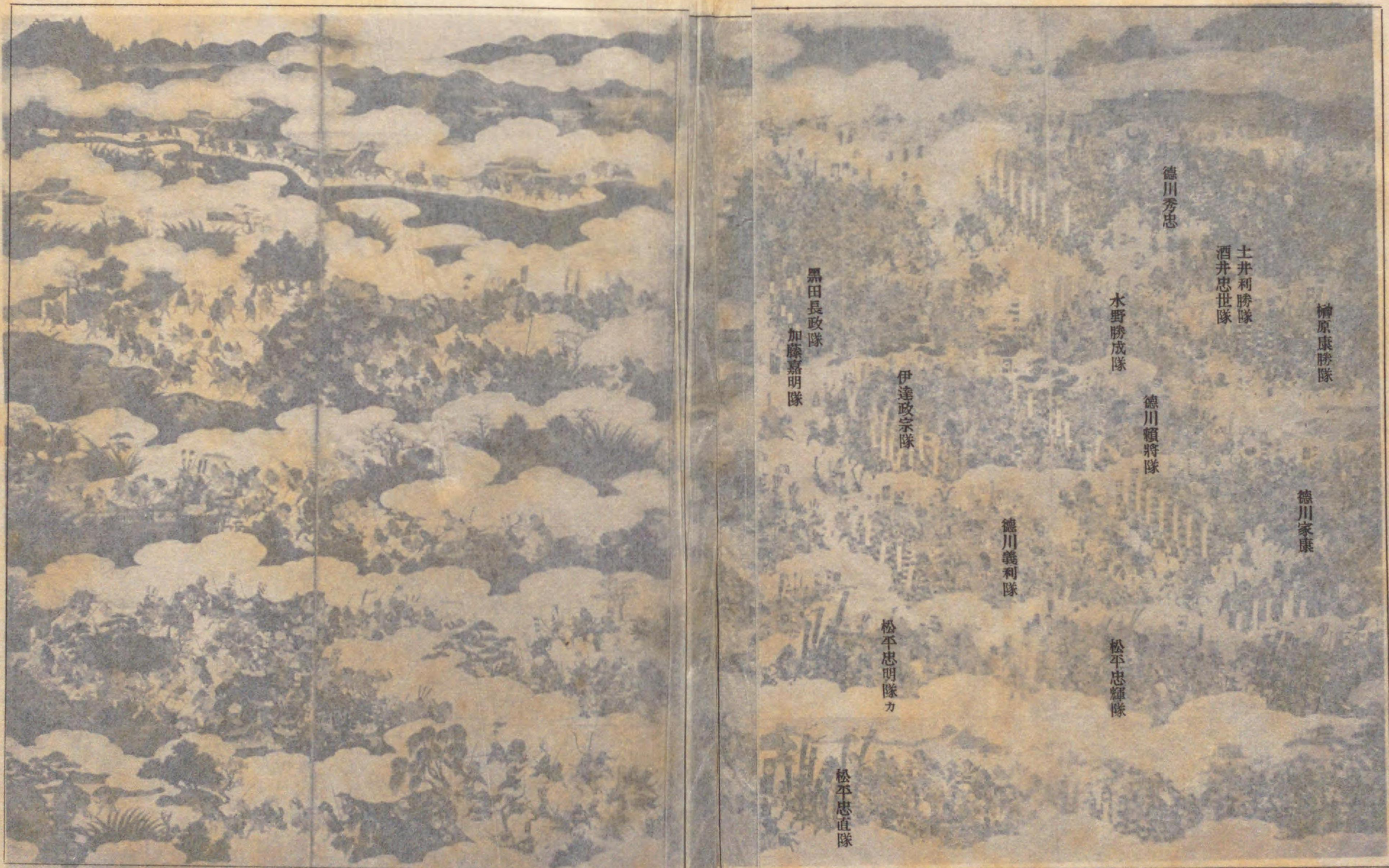


大坂陣圖屏風

侯爵黒田長成氏所藏

原寸

竪四尺九寸六分
横一丈一尺九寸五分



榑原康勝隊

徳川家康

土井利勝隊
酒井忠世隊

徳川秀忠

徳川頼將隊

水野勝成隊

徳川義利隊

松平忠輝隊

伊達政宗隊

松平忠明隊カ

黒田長政隊

加藤嘉明隊

松平忠直隊

○本圖中ノ人名ハ詳悉シ難シト雖モ、今姑ク推定シ得タルモノ、ミサヲ覆紙ニ注記ス、
又、コノ屏風ノ由來筆者等ニシテ、本年正月十九日ノ條ニ挿入セル本圖ノ一部
ニ附記セリ、參看スベシ、



京極高知隊

石川忠總隊

京極高知隊

池田玄隆隊

蜂須賀至鎮隊

伊達政宗隊
加藤嘉明隊

伊達政宗隊

松平忠明隊

松平忠直隊

京極高知隊

石川忠總隊

京極忠高隊

蜂須賀至鎮隊

池田玄隆隊



○本圖中ノ人名ハ詳悉シ難シト雖モ、今姑ク推定シ得タルモノ、ミチヲ覆紙ニ注記ス、
 又、コノ屏風ノ由來筆者等ニツキテハ、本年正月十九日ノ條ニ挿入セル本圖ノ一部
 ニ附記セリ、參看スベシ、

京極高知隊

石川忠總隊

京極忠高隊

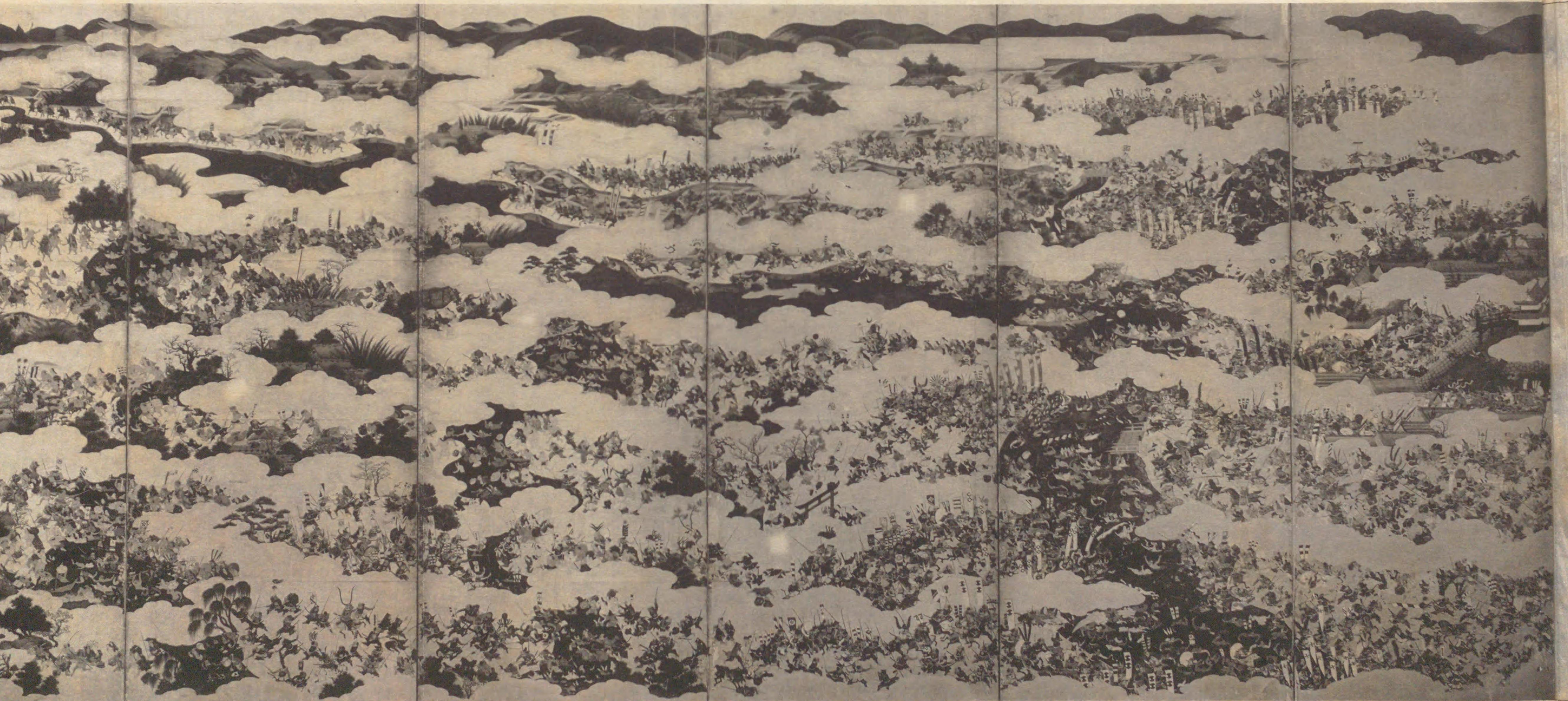
池田玄隆隊

蜂須賀至嶺隊

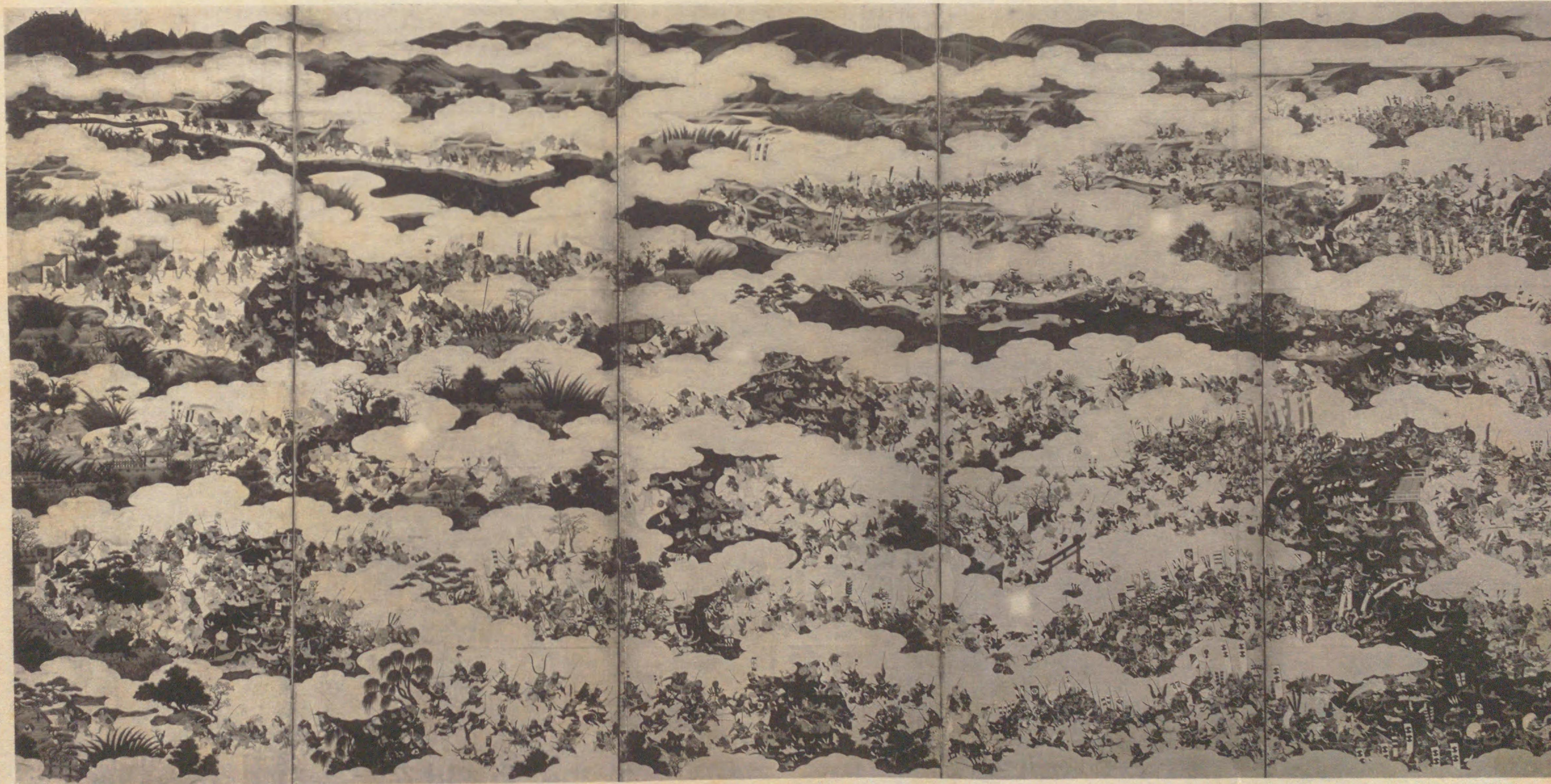
石川忠總隊

京極忠高隊

池田玄隆隊



○本圖中ノ人名ハ詳悉シ難シト雖モ、今姑ク推定シ得タルモノ、ミチ覆紙ニ注記ス、
又、コノ屏風ノ由來筆者等ニツキテハ、本年正月十九日ノ條ニ挿入セル本圖ノ一部
ニ附記セリ、參看スベシ、





大日本史料 第十二編之十九

後水尾天皇

元和元年乙卯

五月丁未朔



七日癸丑家康、秀忠、軍ヲ大坂ニ進ム、大坂ノ將真田幸村等、出デテ茶白山
岡山附近ニ防戦ス、東軍ノ將小笠原秀政、同忠脩并ニ本多忠朝等戦死ス、
兩軍鏖戦、大坂方終ニ敗レ、幸村等多ク之ニ死ス、大坂城亦火ク、

〔駿府記〕五月七日、寅刻將軍家大坂表御進發、大御所卯刻動座、平野、天、茶臼、神森、全登

山邊巳刻合戦始ル、大坂勢敗北、大坂勢真田左衛門佐幸村、明石掃部助長曾

我部宮内少輔盛親、仙石豐前守宗也齋、大野主馬治房、同道犬、真木嶋玄蕃

又七組之頭堀田圖書之、真野藏人宗一、伊藤丹後守長次、中島式部少正、

野々村伊豫守吉安、青木民部少輔一之、速水甲斐守守久等數万人、數入亂、敵

悉敗北、幕下於御先、本多出雲守忠將忠朝、小笠原兵部少輔秀政、同信濃守忠脩、安

藤彦四郎直次、松平助十郎正勝、織部子、古田左近、野一色頼母助重、神保長三郎

元和元年五月七日

巳刻戦初
マル
大坂方諸
將

東軍ノ戦
死者

東軍敗色アリ
秀忠ノ奮戦
大坂城火
家康秀忠
茶臼山ニ
進ム

崇傳茶臼
山ニ居ル

眞田幸村
ノ働

元和元年五月七日

二

〔相茂〕
〔忠次〕
〇〇奥田三郎右衛門等討死、未刻迄挑戰處、關東勢少敗北之處、幕府自令執麿令進給、御圍人取留之、雖然拂左右勇給、依之諸軍勇進、又越前少將殿手ヨリ、大野修理宅放火、就其火移二之丸本丸不殘燒亡、都合敵二万余被討捕、未刻大御所茶臼山、幕下御同所渡御、幕下仰曰、諸軍潔仕之由被仰上、大御所仰曰、幕下無比類御手柄之由、甚御感悅、御感涙令流給、自夫幕下岡山還御、
〇奥田忠次ハ六日、片山ニテ戰死セリ、
〔板倉勝重〕
板伊州へ狀上ス、内膳

〔本光國師日記〕
七十
五月七日、天王寺ちやうを山、
殿便宜ニ上ス、久右衛門へも狀遣ス、
同七日、大坂落城悉燒失、大御所様將軍様御旗本衆合戰手柄共也、大坂勢悉打死也、

〔智仁親王御記〕
一
五月五日、大御所將軍大坂立、七日ニ大坂落城也、
〔言緒卿記〕
五月七日癸丑、天晴、大坂落城、天王寺ニテ度々サナタ武ヘン、其後討死也、將軍様方本多出雲、小笠原父子、
〇小笠原秀政、同忠倫、
其外數人討死也、大坂町城不殘燒了、

〔土御門泰重卿記〕
一
五月七日、晴天、當番予御前ニ屢致祇候、大坂表之御

京都御所
ヨリ大坂見
ユ

ハナシ落城之由申候、火手アカリ申候ヲ、清涼殿屋根ヨリ見物申候、晝之八時ヨリ夜半時分マテ火焰見申候、
八日、晴天、家君門久脩、其外兩傳奏、
〇廣橋兼勝、
〇西實條、
公家衆六七人、兩大樹爲御見廻、大坂御陣所へ罷下被申候、未刻大坂落城雜說之由、世上ニ申候由承及候間、兩傳奏先延引可申候由被申候故、今日御見廻十日比延引也、只今大坂陣所より人來候、城落之事必定也、申刻ニ雨降也、夜明迄不止、大坂落着禁中へ申入候へハ、長橋御局御出會念比御尋候、

〔孝亮宿禰日次記〕
四
五月七日癸丑、晴、今日大坂落城、

〔梵舜日記〕
九十
五月七日癸丑、天晴、大坂於表合戰之由申、燒煙事外ニ見説々不知也、

〔義演准后日記〕
九十
五月七日、晴、兩御所爲見廻、磐梨一折進上、其外筭音信、使主水、午刻大坂燒煙見付、未刻計落城之由風聞、慥實説不聞、夜中尙火見云々、

八日、陰、一昨日合戰城方如形云々、但天王寺口へ押寄、昨日早朝藤堂和泉伊井掃部ツケ入火懸、二丸ヨリ本丸ニ火付燒掃、數多討死數不知云々、秀頼公

元和元年五月七日

三

秀吉ノ流
斷絶秦ノ
始皇ノ如
シ

兩軍兵數

内應者アリ

板倉勝重
ヨリ江戸
城留守ヘ
ノ注進狀

京ヘノ落
人萬ヲ以
テ數フ

元和元年五月七日

落着未聞、淺間敷、大間御流悉斷絶、如秦始皇、

九日、雨、北村主水歸、將軍兩御所へ御禮濟畢、大坂悉燒失、石カケ計相殘云々、

〔東大寺雜事記〕

二 五月七日、大坂之御城ヲツル、御城人數十五万程有之、

由云々、將軍御入數卅万程有之カト云云、城ノ大將共、砂田佐衛門助(後)、五藤(基)又兵衛、仙石豐(前守)、明石掃部、早水甲斐、伊藤丹後、青木民部、大野修理、同主馬、長

□□此等之人ヲ初而幾ノ人死ス、

〔春日社司祐範記〕

○八 慶長二十乙卯年日次記 五月七日、大坂落城了、將軍様御父子被責寄、無理ニ被責入放火了、又内々引手有テ如此云々、秀頼様御切腹ト申、數万騎人數八方ヨリ責入、即時ニ落居也、

〔徳川文書〕

尾張張

猶々、昨日午之刻、今日四つ時分迄、火手爰元へも相見之申候、又後藤又兵衛、明石掃部、眞田何も討死仕由申候、落人共爰元參候ハ、二曲輪ハ火ウ、リ、本城も何も不殘燒申由申候、乍去御陣場ハ未一人も不參候、山崎口須田通ニてとらへ申候もの、右之通申候、重具ニ可申候、先落城之通早々申入候、落人一万も二万も、京邊土へ參候、以上、

急度申入候、先書ニ如申、六日之先手衆合戰御座候、其夜ニ惣構迄押詰候、七日之午刻、大坂落城致候、下々の者共、悉方々へ敗軍仕、其上名をも人存候程之者共、皆以討死仕由候、天主ニも火掛申候と申來候間、其御心得可被成候、先以目出大慶ニ存候、加様ニ早速相濟申候義ハ無是候、急吉左右ニ候條如此ニ候、尙追ふ慥之儀可申入候、恐々謹言、

五月八日 元和元年

板倉伊賀守

- 酒(酒井忠利) 備後様
- 鳥(鳥居忠政) 左京様
- 松(松平重忠) 丹後様
- 米(米津田政) 勘兵様
- 嶋(島田利正) 兵四様

〔三州鳳來寺所藏古文書〕

箱上書 鈴木平兵衛書狀 有之

猶、定ぬ其元へハ聞え申ぬきと存申上候、乍恐醫王院様、兩學頭様、岩本院、一乘様へも、右之通御傳説可忝候、御え々本へきつてか、リ申ニ

元和元年五月七日

元和元年五月七日

六

付、此内之軍兵も數多被討候由申候、然共秀頼(和)えらきられ、城中令放火候間、御心安可被思召候、佐保山へ明石掃部頸御取候由候、井ノ掃部殿御仕合無所殘候、以上、

急度申上候、仍、大坂去七日ニ致落城候、將軍様御旗本切テ懸リ、御旗本衆悉鑑ヲ被成候、將軍様御仕合無比類御事候、此方大和も高名被申、何事無之候、日輪様可爲御祝着候、大御所様ハ、八日ニ之や御歸洛之由候、旁討死之衆木田出雲殿、小笠原兵部殿、同信濃殿御果候由候、龜山伊勢龜山城之主松平忠明之家中ニても、菅沼七郎右、山田九右と討死由申候、萬事可被安貴意候、恐惶謹言、

鈴木平兵衛

五月十四日

定(花押)

進上 不動様

□□□

〔毛利家四考證〕

九十五上 中澤九郎左衛門所持

(守カ)

急度申上候、大坂御城之儀、昨日七日落去仕候、天家其外一二ノ丸不殘放火仕候、秀頼様爲被成御腹由申候、私事能折節參相候て、家中へ頸百四五十討

ハツ頃ヨリ暮マデニ戦終ル

取申候、七日ハツ時分及薄暮候迄ニ事澄申候、兩御所様御前之様子、今朝迄不致存知候、先以未明ニ遂注進候、今日中ニ承合、追々可申上候、此由可預御披露候、恐惶謹言、

甲州

五月八日

秀元

榎伊豆 御申候

〔細川家記〕

十四 忠興八

扱大坂落城之趣、忠利君并御國までも一紙ニ被仰遣

候、五月七日之御書、

急度申遣候、

一昨日六日、大坂より飯守之下と大和口とへ人數六七萬も遣候處、藤堂手ニ合戦候、首數多討取候、井伊掃部手、本多美濃手(忠政)ニ合戦候、首數多上り申候、大坂ニ物頭衆相果候、衆木村長門、後藤又兵衛、薄田(兼相)隼人ニ候事、

一今日七日午の下刻、大坂へ少々御よせ被成候處、茶白山より岡山まで取續七八萬も可有之候、此方之人數を立、此方よりひさの無理よ合

六日ノ戦

元和元年五月七日

七

元和元年五月七日

戦を掛候處、及一戰數刻相支候處、半分ハ此方、半分ハ大坂方勝ニ多候
ひつと共、此方の御人數一段數多又粗多とも數多有之ニ付御勝ニ成、不殘御討果被成候、度
々之せり合、中々推量之外ニ候、本田雲州も討死、小笠原兵部殿も手負
被申候、是ニ多可有推量候、我々事先書ニ申候哉、鐵炮頭三人、其外小姓
計ニ多、大坂へ參、合戰ニ多候事、

一 鎧つき申候者共、イ面々一番ニ七助、二番ニ縫殿助、佐藤傳衛門、甲付一本ニ吉住半四郎と有
之、敷三左衛門、甲付、佐方與左衛門、吉住半四郎、續勝助、右之鎧寄衆之を
の崩ニ成候處、七助、縫殿助兩人馬を入、あせき候多之事、

一 又其後大崩ニ成候刻、松井右近壹人として返し候處、酒井左衛門尉殿
も被見候、又左衛門殿小姓も、右近と返し、中程ニ多、又右近そえへ
返し候つる由ニ多、あせづを取申候、則右近ハ甲共ニ首を一つ取申候事、
一 七助鎧とさきをつきまけ申候、傳衛門も鎧二本のさきをつきまけ申候
事、

一 首壹ツ龜之助、首二ツ主水、首壹ツ志方半兵衛、半弓首一ツ朽木與五郎、
首三ツ主水内之者共取候事、

一時ノ内
天下太平

一 何れも殊の外手柄仕候事、
一 大坂之御城、天守も申之下刻ニ火あり、申候、不殘御果被成、一時之内
ニ天下太平ニ成申候事、
一 此狀内記被見候處、不草臥飛脚とやき者ニ持を、豊前へ可被差下候、取
紛書狀あきかき申候、已上、

五月七日

越 御判

内記殿	内匠殿
隼人殿	藏人殿
志主水殿	式部殿
中務殿	内膳殿
左馬殿	番かいら
馬之助殿	

此狀披見候る後、壽齋ニ渡り、まんへもよきあせ候へと可申候、

宗入老	小民殿
六兵殿	周防殿

元和元年五月七日

元和元年五月七日

小谷殿

あけゆ殿

宗イ九折形部殿い殿右之衆へも可申遣候已上、

又申候丹後うち死ふびんさ中々申えりも候ハを候以上、

又申候七太夫ハ御本陣ニ付置候故手ニえつれ候已上、

又申候我々小性ともまて手ニ逢候事申上候へハ大御所御前へ被

召出候是ニ仕合可有推量候已上、

五月十日忠興君大坂を御立十一日吉田よ御着此日御國へ被下候御返書

以上

去三日之書狀今日十一日於吉田披見候○中略秀頼母子自殺スルコト等ニ係ル

一先書ニハ不申候小笠原兵部殿同信濃殿討死よて候笑止千萬ニ候事

一信濃殿弟大學殿(忠政)ハ手をおりれ候へ共是ハ無何事候珍重ニ候

一右之歴々討死之所也大坂御小人町と申所近邊ニ候先書ニ申候我々

小性共え(ふか)の相候も同じ所よて候

一秀頼様右之所まで御出候つる其御先手之伊藤丹後青木民部ニ候

小笠原秀
政父子ノ
戦死

秀頼ノ出
戦

真田後藤
ノ手柄

此御人數ニ行當候ての儀ニ候我々小性共鎧ニ勝討死不仕事大慶之

上之大慶ニ候我々満足可有推量候青木民部ハ大御所様へ御使ニ

出子今被留候被居申候右之御先手ハ民部組中と聞へ申候事○中略

姫ノコトニ係ル

一大野修理手よき事無是非次第ニ候事

一さあ、後藤又兵衛手から共古今無之次第ニ候木村長門明石掃部も

手柄ニ候六日ニ討死し、殘頭々生死不知候事

一壽齋ニ申候此書中又左衛門ニよませ候、まんニきあをへく候、尙追

々吉左右可申候、恐々謹言、

五月十一日

越 御判

宗入へ申入候萬事此方の事御きつゝひ有ましく候、頓ニ罷下、茶

ゆ可仕候已上、

氏宗入老

長岡勘ヶ由殿

小笠原民部少輔殿

元和元年五月七日

元和元年五月七日

二

中路周防殿

小谷又右衛門殿

朽木六兵衛殿

同十五日、二通別紙壹通

報○本文ハ略ス、忠興京地ノ形勢ヲ在國老臣ニ
ズルコトニ係ル、本月十五日ノ條ニ收ム、

別紙ニ、

略○上

郡主馬 宗保、合戦之節、秀頼様御馬印をもち候て、御城より十丁計も
出候由申候、をえや惣敗軍ニ成候ニ付、御城へ持て歸候由申候、此
生死も不知候、

大野主馬 治房、大野道見合戰場よりふけたる由に候、定るやあてと
らへ可申と申候事、真田左衛門佐、於合戰場討死、古今無之、大手柄首
ハ越前宰相殿鉄炮頭取申候、乍去手負候て、草臥伏て被居候を取候
ニ付、手柄も不成候、

先書如申、木村長門、後藤又兵衛、薄田隼人、明石掃部前日之合戦ニ討

幸村ノ戦
功

東軍ノ醜
態

大坂方ノ
働

大坂衆ノ
手柄ノ勝
東軍ノ
ハ家康ノ
幸運ニヨ
ル

死、いづれもく無比類働共之由ニ候、此内明石掃部ハよけたると
云説も有之、

七日之合戦ニ、此方ききくの人數持、よげさるはまれに候、笑止あ
る取沙汰よて候、人ふより、平野、久不う寺、飯守までよけある者も有
之由ニ候、已上、

〔薩藩舊記〕

後集三十二 御文庫十七番箱十八卷中
家久公御譜中ニアリ、

口切ル、
一 今度大坂御城之衆合戦之様子、扱々昔にも今にも無比類手柄、筆紙ニ
く、かさく候、

一 真田左衛門、木村長門、後藤又兵衛、薄木田隼人、右四人ハ五月六日ニ討死

被仕候、古今稀ある働之由候事、○幸村ヲハ誤レリ、戦死

一 將軍様方之御旗元衆、何も諸大名被成逃候、關東衆ハ今度於御城其糺計
ニて候由承及候、

一 大坂衆手柄之儀、中く不及申候、今度之御勝ニ罷成候へども、大御所様
御運によき故ニて御勝ニ罷成候事、○中略、秀頼自殺スルコト、及ビ秀頼
ル、

元和元年五月七日

一三

長曾我部
盛親

藤堂隊
損害

井伊直孝
日本一ノ
大手柄

伊達政宗
ノ味方討

元和元年五月七日

一四

- 一 將軍様方之衆、御旗元ニ被成討死候衆書立進之候、
- 一 長曾我部殿六日之軍ニハ、度々大手ウラ被仕候、同七日ニ落被申候て、八幡ニてとらへ、二條御城之さくの木ニまもり付被召置、三條川原ニて御成敗候事、
- 一 東堂和泉守殿人衆五十人、長曾我部手前ニて、六日之軍ニうちとり候、東堂新七郎殿、同二右衛門尉殿御同名之衆四人討死候、其外和泉守殿家中ニてをくニ立不との人々者、不殘被遂戰死候由候、
- 一 井伊掃部助殿日本一之大手柄ニ候、御所方衆被申候、爲御褒美金五千枚銀千枚被給候、扱々外聞御取被成候、
- 一 和泉守殿も、金千枚銀千枚御知行二十萬石御給候事、
- 一 今度被成比興候衆ハ、皆々知行被召上候由候事、
- 一 伊達殿ハ今度味方討被申候事、雖然御前ハ能候へ共、諸大名衆笑物よて比興と之由御取沙汰之由候、ミウミ討ニ被逢候人ハ、大和之國衆神保長三郎殿と申ニて候、人數二百七十八人被召連候を、七騎ニ正宗殿うちまさまゝる由無其隱候、

加藤嘉明
黒田長政
ノ戦功

大野治房
同治風戦
場ヨリ逃

大野治長
ノ卑怯

- 一 松平上總守殿今度一番備ニて候處、合戦ニ御あいま候、連々の様子ニ相違候とて、始御所様諸大名下々ニ至迄取沙汰候事、
- 一 九州衆ニ、長岡越中守殿計えをニ被成御合、手柄候て、御前御仕合能候事、
- 一 加藤左馬殿、黒田筑前守殿兩人、御所様御旗元へ無御座候ハ、今度之軍御勝ニ罷成間敷候得共、兩人之手柄迄ニて勝ニ成候て、御前之御仕合無申計候、
- 一 大野主馬合戰場より落行候、于今行方不知、比興ものとして申ちらし候事、
- 一 大野道見ハ逃候處、方々被成御尋候へハ、豊國之敷板之下ニかくま居候を見出候て、搦とり籠ニ入置候、未成敗無之事、
- 一 今度軍之儀者、大野修理分別迄ニて候處、修理存分相違仕候、未練仕、散々躰ニ候つる由、中々可申様無之候、えてきハ比興之様子、古今有之まゝきとの取沙汰迄ニて候事、
- 一 秀頼様者殿主ニ火をり、何れ一人も不殘をけ死可被成御覺悟候處、修理存分相違、御姫様をたせ申候者修理も其御うけニて、命御たせ申候ハんと存、御姫様を才覺申、御城より出し申候へ共、將軍様御納得ニ不參、

元和元年五月七日

一五

元和元年五月七日

一六

皆々被成御切腹候如此候間、修理事永々失外聞候事、

伊東長次
高野ニ隠
ル
城中ノ内
應者ハ秀
吉ノ時ヨ
リ仕ヘシ
者

一於御城七日ニ野心衆伊東丹後其外之衆ハ不知候丹後ハ高野山ニ逃入
候又臺所仕候人野心よて臺所口へ火を懸候、御城燒立候、彼者ハ、太閤
様藤吉郎殿と申時より、御年來ニ被召仕候者ニて候へ共、謀叛いさし候、
う様成者さへ如此候間、此外ハ不及申候、○中略、片桐且元、同貞隆、卒去、ノコトニ係ル、

真田幸村
家康ノ旗
本ヲ衝崩
ス
真田日本
一ノ兵

一五月七日ニ御所様之御陣へ、真田左衛門仕り候て、御陣衆追ちらし
討捕申候、御陣衆三里不とつ、よけ候衆ハ、皆々いきのこらま候、三度め
ニさまともうち死にて候、真田日本一之兵、いよへよりの物語ニも無
之由、惣別こまのミ申事ニ候、

秀忠隊ノ
戦死者

大坂方將
士ノ行方

一將軍様御旗元討死衆、小笠原兵部少殿、同子信濃守殿、野一色頼母殿、本田
出雲守殿、松倉藏人殿、古田左近殿、服部作十郎殿、別所主殿殿、松平助拾郎
殿、松平彦九郎殿、同平吉殿、父子、安藤彦四郎殿、村藤四郎殿、米倉小傳次殿、
大久保内記殿、安藤次右衛門殿、山口伊豆守殿、合廿人、（重信）ハ六日若江ニ戦死セリ、
一御使番三原龜介、京迄逃候、長持之内ニ居申候ヲ聞付候へハ、内よて出
候て切相候、相果候、

東軍麾下
歴々逃下
シザル者ナ

一榎嶋玄蕃討死共申不知候事、

一仙石宗也ハ丹後へ逃申候由候へ共、未尋出候事、（弘定）

一大坂衆ニ手柄被仕討死之衆、山口左馬是ハ前之山口玄蕃子、木村長門守
ハ井伊掃部助殿被討捕候、○六日ノコト混ゼリ、

一御所様、將軍様御旗元七日ニ三度追立候て御驗を御かくし候處、何も歴
々不逃人ハ無之候處、傳長老、本多三彌殿兩人被罷居候由候、○中略、秀頼母子自殺ス

一七人之組頭之衆内御供衆四人、青木民部ハ今度御使ニ出候て、其譯被留
置候、御所方へ居申候、伊東丹後、中嶋式部兩人ハ落申候事、（儘ガ）

一湯淺右近、赤坐内膳行方不知候事、（直規）

右之通下々取沙汰仕候間書付進之候、又相違之儀於有之者、追る可申
下候、○中略、古田重然父子切腹ヲ命ゼラル、コトニ係ル、

六月十一日

慶長廿年

此一書寫アレトモ、文中前後之異同アリ、正文寫シテ載置也、世ニ所謂巨
細條書ト云此也、

元和元年五月七日

一七

元和元年五月七日

一同三十八 (上ナシ)	千本大和守	一同三十四 (石、上、三十七)	松平甲斐守
一同三十四 (上ナシ)	蘆駒藤九郎	一同三十三 (上ナシ)	伊王野又六郎
一同二十三 (石、三十)	大島一類	一同二十三 (石、二十三)	平岡平右衛門
一同二十一 (石、三十)	酒井左衛門	一同二十一 (上ナシ)	岡本宮内少輔
一同二十	酒井雅樂頭	一同二十	青山伯耆守
一同二十	石川主殿頭	一同二十	池田備中守
一同二十 (上ナシ)	伊奈組衆	一同二十七	牧野駿河守
一同二十七 (上ナシ)	稻葉内匠	一同二十七 (石、上、二十四)	高力左近
一同二十三	藤田能登守	一同十九 (石、上、三十)	稻垣平右衛門
一同十九	丹羽勘介	一同二十 (石、上、二十一)	秋山右近
一同廿六	小濱民部	一同十九 (上ナシ)	高木一類
一同二十 (上ナシ)	妻木雅樂	一同十七 (上ナシ)	尾里助右衛門
一同十六 (上ナシ)	遠山勘右衛門	一同十三	新庄越前守
一同十四 (石、四十)	細川玄蕃	一同廿一	松平阿波守
一同十七	松平石見守	一同十四	丹羽五郎左衛門

二〇

一同十四 (石、四十)	保科肥後守	一同十五 (石、上、二十五)	阿部備中守
一同十七 (上、十九)	松平越中守	一同十二	植村主膳
一同十二	松平將監	一同二十 (石、上、十三)	羽柴越中守
一同十一	仙石兵部	一同十三	山岡主計
一同十三 (石、十二)	堀尾山城守	一同十	稻葉衆家中
一同九	谷出羽守	一同十 (石、内、一ツ自分)	佐久間大膳
一同七	日根織部	一同七	西尾豊後守
一同六	遠山九太夫	一同六	山崎甲斐守
一同八	藤堂將監	一同七	別所豊後守
一同五 (上、八、内三家來討捕)	山田十太夫同心	一同六	佐久間豊後守
一同五 (石ナシ)	水野監物同心	一同六 (石、三)	井上主計同心
一同四 (石、外、二)	永見新右衛門	一同三 (上ナシ)	久貝忠三郎同心
一同五 (上、四)	淺野内膳同心	一同四	内藤帶刀
一同二	堀淡路守	一同二	脇坂淡路守
一同二	村越三十郎	一同二 (石、四)	奥田九郎右衛門

元和元年五月七日

二一

元和元年五月七日

一同二	加藤 右近	一同五	向井 將監
一同二	向井 半彌	一同五	水谷 伊勢守
一同一	六郷 兵庫	一同一(石ナシ)	本多 能登守
一同一	松平 出羽守	一同二(石、上ナシ)	小笠原 右近大夫
一同一	松平 越中守	一同一	水野 大和守
一同一	水野 淡路守	一同一(上ナシ)	酒井 阿波守
一同一	内藤 主膳	一同一(石、上ナシ)	菅沼 主殿助
一同一	阿部 修理	一同一(上ナシ)	安藤 式部少輔
一同一	松平 采女正	一同一(石ナシ)	大澤 侍從
一同一	松平 右近	一同一	松平 小太郎
一同一	小山 長門守	一同一(上ナシ)	成瀬 豊後守
一同一	屋代 甚三郎	一同一	桑嶋 孫六同心
一同一	駒井 次郎右衛門同心	一同一(石、二)	市橋 左京同心
一同一	成瀬 藤藏	一同一(上、二)	永井 信濃守
一同一	川口 左助	一同一(上ナシ)	三枝 源八郎

二二

元和元年五月七日

一同一	小栗 彦次郎	一同二	永井 傳十郎
一同一	土屋 左助	一同一(石、三)	安藤 平八郎
一同一	松平 作右衛門	一同一(上ナシ)	松平 與右衛門
一同一	渡邊 監物	一同一(石、二)	近藤 彦九郎
一同一	永田 權八郎	一同一(上、三、新九郎、四、三、新)	三枝 新九郎
一同一	本多 八十郎	一同一(上ナシ)	德永 出羽守
一同一	坂部 作十郎	一同一(上、三、稻垣藤十郎)	稻垣 藤十郎
一同一	久世 三四郎	一同一(石、上ナシ)	石川 勘助
一同一	細井 金十郎	一同一	小澤 甚右衛門
一同一	小澤 權之丞	一同一	戸田 藤九郎
一同一	石丸 權八郎	一同一(石、一)	曾我 喜太郎
一同一	渡邊 兵九郎	一同一(上ナシ)	安藤 傳十郎
一同一	鯨江 甚右衛門	一同一	青山 作十郎
一同一	安藤 治右衛門	一同一	伊藤 右馬助
一同一	服部 重兵衛	一同一(上ナシ)	今村 彦兵衛

二三

元和元年五月七日

兼松源兵衛	一同	(上ナシ)	青山石見守
駒井右京	一同	(上ナシ)	松前準人
中山勘解由	一同	(石ナシ)	中山助太郎
跡部民部	一同		牧野織部
日根長五郎	一同		曾我十兵衛
前島三郎	一同	(石ナシ)	鈴木市藏
市橋左京	一同	(上ナシ)	今村傳十郎
加藤伊織	一同	(上ナシ)	同
駒井次郎右衛門	一同	(石、一駒井次郎左衛門)	佐橋次郎左衛門
佐保長兵衛	一同	(上、甫保(石、保科))	木造七左衛門
堀三右衛門	一同	(石ナシ)	戸田又八
遠藤平右衛門	一同	(石、上ナシ)	蜂屋六兵衛
戸田平兵衛	一同	(石、小兵次)	大久保新八郎
今村傳右衛門	一同	(石、上ナシ)	戸田山三郎
門奈半十郎	一同	(石、門名半十郎(上、門奈半七郎))	鎮目長四郎

二四

大久保六右衛門	一同	(石大窪)	野山新兵衛
井伊次郎兵衛	一同	(石、上ナシ)	服部甚五左衛門
新木甚助	一同	(石、新城甚介(上、新庄勘介))	岡部七之助
井戸左馬	一同	(石、左馬助(上、井上左馬介))	平岩金五郎
岡部庄九郎	一同	(石、正九郎)	酒井長左衛門
佐橋兵三郎	一同	(石、平二郎)	本多傳三郎
山上長次郎	一同	(石、長三郎)	加藤權右衛門
廣橋半十郎	一同	(石、上ナシ)	天野甚太郎
宮崎左馬	一同	(石、上ナシ)	朝比奈六左衛門
中根權六郎	一同	(上、權三郎)	中川兵之助
渡部孫三郎	一同	(石、上ナシ)	布施八右衛門
押田庄吉	一同	(石ナシ)	小野源十郎
高田數馬	一同	(石、正二郎(上、小次郎))	戸田藤五郎
渡邊半兵衛	一同	(石、牧野)	伊丹佐次右衛門
大橋兵右衛門	一同	(上、六右衛門)	大橋金彌

元和元年五月七日

二五

元和元年五月七日

一同一 (石、一)	小河三太郎	一同一	細井長左衛門
一同一	高倉惣十郎	一同一 (上ナシ)	中川市之助
一同一	市岡太左衛門	一同一	石尾六兵衛
一同一 (石、上ナシ)	部府忠兵衛	一同一 (上ナシ)	天野源藏
一同一 (石、上ナシ)	逸見庄兵衛	一同一	小野淺右衛門
一同一 (上ナシ)	山本才兵衛	一同一 (石、上ナシ)	真田半兵衛
一同一 (上ナシ)	佐久間信濃	一同一	坪内五郎左衛門
一同一 (上ナシ)	諏訪部小太郎	一同一 (上外ニ五 同家來捕)	淺野内膳
一同一 (石、一)	羽柴勘右衛門	一同一 (上ナシ)	荒川又六
一同一 (上三)	朝比奈孫太郎	一同一 (上ナシ)	坂部文五郎
一同一 (上ナシ)	坂部權十郎	一同一	逸見小四郎
一同一 (上ナシ)	窪田勘太郎	一同一	御手洗五郎兵衛
一同一	山本與九郎	一同一 (上ナシ)	鵜殿右衛門
一同一	原九郎右衛門	一同一 (上ナシ)	原左平次
一同一 (上ナシ)	富永喜左衛門	一同一 (上ナシ)	山田清太夫

二六

一同一 (上ナシ)	齋藤三右衛門	一同一 (上二)	中島長四郎
一同一	小笠原角左衛門	一同一 (上二)	井上外記
一同一 (上ナシ)	田村兵藏	一同一 (上ナシ)	田代養元
一同一 (上ナシ)	芹澤又右衛門	一同一 (石、上ナシ)	桑嶋源八
一同一	佐佐與右衛門	一同一	森川金右衛門
一同一 (石ナシ)	片山二七郎	一同四 (石ナシ)	名倉兵九郎
一同四	青山大藏	一同一 (石、二)	神尾刑部
一同五 (上ナシ)	尾代甚三郎同心	一同七 (上ナシ)	三枝源八同心
一同五 (上ナシ)	中山勘解由同心	一同二	水野太郎作同心
一同二	内藤若狹同心	一同一 (上ナシ)	成瀬豊後同心
一同三 (石ナシ)	溝口外記同心	一同一	伊丹喜之助
一同二 (上二)	永見新右衛門同心	一同二 (石、二近藤勘右衛門アリ)	羽柴勘右衛門同心
一同二 (上四)	近藤石見同心	一同二	青山善四郎同心
一同八 (石ナシ)	青山主膳同心	一同一 (石、八)	曾我喜太郎同心
一同一 (上ナシ)	伊藤右馬同心	一同一	猪子久左衛門同心

元和元年五月七日

二七

- 一同一 (石ナシ) 中川牛之助同心 一同一 井上清兵衛同心
- 一同一 (石木作)上七右衛門 木造七左衛門同心 一同一 牧野傳藏同心
- 一同一 (石、上ナシ) 宮崎左馬同心 一同一 牧野豊前同心
- 一同一 (上ナシ) 渡邊監物同心 一同一 (上一水野隼人手) 水野隼人同心
- 一同一 (石河邊彌市郎)上彌一耶手 阿部彌六同心 一同一 (石一) 岡田木工之助同心
- 一同一 (石、上ナシ) 今村傳四同心 一同一 (上ナシ) 榊原左衛門同心
- 一同一 (石、上ナシ) 大橋金彌同心 一同一 (上ナシ) 服部兵吉同心

○以上注記シタルモノ、外、尙、駿府政事録ニ見エズシテ、石母田文書
 及ビ文學博士上田萬年氏所藏大坂御陣首帳ニ存スルモノアリ、左ニ
 掲載ス、

〔石母田文書〕

- 一五〇 桑山修理亮手 一八 土方掃部頭手
- 一七 松平伯耆守手 一四 諏方小太夫手
- 一二十 真田河内守手 一〇 片山主水 越前衆
- 一十四 松平丹後守手 一十 別所孫次郎手

- 一七 桑山左近太夫手 一二 羽柴美濃守手
- 一四十二 淺野但馬守手 一一 山崎權八郎
- 一二 高藤五郎 一一 天方主馬介
- 一三 加藤傳兵衛 一一 高井五兵衛
- 一一 内藤彌一郎

〔上田大坂御陣首帳〕

- 一 頸百 花井主水正 一同三十二 福原雅樂頭
- 一同十九 杉原伯耆守 一同十 別所孫四郎
- 一同八 土方掃部頭 一同七 桑山左近將監
- 一同五 前田大和守 一同二 土方丹後守
- 一同一 成田内記 一同十六 大田原出雲守
- 一同十八 平岡左近將監 一同二 黒田木工介
- 一同二 近藤五左衛門 一同一 加藤傳兵衛
- 一同一 山崎權八郎 一同一 大澤右京進
- 一同一 作間民部少輔 一同一 高田藤五郎

元和元年五月七日

三〇

一同一

天方主馬介

一同一

牧野傳兵衛

〔大坂首實見帳〕

(表紙)

慶長貳拾年乙卯

大坂御陣首實□□

日

大坂御陣首實見覺

一頭五ツ	水谷伊勢守	一同六拾ツ	淺野采女守
一同貳拾八ツ	鳥井土佐守	一同貳拾四ツ	高力左進 <small>(近)</small>
一同壹ツ	水野伊織	一同三ツ	新庄越前守
一同百五ツ	本多縫殿介	一同四ツ内目置壹ツ内藤帶刀	
一同貳百五拾三ツ	本多美濃守	一同百 <small>(此内貳ツ)</small>	同 <small>(當)</small> 氏 <small>(沼)</small> 織掃部
一同拾三ツ	堀尾山城守	一同七十三	松平下總守
一同貳百拾七ツ	本多大隅守	一同貳ツ	阿部修理
一同貳ツ	中川午之助	一同三ツ	溝口外 <small>(記)</small>
一同壹ツ	佐々與右衛門	一同壹ツ	大橋六右衛門 <small>(内之衆)</small>

一同壹ツ	大橋金彌	一同壹ツ	同人家來
一同壹ツ	勝部神五左衛門	一同壹ツ	江原九右衛門
一同壹ツ	江原左平次	一同壹ツ	松平作右衛門
一同壹ツ	山本與九郎	一同壹ツ	鎮目長四郎
一同壹ツ	大久保新八郎	一同壹ツ	門名半十郎
一同壹ツ	高尾惣十郎	一同壹ツ	細井長左衛門
一同壹ツ	久保田勘太郎	一同貳ツ	朝比奈六左衛門
一同壹ツ	中根權六郎	一同壹ツ	押田庄吉
一同壹ツ	御手洗五郎兵衛	一同壹ツ	逸見小四郎
一同壹ツ	内藤權右衛門	一同壹ツ	天野神太郎
一同貳拾壹	秋山右近正	一同四ツ	奥田九右衛門
一同貳ツ	村越三十郎	一四拾貳ツ	本多左京亮
一同拾貳ツ	羽柴越中守	一同貳拾六ツ	小濱民部少輔
一真田左衛門佐者	<small>越前少將殿家來</small> 西尾久 <small>討捕</small> 作	一御宿勘兵衛	野本右近正討捕
一頭三千六百五拾ツ	越前少將殿	一同拾九ツ	丹羽勘助

元和元年五月七日

三一

元和元年五月七日

三二

一同七拾四ッ 牧野駿河守
 一同百五拾貳ッ 金森出雲守
 一同六拾七ッ 小出信濃守
 一同百七十七ッ 小出大和守
内九ッ伊東掃部討捕
 一同三千貳百 松平筑前守
 一同貳ッ 羽柴美作守
 一同八ッ 近藤石見守
家來
 自是御旗本衆
 一同六ッ 遠山久兵衛
 一同貳ッ 青山善四郎
 一同三百七ッ 京極若狹守
内壹ッ池田左市討捕
 一同十四ッ 松平丹後守
文字知不申候
 一同五拾七ッ 松平駿河守
 一同八拾七ッ 堀丹波守
 一同百十七ッ 桑山左衛門
 一同貳拾七ッ 本多出雲守
 一同八百廿五ッ 松平陸奥守
 一同三百十五ッ 伊井掃部助
 一同四拾貳ッ 淺野但馬守
但一拂也
 一同貳ッ 脇坂淡路守
 一同六ッ 佐久間備前守
 一同三拾壹ッ 千本大和守
右但拂之首砂二而打捕
越後少將殿家來
 一同百ッ 花井主膳正
 一同貳ッ 堀淡路守
家來
 一同貳ッ 向井半彌
 一同四拾七ッ 小笠原兵部正
 一同九拾七ッ 水野日向守
 一同拾ッ 別所孫次郎
 一同拾三ッ 山岡主計

一同五拾三ッ 板倉豐後守
 一同七ッ 桑山左近大夫
 一同貳拾壹ッ 松平安房守
此内壹ッ内記
 一同七拾ッ 成田左馬助
此内貳ッ加藤左近兵衛
 一同貳百六ッ 羽柴左近正
 一同三拾ッ 稻垣平右衛門
 一同六ッ 山崎甲斐守
 一同四ッ 諏訪小右衛門
 一同廿七ッ 真田河内守
 一同貳拾五ッ 阿部備中守
 一同壹ッ 小野源七郎
 一同壹ッ 山木才兵衛
 一同壹ッ 富永喜左衛門
 一同貳ッ 坂本久五郎
 一同壹ッ 山上長次郎
 一同八ッ 藤堂將監
 一同拾ッ 佐久間大膳正
此内壹ッ目遣信濃守
 一同拾九ッ 杉原伯耆守
 一同貳拾七 酒井出雲守
 一同三拾ッ 石川主殿助
 一同三拾ッ 池田備中守
 一同十四ッ 細川玄蕃正
 一同三拾ッ 關長門守
 一同五ッ 向井將監
 一同貳ッ 渡邊孫三郎
 一同壹ッ 酒井與左衛門
 一同貳ッ 坪内五郎左衛門
 一同壹ッ 中嶋長四郎
 一同壹ッ 坂本權四郎
 一同貳ッ 今村傳右衛門

元和元年五月七日

三三

一同壹ツ	松平與右衛門	一同壹ツ	遠山平右衛門
一同壹ツ	戸田平兵衛	一同壹ツ	蜂屋六兵衛
一同壹ツ	古橋長次郎	一同壹ツ	戸田山三郎
一同壹ツ	天野源藏	一同壹ツ	平石金次郎
一同壹ツ	逸見庄兵衛		
一同三ツ	久貝忠次郎	奥山三左衛門	浦久兵衛
一同壹ツ	新庄神助	一同壹ツ	小栗勝次郎
一同壹ツ	戸田藤九郎	一同壹ツ	野々山新兵衛
一同三ツ	安藤與八郎	一同貳ツ	伊東右馬亮
一同壹ツ	戸田小次郎	一同貳ツ	高田小次郎
一同壹ツ	高田藤五右衛門	一同壹ツ	桑倉兵九郎
一同貳ツ	永田權八郎	一同壹ツ	森川金右衛門
一同貳ツ	岡部七之助	一同壹ツ	都筑又兵衛
一同壹ツ	松平小次郎	一同壹ツ	永井信濃守
一同壹ツ	德永出羽守	一同四ツ	青山大藏家來

一同壹ツ	本多出羽守	一同壹ツ	大澤侍從
一同壹ツ	石尾權六郎	一同壹ツ	堀三右衛門
一同壹ツ	青山作十郎	一同四ツ	永見新右衛門
一同貳ツ	永見新右衛門	一同七拾三ツ	德永左馬助
一同七ツ	日根織部	一同拾貳ツ	植村主膳正
一同八ツ	土方掃部	一同貳ツ	土方丹後守
一同拾九ツ	松平越中守	一同貳拾三ツ	藤田能登守
一同三百貳ツ	羽柴丹後守	一同拾貳ツ	松平將監
一同三拾四ツ	松平甲斐守	一同六拾六ツ	遠堂但馬守
一同拾四ツ	丹羽五郎左衛門	一同拾壹ツ	仙石兵部大夫
一同十ツ	保科肥後守	一同壹ツ	阿部但馬守
一同四拾ツ	一柳監物	一同五拾ツ	金部左京
一同六拾壹ツ	古田大膳亮	一同百五ツ	毛利甲斐守
一同三拾ツ	青山伯耆守	一同壹ツ	六郷兵庫頭
一同六百廿一ツ	松平武藏守	一同七ツ	別所豐後守

一同五十七ツ	有間玄蕃頭	一同拾七ツ	松下石見守
一同四拾四ツ	秋田梶之助	一同百九ツ	加藤式部將
一同七ツ	西尾豐後守	一同拾ツ	稻葉 ^本 左夫
一同九ツ	谷 ^本 出羽守	一同七拾八ツ	榊原遠江守
一同三拾ツ	酒井樂 ^本 雅助	一同壹ツ	鈴木市之丞
一同壹ツ	前嶋十三郎	一同壹ツ	高井五兵衛
一同壹ツ	保々長兵衛	一同壹ツ	市橋 ^左 京
一同壹ツ	市橋 ^左 京	一同壹ツ	本多傳三郎 ^{家來}
一同貳ツ	水野五郎 ^{家來}	一同壹ツ	井上德兵衛
一同貳ツ	内藤若狹 ^{家來}	一同貳ツ	伊丹左次右衛門
一同壹ツ	加藤伊織 ^{家來}	一同壹ツ	加藤久次郎
一同壹ツ	松前隼人	一同壹ツ	駒井 ^右 京
一同壹ツ	朝比奈孫市郎	一同壹ツ	服部十兵衛
一同壹ツ	神尾刑部 ^{家來}	一同壹ツ	今井傳十郎
一同貳ツ	安藤傳七郎	一同壹ツ	井戸左馬之助

一同壹ツ	猪子久左衛門	一同六ツ	安藤次右衛門
一同壹ツ	廣戸半七郎	一同壹ツ	中川午之助
一同壹ツ	跡部式部正	一同壹ツ	駒井次郎左衛門
一同壹ツ	戸田藤五郎	一同四ツ	淺野内膳正
一同五ツ	淺野内膳 ^{家來}	一同壹ツ	水造七右衛門
一同壹ツ	木造七右衛門 ^{家來}	一同壹ツ	宮崎左馬之助
一同壹ツ	牧野傳 ^{家來}	一同壹ツ	戸田又八郎
一同壹ツ	小澤午右衛門 ^{家來}	一同壹ツ	小澤權之丞
一同貳ツ	井上外記	一同貳ツ	小川左太郎
一同貳ツ	屋代神三郎	一同四ツ	屋代神三郎 ^{家來}
一同同ツ	三枝源八郎	一同七ツ	三枝源八郎 ^{家來}
一同壹ツ	栗嶋孫六郎	一同壹ツ	栗嶋孫六郎 ^{家來}
一同貳ツ	中川勘六郎	一同壹ツ	中川勘六郎 ^{家來}
一同五ツ	中山勘解由	一同五ツ	中山勘解由 ^{家來}

頭數惣合壹万三千六十壹何後甲首也

元和元年五月七日

右是ハ

慶長廿年乙卯五月九日

菅原之朝臣織茂

七兵衛尉小市

重

元印

右大坂首實見帳一冊得多摩郡連光寺村里正富澤氏所藏走筆寫之

○茶白山方面ノ戰況其一先鋒本多忠朝竝ニ其組

〔譜牒餘錄〕

二十九

本多中務大輔一

忠朝内記出

略○上 元和元年五月七日大坂合戰忠朝深進攻戰與森豐前守兵相當數回與

敵二十人計執鎧爭進忠朝下馬獨立與二十人計力戰遂討死家人小野勘解由大屋作左衛門等戰死於忠朝左右白杵七兵衛加藤忠左衛門中根權兵衛山崎半右衛門石川半彌大原長五郎村越茂兵衛青山五左衛門藤平次右衛門土橋加兵衛土屋太郎八稻毛市郎兵衛等一所討死勾坂若狹守大原物右衛門柳田左馬允石川金彌窪田傳十郎近藤五郎右衛門小森勘左衛門門田

本多忠朝
隊戰關概
況

忠朝組
諸將

忠朝天王
寺ニ向フ
裝

愛馬百里

次太夫杉浦墨右衛門河崎市右衛門宇佐美小右衛門内藤五郎作被疵凡忠朝一手得首七十餘級以獻之其餘擊敵者甚多忠政依大權現仰授感狀於窪田傳十郎大原物右衛門柳田平兵衛山本只右衛門小鹿主馬助等五人是皆能戰合鎧者也時忠朝年三十四

〔參考本多系傳〕

四

忠朝出雲

天王寺口

先陣本多忠朝同六日の夜半

過る頃合備の秋田城之助實季真田河内守信吉同大内記信政松平石見守重綱六郷兵庫頭政乗淺野采女正長重植村主膳正御目付須賀攝津守等よ追付出勢いさばべしと觸廻し其身も支度をとゝのへて一同ハ八尾を打立四里の道を夜の中ハ押して天王寺にこそ着れりなれ

ある古筆記よ云忠朝其日の出立よを緋威の鎧よ忠信の兜を着淺野長重ガ贈りさる江戸三寸と名付し馬よ乗り鐵の棒を馬前よもとせ水色

よ本の字と立葵の紋付さる旗よ銀の三團子の馬驗おし立さり
扱忠朝は百里と名付さる愛馬よ跨りて出立しよいあッしなん四足を折て倒ましあを諸鎧を合て蹴立さりはそれ又故もあく倒れよより忠朝怒て蹴立るを三宅軍兵衛見兼ねん舎人を願疾く沓滾うてといふ忠朝益

元和元年五月七日

三九

三八

元和元年五月七日

四〇

怒て、物前よ沓をうつ法やある、憎やつめと舎人をぞ叱りたる、馬兩度まで
四足を折て、主人の凶事をやゑらしたん、去程よ本多、秋田、真田、松平、六郷、淺
野、植村の軍勢ハ、越前勢よ並んで段々よ備を立、大神君の御着陣を待ほど
よ、明きを七日の辰の刻とぞおりさりたる、最早矢合よ間もあるまじと、忠
朝兜を執て着、忍緒を直結よして、端を切てすてしあを、家士等討死の覺悟
を察しさり、

忠朝ノ覺悟
鹿角ノ立物

御武功聞書よ云、其日忠朝が着さりし兜の立物、黒の鹿の角の一方拔落
さり、小姓大原長五郎拾取て立んとするを、忠朝無用なりと制し、例の金
の最多角もあけざりなり、守城九右衛門井云、岡崎の君の御家よある映
世靈神の御像ハ、大神君、豊臣家と御和睦の後、
映世靈神の御武者振をみそさせ給んと、のたまふにより、御物具召さ
れ、伏見の城よて見參よ入り給ひしを、繪師何某摸寫せしる圖よて、御首
よ金の最多角の珠數を懸せ給ふと、彼の御内人栗本半次、山岸安宅
よ物語よ聞たり、因ておもふよ、靈神を始三光院殿も、御出陣ことよ珠
數を懸給ひしこと明けし、扱ある文意のことと見る時、今こよ、例
よ馬そをへく落さる時、長五郎件の鹿の角をぞ立さりたる、忠朝いさく
いれさる体ありしと、其時供なする宇佐美小右衛門常々物語しとぬ

忠朝ノ備

忠朝え、左よ小高た岡、右よ四十間余の埴田フタタを受けて備へしことぬれを、惣軍
より一たえ出張てえよなり、惣手の軍監安藤直次金の打拔よ黒た折懸
付さる指物をさし馬を乗、付雲州の備出過さりと云、忠朝張出さる備を
跡へ引て立んこといと難義よ候、餘の備を張出されよと答ふ、直次、尤あり
と云て、合備を押し出してぞ立させたる、あくて忠朝え、猶も先足輕に下知し
て張出に、左の先陣さる越前勢是を見るより、物見武者四五騎を出し、馬足
輕を懸しあを、水野勝成いらつて、大和組の先陣よりも、馬足輕を出せよと
指揮しさり、忠朝が下知よより張出しさる足輕、疎懸よえしあを、小野
勘解由あゝる足輕の並居マダテばまこそ心得絲、忽破らるべしと申に、忠朝、吾次
第なりといひて耳にも入、勘解由、口脇の黄ある殿の何を差り給ふやと
嘲る時よ加藤忠左衛門進出、この足輕の並居マダテ様ハ軍とはええ、大田喜よ
て鹿狩し給ふ時の勢子並よけも似さり、あれよ見ゆるえ忠左衛門の足輕
よ、誠よ戰よ向ふ有様ありと打笑ふ、忠朝憎詞哉とて、眉尖ナギナ刀を提てあゝり
しあば、勘解由を、唯今討死して見せ申さんといふて、右の方へそびれ行、忠

小野勘解由
左衛門忠朝
難備立

元和元年五月七日

四一

元和元年五月七日

四二

左衛門を肩尖刀の鐙よて叩かれ落馬なし、大い腹を立、某も討死して御目
 よあけんといふて、己が備へ馳行なり、時よ城將毛利勝永が組黒半月一様
 の指物よて、四千騎どつと押来り、ひさくと折敷く、其形杉先あり、物際二
 十間をありにええなり、後の時を打し、四十間の物際あり、此の時供
 りと、久世三左衛門物語りぬ、味方の軍兵も一同は押詰て折敷し、忠朝
 が先足輕早鐵炮を打こと頻あり、中略、落穂集
 出雲守ぬらえこらゆべき、持足輕に采幣をあげ、日頃の稽古を此時ぬる
 ぞ、小姓共を乗越て、鐵炮をうてよくと呼えりしあを、我もくと筒先を
 向て進みさり、此時窪田傳十郎朱の提灯の指物をさし、ことせり云て三宅
 軍兵衛と共に真先を槍を合せ、一番首をぞ取りたる、然るは張出したる
 持足輕敵の數鐵炮よ打立ち、七十余人將基倒し倒れしあを、殘兵根備へ
 崩まゝる、茂、忠朝下知して小姓をさつと開あせ、敗走する持足輕をやり
 過し、追來る敵の左右より突かゝる、窪田傳十郎、大原物右衛門、柳田左馬介、
一説は平兵衛とあり、山本只右衛門、原田四郎兵衛、榊原加兵衛等槍おつとりて立向
 ふ、軍奉行小鹿主馬紫の母衣をあげ、川原毛の馬よ乗り、采幣打振、若武者共

よ、槍を早きぞ鐵炮を打にべしと呼えりくと馳廻まど、傳十郎、左馬介、物右
 衛門、只右衛門、四郎兵衛、加兵衛等耳よも入に突入り、敵を秋田、真田、松平
 以下の備へぬされあゝを、押立ちまて越前勢の右の方へ敗北に、小笠原
 秀政、同忠脩、安藤直次、酒井家次、榊原康勝、保科彈正、忠正直、松平安房、守信孝、
 松平甲斐、守輝綱、牧野駿河、守忠成、松平丹波、守康長、稻垣攝津、守重綱、水谷伊
 豆守等崩る、味方の間より、鬨を作て勝永を始引續たる、淺井周防、守竹内
 永翁等が兵へ討てあゝる、忠朝を合備の敗走するをみて大い怒り、百里を
 蹴立て、眞一文字よ駈出に、大屋作左衛門一時徒士の者二十人あり附添
 さり、然るは小野勘解由を疾く敵中へ斬て入、二十間をありあゝみて大
 勢よ取りまあれ、散々に血戦に、忠朝、あれ討すあと呼えれを、徒士の者承り
 候とて五六人馳向ふ間、早勘解由は槍玉よあげられさり、忠朝是を見る
 より、本多出雲守こゝ、あゝりと呼えりて斬て入る、毛利の手よ屬する城
 方の物頭雨、森傳一説は傳を左衛門、中川彌次、右衛門、徳永甚、右衛門以下七
 八人、唯今名乗るを、出雲守よ、あゝますぬと云儘、透間もなく掛りしあを、忠
 朝持槍、茂呼べともつゝあゝに、數槍の有しをおつとりて突伏々々戦ひしよ、

元和元年五月七日

四三

元和元年五月七日

四四

紺の羽織着る足輕二間をありに詰寄せ、二玉よて臍の上を後へあなて打抜さり、けされちつともひるまば馬より飛下り、彼足輕只一太刀よ斬殺し、舍人よ持せし鐵の筋金入る鼻緒ぢを左よ持一説は、此時持槍を持ととり、右よ刀を提敵七八人斬伏せ、猶も大勢よ渡合ひ、散々よ戰て痛手を負こと廿餘所よ及びるを、逃る敵を追、小溝を飛越えんとし、倒れり、大屋作左衛門、主人の首をとらせじと、其上よもされり、刀を振廻して防げどもあひあひさく、斬死をぞ取し、さりなる、因て首を雨森傳左衛門に取らまさり、一説は、首を取る者指物は中川彌次右衛門分捕あし、とぞ、中略、御武功開書、大坂軍記ヲ載セタリ

假字文御家譜よ云、忠朝蜻蛉斬を執て、毛利の大勢と天王寺よて戰ひ、遂よ深入して馬をも乗放ち、歩行立よ成て、猶も二十余人と血戦し、討死をこそ取し、さりなれ、中略、小幡景憲書、物書抜ヲ載セタリ

或古筆記よ云、忠朝あ首取る雨森傳左衛門ハ、千石取て足輕五十人の頭あり、後よ本多家へ仕へて六千石取しりと云、守城云、大乾院殿、忠の御代の分限帖よ、雨森の名よゆ、さそれうけひあつたことあり

小野氏筆記よ云、大屋作左衛門、主人忠朝の屍よ、左の手をあけて討まし、死後よも猶放さざりしとぬん、いとあれある志なり、

去程よ、東國方戰勝て、洪水の溢る、あごとし、忠朝が從兵も、惣軍よ打交て、城際まで押詰し、主人忠朝天王寺口よて討死あし、さるよ追々よ聞えしあを、取返し、さり、然るよ日高太郎右衛門、忠朝の屍を百里の鞍坪よあけて、平野の方へ引て行よ出逢て、いづれも泣々供をこそあし、さりなれ、あくて、大神君の御馬前を通る時見そぬえし、御涙を流させ給ひ、さり、鼻を欠て、衛門退口急よして、忠朝が首を捨さり、直折の腕貫よく、り、鼻を欠て、沼の中よ投込てありしを、忠朝が從者拾取てぞあへりなる、

或古筆記よ云、忠朝の屍を馬よ乘て引取る時、窪田傳十郎引違て、主人の討死の場へゆた、兜の立物三團子の地よ碎落るを拾取て、り、

こは大坂城代與力古老の者の物語あり、

勸解由、作左衛門を初、加藤忠左衛門、藤平治右衛門、白杵七兵衛、中根權兵衛、石川半彌、山崎半右衛門、大原長五郎、村越茂兵衛、青山五左衛門、土橋喜兵衛、土屋太郎八、稻毛市郎兵衛、一説は、市兵衛等、忠朝の前後に於て討死、窪田傳

元和元年五月七日

四五

元和元年五月七日

四六

十郎、匂坂若狹、石川金彌、近藤五郎左衛門、小森勘右衛門、門田治太夫、杉浦墨右衛門、川越市郎兵衛、内藤五郎作、宇佐美小左衛門等ハ、血戰して痛手をそ負さりたる、軍終て後、大神君、美濃守忠政を召され、同苗出雲守討死いとし、こと頗る御残念よし、思食に旨仰下されり、又仰よよりて、出雲守が從兵の軍功を穿鑿あり、窪田傳十郎、大原物右衛門、柳田左馬介、山本只右衛門を、晴ある槍を合せ、小鹿主馬を能く下知ありされを、五人の者へ忠政より感狀を與り、三宅軍兵衛も眞先駈て進み、敵太刀を提て立向ふ、槍よて勝負せんも口惜とおもひ、太刀よりへて斬り、小鹿是を聞て、太刀よもゐれ、眞先駈ての働は一番槍と同じと申により、忠政猶も穿鑿して、一番槍よつたし、手柄とこそ成りたる、原田四郎兵衛、榊原加兵衛守城兵衛ハ御旗本も、皆諸共槍を合するよ、四郎兵衛ハ年頃忠政の氣よ違ひの流人あり、遠槍の部に入しあを、大に怒て本多家を立退り、加兵衛も其功ゐらされざりしや、是も同立退て、後紀伊家よ仕へたりとぞ、略○中

忠朝ノ法
號及墓所

元和元年乙卯五月七日、攝津國大坂天王寺村よ於て討死、時よ年三十四歳、諡三光院殿前雲州岸譽良玄大居士、同所坂松山一心寺よ葬る、まゝ和泉

國阿部野よ忠朝の古墳と云傳るものあり、東西一間余、南北三間をくり、土を小高く積て廻りよ石垣あり、松二本生出ぬ、

或古筆記よ云、

一 忠朝が指物紫の撓シヤヒまゝ紅白段々まゝ朱塗の竿よ一尺五寸四方の白

地の絹よ本の字を書るをつく、

一 馬驗銀の二階桔梗笠まゝ銀の三團子まゝ銀の七本刷牙を用ゆ、

一 幟を中黒、

一 兜の立物鹿の角、父忠勝より譲りたる忠信の兜を生涯着さりしとぞ、
武將感狀記よ云、忠勝病床へ宿老松下河内を招きて書置茂渡し、美濃守忠政ハ嫡子ぬれを遺跡を繼んこと公方の命のまゝなり、武器馬具ハ云よ及むば、茶器よいさるまでも盡、美濃よ讓を吾まゝ黄金一万五千兩を諸おきぬ、二男出雲守忠朝ハ小身なまば、此黄金を與よと遺言して卒しさり、河内よ一を忠政よいふ、美濃守氣色をあらへ、親の遺跡を嫡子の繼がらんハ勿論あれを遺物も亦嫡子の有ること誰論べき、縱令書置ありとも非理よを従えじとて黄金を封じて忠朝よ與る色あし、河内詮

元和元年五月七日

四七

元和元年五月七日

方あくて忠朝よ告さり、忠朝、いやとよ、吾を小身あれを金銀の用廣あら
 ば、濃州を家元のこと多く士を扶持し給ふより、費用多ぶ上、世變軍務
 よ備ん用金もまゝ少あらば、先君吾を愛し給ふ故よあくのむとし、唯
 ヲ御遺言こそかゝむけあられ、金子ハ義よ於て受べきにあらばと申
 り、河内此こと茂忠政よいふ、美濃守大よ愧て、金を忠朝よ與れども、出雲
 守固辭に、忠政先君の御遺言よ違えんといふ、ありといふ、忠朝、さの
 まふをいあむよあらば、二男の身として家元の財を専よすべきに
 あらばと云て、兄弟互よ譲あふ、一門の人々是を感じ、黄金を二ツよ分、半
 を忠政半を忠朝と定さり、出雲守、先其裁判よ任せ、急用あらんずる時申
 受んと云て、封をも解ば、忠政の倉よあき、身を終るまで一金も取らざり
 しとぞ、一説は、大坂の軍起りし時、忠政軍用よ件の金子を渡さんと云、忠朝、他より借りて、早ことをすまぬと答て、一金も受ざりしと云、
武將威狀記ハ、便宜本書引用ノマ、ニ從ヒ、別ニ原本ニヨリテ掲載セズ、
 或古筆記よ云、忠朝、右の先陳前田利常の備の前よ馬を止め、水一とべと
 いふ、前田の士山村治兵衛、一説は、次郎兵衛とあり、承り候とて水を出ば、忠朝快吞
 終て、身を本多出雲守あり、故有て討死すといひすて、乗切さり、治兵衛

あくと利常よ云、前田下知して、それ止めよと追々人を出し、よ、早遠
 く乗切て後影よよえざりたり、然るよ忠朝が家士打連々々駈來り、雲
 州を通らるゝと尋ねしとぞ、此物語よつれて、深き由へよあり、そは
 能登守忠義の家士よ中根平左衛門といふ者ありしが、幼少なる子を殘
 し、壯年よて身まありさり、其子人と成しよ、足の病有て、武士よありあ
 り、因て醫師の修行して、名を玄孝とぞ申る、後よ因幡國鳥取の城主松
 平相模守光仲よ仕へて、祿五百石よ二十人扶持食しぬ、玄孝ある年攝津
 國有馬の温泉へ赴しよ、加賀國金澤の家士山村治兵衛と云者よ出逢ひ、
 いつとまゝ親しく成て、旅亭の徒然よ、玄孝故郷のことをとせば、あ
 になりたりたり、治兵衛聞て、あれを御身を本多家より出給ひし人あ
 と問ふ、はありと答しあを、山村手を拍て大よ喜び、さゝく、不思議よ廻
 り逢ひさるものなるあ、こと永くとも聞給へ、亡父よて候治兵衛を、大
 坂御陳の時、故雲州公へ水を奉りし者ありとて、其時のこと、も落まく
 物語り、扱此事蹟を本多家よて誰も知る人あるべし、彼の御内人よ出
 逢て語置度えのなれども、片田舎よ住む吾、なれを思ふよまろせぬこと

元和元年五月七日

元和元年五月七日

五〇

をいあせん、若、江戸へぬど出んこともあらむ、御邸を尋きてありとも申上まくおもふなりと、常々申出、徒、世をえやふ仕候まり、然るは今本多家よ由緒ある貴所よ、この物語申こと、父亡靈もさぞや満足よ存べらん、彼の御内人へ申贈らむ、永く此事蹟の傳るやうよあらひてたび給へといふよより、玄孝、從弟の中根平太夫へくそく記して贈りしとぞ、扱其治兵衛を祿二千石の士と聞えぬ、横井氏筆記よ、一心寺よある忠朝并家士等が石碑の寫をのせり、左よあらむに、

忠朝及家
臣戰死者
墓碑

前本多出雲守藤原朝臣忠朝

三光院殿岸譽良玄居士

五輪高さ一丈二尺

元和元乙卯五月七日

五輪高さ八尺余

法號了信院峰譽殘雪居士

小野勘解由

五輪高さ五尺余

法號釋道涼信士

參州あらむに

青山五左衛門

孝子 忠左衛門尉政治

五輪高さ七尺余

法號建叟善功信士

豊後國

白杵七兵衛

五輪高さ七尺余

法號榮林宗信士

石川半彌

石碑高さ九尺余

法號眞清信士

加藤忠左衛門

裏に、大江天王寺表合戦之刻跡と云は、

五輪

法號正光福心あらむに

大屋作左衛門

同

法號月山信士

大原長五郎一説あり、兵衛とあり、

同

法號悅堂宗近信士一説は、近を

山崎半右衛門

同

法號眞月淨閑信士一説は、眞を奥と

中根權兵衛

元和元年五月七日

五一

元和元年五月七日

五二

高さ五尺幅三尺をウリの石碑

村越茂兵衛
藤平治右衛門
土屋太郎八を一説と云は
土橋加兵衛
稻毛市郎兵衛

元和元年大坂御陳之節討死之處、攝陽軍語之卷雖出此九人右五人
此所依之今改建之者也、

寶永五戊子年五月七日

岡小右衛門建之

石碑の左右は大石燈籠二基あり、
下は岡小右衛門建之

元祿九年に改とる中務大輔忠國が代の分限帖は、十人扶持岡小右衛門
と云名とゆ、元祿九年より寶永五年まで、其間十三年をへどとるこ
とぬれを、全くこの人の建とるあらん、又忠朝が代の分限帖に、徒士の末
は岡市郎左衛門五百石、外は入野酒右衛門、西郷五兵衛、此三人は、大坂御
陳の時居合とと訣書してのせとる名あり、小右衛門は此市郎左衛門が
子孫あらん、

母 慶長六年辛丑三月廿七日卒は、年、謚淨徳院殿長屋正壽大姉、

室 慶長十五年庚戌六月廿九日卒は、とし、謚淨心院殿知淵州一説は、淵を
と、法蓮靈尼、

初京女郎、後桑名の蘆丸とに住む、因て蘆丸殿といふ、

寛政重修諸家譜

六百八十一 本多忠勝平八郎、中務大輔

女子 母は右衛門某阿知和氏の女、眞田伊豆守信幸幸の室、

女子 母は上みぬれれ、奥平大膳大夫家昌昌の室、

忠政平八郎、美濃守

忠朝内記、出雲守

女子 母は上みぬれ、本多備中守信之之の室、

女子 母は某氏、家臣松下三十郎重綱綱の妻、

女子 母は上みぬれ、家臣蒲生瀨兵衛某某の妻、

女子

忠刻平八郎、中務大輔

女子

政朝甲斐守

元和元年五月七日

五三

忠朝ノ系
圖

元和元年五月七日

五四

忠義 初忠光、唐之助、右兵衛、幸千代、能登守

〔寛政重修諸家譜〕

六百八十三

本多 八郎兵衛勝行うとき、嗣なくして家た

忠朝 内記、出雲守、從五位下

女子 母ハ眞盛監一柳ウ女、本多甲斐守政朝ウ室

女子 母ハ某氏、家臣山口主水某ウ妻

政勝 入道丸、内記、從五位下 母ハ某氏、慶長十九年大多喜ウ生、略

女子 實ハ有馬左衛門佐直純ウ女、政勝ヤウなひウ妹とし、黒田東市正高

政ヲ嫁ニ、

忠朝 本多中務大輔忠勝ウ二男、母ハ阿知和右衛門某ウ女、天正十年、遠江

國ヲ生キ、東照宮ヲ仕ヘたてまつり、つねに御傍に勤仕す、慶長五年關原御陣ノとき、スさウひたてはつり、嶋津ウ陣に馳入て力戦し、首二級を得シ、從士等ハ、ミたカひク功あり、敵ト、クを敗走して此ニ、御本陣ハいサらむとす、ときに其刀まウりて鞘にたサまらハ、其マ、御前ハ候をウを台覽ありて、今日ノをスらキ、ゆくスる父ハもハ茂トるマし

忠朝ノ履歴關ヶ原ノ役

大多喜五萬石ニ封ゼラル

大坂冬陣

大坂夏陣

きよ賞をらる、六年正月朔日、從五位下出雲守ヲ叙任し、スの日上總國のうちハ、シて五万石をたまひ、大多喜城ヲ住す、十九年九月、里見安房守忠義ノ所領沒收せらる、ハより、内藤左馬助政長トあハくハれハせ、茂ウけたマはりて、安房國ハおもウむキ、里見の城郭を破却し、且其地を守衛す、このとき大坂城中ヲをいて叛逆を企ルのきこエありて、台徳院殿大坂へ御出陣あり、スれハより忠朝仰を蒙り、先陣の第二ヲ列シて從ひたてまつり、已ハ兩御所軍を大坂ヲすメたマひ、諸手の陣所をさシめらる、忠朝を東の方の寄手トなり、玉造口ヲ屯シ、ときハ城兵等不意ハ鳴野今福ヲ出テ、佐竹義宣の兵と相戦ふのよシ聞クめサまシ、ハれハせハよりて、忠朝鳴野ハおもウむキ、仕寄等のこと、茂沙汰シ、まシ別ハおノれク攻口をうけたマはりて備を設く、元和元年、再ハ大坂ヲ御發向ありて、五月七日、諸將ヲ命シて軍ヲ茂メ、めシめタまシ、忠朝ハ小笠原秀政、淺野長重等とおハく、天王寺邊ヲせムくハひ、ふク敵陣ヲす、ミ入テ、森豊前勝永ウ兵と相た、ウハひシ、敵二十人ヲウリ鎗をとりてあらソひ進む、忠朝馬より下リ、縦横ヲ奮ヒた、ウハひ、はウち死す、家臣小野勘解由某、大

元和元年五月七日

五五

元和元年五月七日

五六

屋作左衛門某、白杵七兵衛某、加藤忠左衛門信行等戰死し、あるひハ創をかうふるもの多し、凡忠朝ヲ手ノ首七十四級を得てこき、茂献す、其餘敵をうつもの甚れ、落城のち、東照宮、本多美濃守忠政を御本陣よめされ、忠朝ヲ戰死を憐みたまひ、忠政を以て、忠朝ヲ郎從窪田傳十郎某、大原物右衛門某、柳田左馬允某、山本只右衛門忠重、小鹿主馬助某等五人ノ御感狀を下はる、とき、忠朝年三十四、岸譽良玄三光院と號す、大坂の一、心寺ヲ葬る、領知ハ、姪甲斐守政朝ふたまふ、室ハ一柳監物直盛ノ女、

○忠朝上總大多喜ニ封セラレシコト、慶長六年二月ニ、大坂冬陣ニ仕寄築造ニツイテ、家康ノ不興ヲ蒙リシコト、同十九年十二月六日ニ、各其條アリ、マタ茶白山方面ノ先鋒ヲ命セラレシコト、元和元年五月六日、家康進軍ノ部署ヲ定メシ條ニ見エタリ、竝ニ參看スベシ、

眞田信吉

〔眞田系譜〕

信吉河内守

五月七日

落城之節、兩人

○信吉并弟信政

手ノ首數五十八

討取候由、尤本多出雲守組合（合組ガ）ニ相勤候段申傳候得共、舊記燒失委細之儀相知不申候、

〔先公實錄〕

四十九

天桂院殿

古

御事蹟稿二

五月七日、於大坂表御合戰之仕合之儀、拙者人數本多出雲守備之右手ニ立申、其日之朝物見ニ遣候者頸五ツ取候、岡山ニ指上申候、其後御人數惣懸リニ候間、切所故二筋を懸リ鐵炮打懸申候、敵も相懸リニ仕、鎧を合申候、拙者先手之者一筋者勝申、一筋者被追付候間、自身馬を入、敵を追付、鎧下よて頸三十余討捕申、吾等者も三十六騎討死仕候、手負三十五キ御座候、則時ニ敵を追込申候故、頸ハとらせ不申、敵包ニ候へとも、其儘追込、搦之内ニて敵二十余討捨ニ仕、先手之者五十余キまとひを押立、本城より南之丸西之門ニ付申候、城中ニ火ヲ、リ候間、惣搦之際ニて、人數を揃、茶碓山岡山ニ致參上御目見仕候、

十月二日

此書面、諸侯ノ戰功御詮儀時、御書上ノ草按ナリト云、

眞田圖書貫義相傳ニ通アレドモ、略ス、

〔眞武内傳〕

五

眞田諸士大坂表働

附討死手負

眞田家馬印ハ金ノ二階笠鳥毛、出シ、高サ五尺程、家中番指物白練ニ胴赤ナリ、大坂夏陣眞田河内守五十騎、同内記五十騎、矢澤但馬守預七十騎、今度於大坂

眞田隊兵數

元和元年五月七日

五七

元和元年五月七日

五八

同戰功者

高名諸士矢澤但馬守手へ首數七級、河内守手へ首廿七、

一首一	沼田	湯本三左衛門	一首一	沼田	堀田角兵衛
一首一	沼田	原 監物	一首一	沼田	原 右近
一首一	上田	倉澤長九郎	一首一	上田	新井十兵衛
一首一	上田	木村土佐同心	一首一	沼田	加藤勘五郎
一首一	沼田	池田甚左衛門	一首一	沼田	市場茂右衛門
一首一	沼田	加茂甚十郎	一首一	上田	林 庄左衛門
一首一	沼田	柴田 刑部	一首一	上田	土肥彌右衛門
一首一	沼田	大澤二郎右衛門	一首一	上田	兒玉茂兵衛
一首一	上田	鈴木 主水	一首一	上田	常田圖書内
一首一	沼田	牧葉治太夫	一首一	上田	喜
一首一	矢澤但馬内	西入八右衛門	一首一	上田	上二同
一首二	上田	上二同	一首一	上田	上二同
一首二	上二同	原 金平	一首一	上田	無藤 彌藏
一首二	上二同	瀨木根源右衛門	一首一	上田	吉澤新右衛門
一首一	木村土佐内	小林淺右衛門	一首一	池田長内	善次
一首一	鎌原石見	桑原市右衛門	一首一	木村所左衛門	
一働覺	山越半左衛門		一働覺	岡田太郎兵衛	

同死傷者

同手負

上田	鎌原石見	沼田	湯本三左衛門	上田	海野喜兵衛	堀田角兵衛
上田	鈴木九右衛門	上田	丸 佐助	上田	清水與左衛門	齋藤左太夫
西澤角左衛門	木村土佐内	上田	依田彦太夫	上田	倉澤長九郎	中澤新太郎
市場久太夫	矢澤但馬内	上二同	池田甚左衛門	上二同	原口善之丞	矢澤但馬内
上原 金平	原郷左衛門内	上二同	中村茂右衛門	主水内	金太夫	瀨木根清助
三五郎	春原勘助内	上二同	松崎 茂助	上二同	茂左衛門	原郷左衛門内

同討死

沼田	津 主水	沼田	原 郷左衛門	沼田	恩田 左京	沼田	羽田 雅樂
沼田	横屋與惣右衛門	上田	春原六左衛門	上田	春原孫右衛門	上田	石井 舍人
上田	飯島市之丞	上田	青木半左衛門	上田	常田 作兵衛	上田	小泉佐左衛門
上田	間 嶋 六藏	上田	横山庄五郎	上田	土井善右衛門	上田	木村佐野右衛門
齋藤 三藏	柴田庄右衛門	上田	鎌原半四郎	上田	佐藤三九郎	上田	宮原權九郎
石原 小吉	大澤二郎右衛門内	上田	青木善次	上田	樋口傳右衛門	上田	春原六左衛門内
横山善右衛門	近藤善助	上田	廣澤吉藏	上田	吉原又右衛門	上田	春原 甚助
木針彌七郎	石倉惣七	上田	野倉甚五右衛門	上田	野倉甚五右衛門	上田	千野治右衛門
		上田	劍持空内	上田	竹村 庄助	上田	石澤十兵衛
		上田	沼田	上田	蟻 川 左内	上田	沼田

元和元年五月七日

五九

真田隊陣立

元和元年五月七日

六〇

〔真田大坂陣略記〕

攝津大坂御陣ハ慶長十九年五月元和元年乙卯年五月

真田河内守信吉九、同舍弟内記信政八、矢澤但馬頼之ハ信州上田之士卒ヲ將立也、禰津主水幸豊ハ上州沼田之士卒ヲ將立也、纏ハ成澤勘左衛門、幡ハ恩田越前、左備之鐵炮頭ハ鎌原伊右衛門、右備之鐵炮頭ハ湯本源左衛門、持鎗之石突持ハ田中忠右衛門、馬之口添ハ左ハ西澤正兵衛、右ハ豊島三郎右衛門也、河州之介添者木村土佐羽田筑後、亦内記介副者原監物、矢澤孫右衛門也、中備ハ禰津主水、左ハ矢澤但馬、右ハ禰津伊豫信直也、

成澤勘左衛門諸手ヨリ真先ニ纏ヲ推立ル也、

湯本三左衛門一番高名折付也、信州侍高名ハ矢澤但馬賀茂神十郎、土肥彌

右衛門、上原彌殿矢澤但馬カ長沼田侍高名ハ原右近、清水與左衛門、池田甚左衛門、

一場茂右衛門、福田久太夫、安中作左衛門也、

上田侍討死ハ常田作兵衛、春原六左衛門、春原孫右衛門、小泉佐兵衛、真島市

右衛門、飯島市之丞、青木半左衛門也、

沼田侍討死ハ禰津主水、原江左衛門、横谷惣右衛門、羽田雅樂、石井舍人、有川

左内、恩田左京越前カ息也、步行士森、佐野衛門、持鎗之者一人、是ハ座備之時

同死傷者

同戰功者

真田信行
半舟越
五平次ニ
旗奉行ヲ
命ズ

原江左衛門

鐵炮頻リニ來ルニヨテ、信吉之前ニ立塞ル也、信吉策ヲ以テ打拂玉ヘバ立退、亦立塞リテ鐵炮ニ當テ死也、是ハ清水金右衛門カ父也、

沼田士手負ハ鎌原伊右衛門、西窪伊兵衛、春原小左衛門、鈴木九右衛門、春原勘左衛門也、

上田侍柴田刑部ハ、飯島市之丞下人ヲ見誤テ味方ヲ討、依之無面目思ヒ半人スルナリ、

矢澤同心關山源右衛門、禰津同心劔持喜左衛門、木村同心廣田岡右衛門、我妻ノ五段田村之佐次右衛門、忍ヒヲ能シテ預褒美也、

信吉信政出陣之節ニ、豆州信之下知シ玉ヒテ、舟越五平次ニ旗奉行ヲ被申付處ニ、春原六左衛門、其弟孫右衛門ヲ始トシ、譜代之侍中申上ルハ、半人之

舟越ニ御旗奉行被仰付ハ、御譜代之侍トモニ可然者無之ニ相當候間、御用捨遊サレ被下候ト、信之ヨリ御返答ナキ中ニ、舟越五平次方ヨリ書置ノ半

人スル也、

原江左衛門ハ、海野能登ガ孫中務ガ子也、姊鞆之原監物ガ依養育、原氏ヲ名乗也、矢澤薩摩ニハ孫也、其行跡常ニ荒シテ、衆之親和ナシ、サレバ豆州河州

元和元年五月七日

六一

毛常ニ言葉モ不被懸也、大坂ニテ五月七日ニ、先手ヨリ江左衛門騎返シ、馬ニ駕ナガラ申サク、御備ガ殊外揉申候、少被仰付ヨ、河州ノ曰、和主達ガ下知セデハ誰ガ下知セン、早ク往テ謂付キヤレ、江左衛門馬ヨリ下テ、河州之キセルタバコヲ步行ノ者持居タル處へ進寄テ、其御タバコヲ下サレヨト所望ス、步行ノ者、是ハ殿様ノ御キセルニテ御座候ト、サモ無情會釋、河州見玉ヒテ、何カ苦シキ夫速ト宣ヘバ、江左衛門御キセルヲ三度頂戴シ、半服計リ吸テ鎧ノ袖ニテミコ(コミカ)口ヲフキヌグヒ、謹テ亦戴テ、チツトモ凋又眼ニ涙ヲ浮ベ、閑々ト立、御前ニテ馬ニ打乗、一人勇テ馳向也、

湯本三左衛門ト横尾惣右衛門

合戦前ニ諸侍坐陣シ、鎗ヲ膝ニ戴セ、胄ノ鏝ヲ傾ケ備居時、城方ヨリ打懸ル鐵炮ノ音ハ、百千之如雷也、然ルニ湯本三左衛門頭ヲ振舉テ城ヲ白眼、扱左右ヲ見廻シ、高聲ニ云、傍輩衆何モ定テ吾モくト思召フガ、此三左衛門ニ於テハ、秀頼之首トハ存ズルガ、大カタハ一番高名仕ルデ御坐有ラン、傍ニ居並タル外ノ伯父横谷惣右衛門曰ク、ヤイ三左衛門、是ニ歴々之御座有ニ、未嘗モ青體ニテ、推參慮外ナル言ヲ云者哉、三左衛門答テ曰、何ヲ惣右衛門トハ謂ナサルナ、軍ハ今初リ申ハナ、臆テ軍初リケレバ、面々吾ヲトラジ

原江左衛門ノ戦死

福津主水ノ戦死

ト働ク、湯本三左衛門一番ニ高名ス、横谷惣右衛門驀ニ乗込テ鎗ヲ合、太刀打シテ數ヶ所鎗疵、太刀疵手負テ難働故引返シ、既ニ半途迄飯來テ、味方ニ逢併高名ハセズ、傍輩モノ内殊外見事ニ御座候ト譽レバ、惣右衛門ガ曰、湯本三左衛門ハ何ト致候乎、各答テ、一番高名ニテ、而モ折付之首ヲ提、唯今旗本へ被參候、惣右衛門是ヲ聞、涙ヲハラくト流シテ、傍輩衆親ノ左近トセガレ、新五郎トニ目ヲ懸テ被下ヨト謂捨、馬ヲ進敵軍へ亦駈入討死也、矢澤但馬、原江左衛門、福津主水ハ、下人ヲ數多打連進向、但馬馬ヲ駐テ稍暫控、敵色ヲ見テ左之方へ乗り下サマニ、江左衛門モ主水モ、己カ馬ノ成ニ乗テ來ヨ、江左衛門答テ曰、ヤア但馬殿ハ可咲言ヲ仰セラル、者哉、座敷杯ニテコソ御家老ト申伯父ト申大身ニテ御座有故ニ、跡ニ屬テ回レ、今爰ニテ、カ聞度モ無トテ、正直ニ急ニ騎込テ討死也、討死ト兼テ思究メ、死生ニ不拘ト也、福津主水カ長之小林金太夫ハ、但馬殿向ヒ玉フ方定テ可宜ト思ヒテ、主ノ馬之口取テ、其方ニ推向ケレバ、主水怒テ知ヌ事ヲト曰テ、江左衛門馳行方へ眞直ニ進ケリ、スコシヲモノボリノ所ニテ、歩兵之敵ト鎧ヲ合セテ、則鎗付テ參タト聲ヲ懸、其鎗ヲ引取サルニ、亦歩兵之敵一人助來テ、鎗ヲ以

元和元年五月七日

六四

テ弓手之乳ノ上ヨリ馬手ノ脇マテ隔達ニ撞テ、其儘引返シ退ケリ、其働之脇ニテ、金太夫ハ敵鎗ヲ以テ内胄ヲ突ヲ見テ、面ヲ振除ケレドモ、左ノ頬ヲ横ニ劈、然ドモ少モ臆マズ急ニ飛込テ切倒シ、其儘乘懸リ、押ヘテ主人之方ヲ見、檀那是ヲ高名被成ヨト云、主水曰、己ハ手負タ、水ヲ一ツクレヨト云ナガラ、馬上ヨリ落テ死ス也、金太夫ハ押ヘタル敵ヲ捨走寄、檀那無甲斐ト謂ケレドモ息絶ニケリ、金太夫ハ傍輩之須加傳介、杉原仁兵衛、同心ノ劍持喜左衛門、大島小兵衛、青木九右衛門、馬取ノ作右衛門ヲ招キ、如何セントナゲク、其時シモ關東之軍勢崩レ懸テ追立ラル、青木九右衛門年十八ナリケルガ、大力ニテ主人之屍ヲ長刀ヲ守木ニシテ輕ヤト負テ、三町餘一息ニ走退ケリ、百人計ノ下人右九人之外ハ不連ケリ、矢澤但馬ハ敵崩レテ引行クベキ方ヲ見知テ、先立テ待懸功名セシ也、禰津伊豫、湯本源左衛門、杯懸リシ所ハ、大成沼有、其沼ヲ打廻テ進行間ニ、敵敗軍シテ左之方ヘ引退、故ニ上田衆モ沼田侍モ一騎モ手ニ不逢、中備衆ハ討死多有ケリ、

淺野長重

〔譜牒餘録〕

二十内匠頭

大坂夏御陣、又本多出雲守相備被仰付御供仕候五月六日、道明寺口一戰之後、本多出雲守御旗本之御先手被仰付、出雲守相

未明阿部野ニ著ス

霧深シ

毛利勝永ト戦フ

天王寺木戸口ニ迫ル

備之衆不殘、御先ハ押出候、依之六日之夜、通人敷を押し、七日之未明ニ阿部野ニ罷出候得者、霧深有之、先見ハ不申候付、阿部野ニ備罷在候侍分不殘下敷馬を遠さけ候様ニ、本多出雲守下知故、侍共下敷候得共、馬をハ引付罷在候處、霧晴候得者、城兵森豊前大勢ニ、采女正真先ハ相向候故、長重急ニ備を進め、手痛一戰仕候、其場ニ、長重家人侍分三拾餘人、下々百餘人討死仕候處、長重堅下知仕、森豊前を追立、直ニ天王寺木戸口迄、長重自身乗付致追討、首數六十餘討捕、木戸口を破、其より城際迄押詰候内、城ニ火之手上り申候、右阿部野天王寺口之様子、後日御僉儀采女正長重働達上聞候處、於一所侍分三拾餘人遂戰死、長重無別条、城兵令敗北、首共數十討捕候段、御感之旨被仰出候事、

〔淺野考譜〕

四

淺野采女正長重之考譜大概

翌元和元乙卯年夏、再ひ大坂表へ御進發之時、長重も又供奉被仰付、去冬のことく城東の攻口を守り、後又天王寺表の待備ニ加る、小笠原兵部大輔秀政、同嫡信濃守忠脩、二男大學忠政、後名改、右近將監なり、本多出雲守忠朝、同美濃守忠政、植村主膳正康、(泰勝)、須賀攝津守、諱字追、あり、松平下總守忠明、(下)、石見守元綱、(重)

元和元年五月七日

六五

元和元年五月七日

六六

秋田城之助實秀^(季)松平丹後守重直^(忠)水谷伊勢守勝隆等と共に、越前忠直卿の御備へ跡は相詰るゝ

淺野隊戦功者

同五月七日、先手之輩軍始之後、長重自分鎗を揮て、大坂方毛利豐前守勝家^(永)大野主馬助治房并七組衆之備よつき掛り、透間まく攻戦ふ、家士八嶋豊後同左門、奥村次郎右衛門等拔群よ働きし、中よも牧野金彌敵首を提て馳來るよ出逢て、金彌曰、我一番首なりと爰よ馳來る處、御邊ハ先手之高名あるハ、吾子爰よ來る道法り遠し、依之我討取首ハ二番あるへしと、半左衛門持參之首を一番よ實驗よ備ふ、半左衛門ハ金彌ハ心底を感じて、則其趣をのふ、長重由を聞て、先手之一番首ハ山城半左衛門、二之手の一番ハ牧野金彌と稱美有、其後毎歲初具足開き祝賀の時、左之座上ハ山城半左衛門、右之座頭ハ牧野金彌を備らると也、扱此戰場よあつて、長重之手へ討取首數百餘級、内甲付六十三、味方討死之者二十餘人、所謂今井權之助、大木半兵衛、菅谷喜兵衛、丹羽佐左衛門、熊田左平次、川部兵九郎、水上三平、^{イニ三}波々伯部加左衛門、石黒六左衛門、立田佐助、伊藤九郎兵衛、田村三四郎、加納九郎兵衛、永田彌次兵衛、西四郎兵衛、生天目吉左衛門、中村彌藤次、伊藤惣右衛門、永

同戦死者

長重ノ感狀

田角右衛門等也、

〔寸金雜錄〕

二 今度大坂一着之時、淺野采女正殿ハ感狀

今度大坂一着之時、於天王寺口別る御手柄之通髓承届候、殊御高名無比類候、於我等令満足候、恐々謹言、

五月十三日

淺 采女正

長則ノ^〇長重^{初名}

三吉筠齋老參

〔淺野家大坂首帳〕

淺野采女正長重家臣大坂合戰場首帳

首	一ッ合戰場にて	牧	兵左衛門	首	一ッ同	山城半左衛門
首	一ッ同		成田六左衛門	首	一ッ同	小栗惣兵衛
首	一ッ同		高久長右衛門	首	一ッ同	東城仁右衛門
首	一ッ同		八島左衛門	首	一ッ同	稻川土佐
首	一ッ同		安井武左衛門	首	一ッ同	鈴木八兵衛
首	一ッ同		宇野喜助	首	一ッ合戰場少先	大原主水
首	一ッ合戰場		小關六太夫	首	一ッ内之者	灰方儀右衛門
首	一ッ合戰場少先		(マ、)	首	一ッ合戰場一町	(マ、)
				首	二三間と先にて	

元和元年五月七日

六七

長重家臣ノ首帳

覺

首	一ツ	茶うも山にて	岡崎太兵衛	首	一ツ	同	津田勘兵衛
首	一ツ	同	河村傳兵衛	首	一ツ	同	御徒衆 上田角兵衛
首	二ツ	同	加須屋勘左衛門	首	一ツ	同	山本彌五兵衛
首	一ツ	同	八嶋民部	首	一ツ	同	菅谷平兵衛
首	二ツ	同	高山茂兵衛	首	一ツ	同	稻河全兵衛
首	一ツ	同	御徒衆 佐藤	首	一ツ	同	御徒衆 土屋十兵衛
首	一ツ	同	御徒衆 入の木	首	一ツ	同	御徒衆 熊倉善太夫
首	一ツ	同	御徒衆 村田平右衛門	首	一ツ	同	御徒衆 池田作兵衛
首	一ツ	大坂にて	大岡次左衛門	首	一ツ	同	青木甚左衛門
首	一ツ	同	中村長左衛門	首	一ツ	同	小畑治太夫
首	一ツ	同	吉田太郎兵衛	首	一ツ	同	佐々清兵衛
首	一ツ	同	三好 <small>(時)</small> 齋	首	一ツ	同	高橋四郎左衛門
首	一ツ	同	酒寄少右衛門	首	一ツ	同	小川市右衛門
首	一ツ	同	稻川忠二郎	首	一ツ	大坂にて	關 猪兵衛
首	一ツ	同	今井權之佐組	首	一ツ	同	多川九左衛門組
首	一ツ	同	御徒衆 の喜介を以首上ケ申 御座ニハ無御座候 も	首	一ツ	同	喜左衛門

秋田實季

同俊季

松下重綱

首	一ツ	大原主水組	吉	首	一ツ	山代半左衛門組
首	一ツ	御草履取	藏	首	三ツ	御さへ喜助組
首	一ツ	小道具之者	彌一郎			彌角や八
首	一ツ	藤井又左衛門組	春二郎			藤助郎
首	一ツ	佐藤清三郎	内者	首	一ツ	杉浦清太夫
首	一ツ	松田傳兵衛		首	一ツ	塚田市兵衛

右取候所あま不申候間書出不申候、

首一ツと中村久右衛門書上ニ者御座候得共首帳ニ者無之候以上、○下略多川九左衛門以、

〔寛政重修諸家譜〕

六百三

秋田實季

秋田城介

元和元年乃役よき五月七日、

天王寺表よき森豊前勝永を戦ひ首四十四級を得たり、

俊季伊豆守 弟さへ大坂の役よき五月七日天王寺表よきをいて敵

一騎をうちとり、○下

〔寛政重修諸家譜〕

四百二

松下重綱

石見守

元和元年乃役に忠朝を屬し、

天王寺邊よきいへ一番に合戦しみつら鎗を交へ敵討とて家臣等
もは討死しあるひハ疵哉かうぬるもの多し、此とき首十七級を得た

〔松下文書〕

元和元年乙卯歲大坂夏御陣松下石見守働之覺

一本多出雲守殿眞田伊豆守殿同名内記殿淺野采女正殿秋田城之介殿植
村主膳殿松下石見守御目付須賀攝津守殿右一組ニ御座候五月六日
之晚飯森ニ陣取被居候處敵道明寺表に申候間右之一組加勢ニ參候
へと從御簾本被仰付夜通道明寺に參着仕候へ共、早敵引退申付直ニ
天王寺表へ參候事

茶白山ノ
右ニ陣ス

一同七日惣御先手本多出雲守殿ニ被仰付候石見守儀同日卯之刻ニ天王
寺表茶白山右之方ニ組中ニ拾間餘張出備を立申候敵ニ鉄炮嚴打懸下
々共手負死人數多御座候事
一同日午之刻ニ互開を合石見守乘込一番合戰被仕候其時石見守草履取
小兵衛と申者馬之口ニ取付御時分早御座候と申引留候得共鞭ニ打
放敵前へ乗付候處敵七八騎突懸鎧四本ニ突上候得共打拂終其敵之
内壹人討捕被申候馬者取放候處陸ニ城中心懸被申候處ニ家來梶

重綱城中
ニ乗入ル

塚主殿と申者乘懸參候故其馬ニ乗城中に乘込被申候馬印持草臥申付
正根寺四郎右衛門と申歩行者馬印を取石見守ニ相續城中へ立申候故
石見守早乘込候段其隱無御座候事

一石見守家中へ討捕御帳ニ付首數拾七其外打捨之首も御座候事
一石見守其時知行高壹万六千石常陸國之内筑波郡小張と申所ニ拜領
被仕候内千石ハ伊勢之國之内平尾村藏村ニ被下置候大坂に召連騎
馬數三拾騎餘右之首數討捕申者之外討死七人鎧疵之手負五人御座候
事

右之段々私共不存儀御座候得共親共書記置候を見合、如斯書付申候、
以上、

寛文六年

松下權兵衛

三月十五日

松下彦四郎

〔寛政重修諸家譜〕

二百八

植村泰勝

刀、今の呈譜ハ、
ち主膳正、ハ、
のち主膳正、ハ、
のち主膳正、ハ、

元和元年

再陣のときは本多出雲守忠朝ヲ屬し先陣にまゝ力戦し、櫻門まで
乗入、此日泰勝の手に首十二級を得り、後勝山ヲをいゝ東照宮に拜謁

元和元年五月七日

七一

植村泰勝
櫻門ニ進

元和元年五月七日

七二

は、空たり合戦のやうを尋ねぬふみより、具に言上り及ふ、

〔譜牒餘録後編〕

二十九 彦坂壹岐守組下 加藤文太郎

覺

一 高祖父

加藤市六

略○上 市六惣領加藤忠左衛門、大坂御陣之節、本多出雲守備ニ出雲守一
所ニ討死仕候、此子孫ハ于今本多出雲守家中ニ罷在候、

○須賀壽津守改易ノコト、竝ニ淺野長重ト秋田實季ト功過ヲ争フコ
ト、本年十二月二十七日ニ其條アリ、參看スベシ、

○茶白山方面ノ戰況、其二榊原康勝竝ニ其組

〔寛政重修諸家譜〕

百 榊原康勝

五月七日、天王寺口ふむらふ、と記

よ信吉田藤 志らく軍をせ、むる事をと、むといふとを、康勝ハ先陣村
上彌右衛門某、原田權左衛門種正、伊藤忠兵衛正重等突いて、正重をよひ
安松丹後宗武討死せ、乃餘戰死し疵をかうふゑの多し、これときまゝ
敵首七十八級を得たり、康勝ハつゞよむ腫物を患敷といへとも、志を忍
む陣中をせめくり、士卒を下知し、はかり大坂落城も及ふ、

加藤忠左衛門

榊原隊戰況ノ概略

康勝腫物ヲ患フ

榊原隊首帳

〔榊原系譜〕

乾 二代 康勝

遠江

○上略五月六日ノ戰ニ獲ゲタル

同七日於天王寺表討取首目錄

首一 原田權左衛門	同一 大久保喜太郎	同一 伊藤宮内	同一 前田助十郎
同一 中根善右衛門	同一 伊藤久五郎	同一 宮田三右衛門	同一 廣濱瀨兵衛
同一 榊原若狹	同一 森左馬之助	同一 中根善次郎	同一 仁木牛左衛門
同一 佐久間左京	同一 内藤次郎左衛門	同一 小坂小助	同一 白井作右衛門
同一 漆畑武兵衛	同一 加藤忠三郎	同一 丹羽四郎左衛門	同一 菅沼甚三郎
同一 伊藤又左衛門	同一 荒山市右衛門	同一 山崎勘兵衛	同一 水野九郎右衛門
同一 岸角之丞	同一 羽太半三郎	同一 藤波喜大夫	同一 津田外記
同一 都筑彌五左衛門	同一 鈴木監物	同一 岩附助左衛門	同一 阿部三彌
同一 今村與次兵衛	同一 鈴木權右衛門	同一 沖庄左衛門	同一 鈴木長左衛門
同一 大須賀角左衛門	同一 鳥居半六郎	同一 山内藤七郎	同一 前嶋茂平治
同一 杉浦四郎左衛門	同一 菅沼長門	同一 加藤吉兵衛	同一 荒井新右衛門
同一 設樂主馬介	同一 關三之丞	同一 稻葉勘解由	同一 上田次郎兵衛
同一 福富半右衛門	同一 川口新右衛門	同一 竹尾隼人同心	同一 榊原仁平
同一 岡儀兵衛	同一 村上久兵衛	同一 海原彦十郎	同一 鳥居彦十郎
同一 長谷川金兵衛	同一 伊奈金左衛門同心	同一 白井吉大夫	同一 久代勘右衛門同心

元和元年五月七日

七三

神原隊死傷者

元和元年五月七日

七四

同一 小笠原權兵衛 同一 遠藤與右衛門 同一 小笠原與左衛門 同一 久代内記
 同一 中山八左衛門 同一 都筑作右衛門 同一 神戶甚平 同一 伊奈主水同心
 同一 中山忠右衛門 同一 伊藤宮内同心 同一 長谷部作左衛門 同一 川上又右衛門
 〽七拾七級、兩日合百四十五（本百七十四）此外追討不知數（六日ノ首目録ハ本月六日ノ條ニ收メタリ）

兩日手負注文

長谷川内記 渡部八郎五郎 神谷助左衛門 瀧見彌平治 神谷長兵衛
 江坂次郎大夫 伊奈主水 岡助次郎 安松五郎兵衛 江坂四方之助
 安松矢之助 寺本八郎太郎 加藤太郎兵衛 中野長五郎 南甚之助
 兩日討死之覺
 伊藤忠兵衛 安松五郎助 水越久太郎 新田仁右衛門 花井平藏
 渡部長次郎 岡縫殿右衛門 石波主稅助 安松仁右衛門 安松丹後
 鈴木久太夫 手負討死二十六人

村上彌右衛門ヨリ、館林留守居神原與惣兵衛、鈴木半兵衛方エ遣候書狀寫別有之、（神原隊ノ戰ハ本月六日若江合戰ノ條所收村上彌右衛門書翰ニ見エタリ、參看スベシ、）

〔譜牒餘錄〕

丹羽四郎左衛門

神原虎之助附家臣

元和元年大坂御陣之御時、屬櫛

原遠江守康勝、五月六日七日ニ首二曾祖父四郎左衛門討取申候由傳承申候、以上、

小笠原秀政

〔譜牒餘錄〕

小笠原遠江守

翌年〇元和元年

御陣之時ハ、兵部大輔、同信濃守、同

大學頭父子三人共ニ諸將と同罷立候、五月七日、天王寺表阿邊野の道ニ向、兵部大輔兵を三段ニ分て備、阿邊野此道ニ堀有、大野修理亮、毛利豐前守、竹田永應等城中より突て出る、豐前守旗を堀の後ニ立、先手を堀の前ニ備、修理亮ハ兵を堀の後ニ構て段々ニ備を立、永應ハ、豐前守と修理亮ハ間ニおはまり、少出張て陣を取、于時眞田左衛門足輕鑊を以て、兵部大輔ハ馬手ニ當て打て出、兵部大輔其間を隔く是を見て、此所餘人ハ一足も先をかきしむ間敷と、先手ニ下知して、進て永應ハ出張所の陣を打破、永應敗北して走る所、兵部大輔勝ニ乘、堀を越て、豐前守の後をおひるゝらに逐討、兵部ハ二陣、續て堀を越て進て討、修理亮ハ兵共、兵部ハ二陣の右翼を討むとす、兵部是を見て、塵を取てきほひ懸、互ニ鎧を合て責戰、其時豐前守兵を馳く、横相ニ兵部ハ左翼を討、兵部馬上ニ手つゝら十文字の鎧を取て、頻々突、敵多く入込て、鎧先ひまなきの間、忽ニ鎧を打折ふ付て、則馬より下、郎從の鎧をおつとり、散々敵を突、信濃守も馬上ニおひる鎧を合せ敵を突、敵雲霞のどく馳來て、父子主從共ニ前後左右ニ相戰て、或ハ討死、或ハ深手を負、信

元和元年五月七日

七五

竹田永翁ノ隊ヲ破ル

毛利勝永ノ兵ト戦フ

忠脩ノ戦死

元和元年五月七日

七六

濃守自身手を碎き働間、疵を被る事其數を不知、豊前守兵共互ふ聲を立て、敵ハ究竟乃大將也、討洩せへあらばと云て、信濃守を取まひし、鎧玉ふ取て、串をさす如く、馬上ふ指上、首を取る、大學頭同所ふおいてかせき戦ふ、信濃守ウ鎧アリあさり、馬より落るを見て馬より飛下り、猛勢此中ふ入る鎧を合せて急ふ突、敵勢追々をり重り、大學も鎧打折、又太刀を抜て是をまくる、敵前後よりきほひ掛りて、鎧を以て大學を堀の中へ突倒せ、敵高き所より鎧を以て、或ハ打或ハ突、大學太刀を振て是を拂ぬ、敵大學ウ深手を負さるを見て、堀へ飛て下り、大學へ突て懸る、大學ウ家來澁田見縫殿助、横川佐野右衛門、牧野彌次左衛門、原治兵衛等、其敵を切拂ひ討ふせきて、大學を引て乃く、此時大樹之御旗之御勇發ふよりて、敵悉敗北を、兵部六ヶ所之深手を負家來馬上ふ具して、久寶寺河内中河内郡久寶寺村へ引退、大樹御馬上ふ御覽被成、兵部、大學ウ深手、信濃守ウ勇死を御哀惜被遊、施藥院宗伯、山岡五郎作を久寶寺へ被遣、其疵を被爲問、信濃守滋不便被思召之旨御恩言を蒙る、兵部大輔侍大將二木勘右衛門、小笠原主水、嶋立内膳をえしを討死し、生て歸る者すくあり、

〔細川家記〕

忠利十一

五月十四日、忠興君ノ御書

小笠原殿父子打死候、大學殿大々くらふ候、鎧きに數ヶ所おそれ候へども、少も無別儀候、ふしこの内竹田山城伊郡通り之寺ニ御入候間、御目見後被參候、可_レ見廻候、以上、忠利宛書狀ノ追書、本文ハ略ス、

〔笠系大成〕

秀八

秀政

貞初諱

同月

〇五

七日

秀政

忠脩

忠政

誓一場必死

城門

(昌茂)

向何處之攻、乃窺大樹及家康卿之命、大樹以軍使城和泉守命曰、天王寺表爲

旗本之先手可軍也、秀政即分兵爲三段、鷓鳴出久寶寺、張陣於阿部野、既及平明、大野修理亮治長、或作長毛利式部、豐前守竹田榮翁、或作永應自城來張備、茲阿部野道路有堀塹、毛利豎其旗于塹後、列先手于塹前、大野又列兵於塹後、有若干段、竹田者在毛利大野之中間、稍少出張、亭午下刻、真田左衛門尉使足輕出於秀政陣之左、秀政使先鋒追擊、竹田亦放炮射矢如雨、鹿島佐左衛門、淺井吉兵衛、白岩市右衛門、森下善兵衛等、進足輕働之、白岩、森下致死、時小笠原隼人政直卒、兵進先登、屢奮戰得首二級、而被疵、政直被疵屢戰、時軍漸爲終、會將軍秀疵當服之、賜一藥、原四郎兵衛雅綱、勝野五太夫、堤五郎太夫、伊藤作右衛門、景宗等、惣軍競集挑戰、竹田兵終辟易、敗走、秀政亂備、踰塹、掩毛利之背、或曰、毛

元和元年五月七日

七七

秀政傷

忠脩戰死

之救逐擊之於是秀政之二陣繼來過塹而進大野兵欲討秀政二陣之右翼城兵
 結城權之助橋本十兵衛等此時活擒橋本促欲之破秀政把麾互競接戰小
 笠原主水二木勘右衛門政信陣屋死及山本掃部岩波平左衛門本忠上條
 加兵衛重勝等奮戰主水岩波戰死時毛利自駿兵橫擊秀政之左翼秀政自馬
 上乘馬名荒波青揮十字戟當八荒終折斷其戟而下馬別握一鏃以搏擊敵數
 多被大創甲冑甲忽朱塗以黑糸毛引胃カ染丹岡村佐五右衛門川手才兵衛村
 川手時大及千野儀太夫岩付治左衛門千野岩付時等不離側而働秀政雖勇
 氣不緩勞數多刃痕千野肩秀政岩付相添而退岡村又拂幕來敵時秀政脫陣
 羽織賜岡村岡村傳于今相圍歸久寶寺村之陣
 忠脩亦馬上乘馬名蒼盤黑毛長四寸揮鎗奮戰時城兵散滿蟻集烏群白刃如
 竹葦之戰風大熊權左衛門後十郎右衛門法名雲働敵中取首一級以供忠脩實檢征矢
 野半彌時十進忠脩馬前奮死城兵急爭進忠脩兵當八荒或歸死或被疵完者
 纔十之二三而已忠脩被疵不知數且刺忠脩鎗如萌葦如貫申撐颯馬背及其
 落敵終取小驗剪取耳或鼻曰取小驗忠脩今取其鼻矣傳曰忠脩嘗有戰死之
 呼吾名進忠脩馬前而入敵中敵誤征矢野為大將先進而討半彌而討忠脩如
 本文云々或書曰原四郎兵衛雅綱從忠脩進先登而働敵中慮忠脩之事馳歸

忠政傷

後陣時為金三圍子立物者斃伏軍場見則忠
 脩也息未絕時士卒各來肩忠脩而退云々
 忠政甲黑地以花色糸綴之胃黑頭形以山鳥亦雖戰同處戰鬪無暇顧他不知
 父兄之被討森尾後改澁縫殿助盛直淺香角兵衛相從彼等曰戰在後忠政聞
 何左乎直可馳入城中而進馬時城兵數百競來忠政下馬揮鎗與敵急接鎗忽
 折又拔刀以薙之敵奮擊以鎗衝倒忠政于堀塹中而自高處以鎗且打以刺忠
 政屢拔刀防之尙飛擊俗曰打匕首佐野修理太夫所附與忠拂敵時士卒戰所
 々無從忠政之者敵二人遂入溝以太刀斬忠政忠政被疵伏臥殆為死森尾馳
 來拂二人之敵然敵尙多森尾當之屢也時橫川佐野右衛門時步行來共臥忠
 政之背上蓋之茲有着浴衣持鑊炮之敵既欲忠政與橫川一玉貫之挾火繩以
 臨吁命哉火無故而消敵無為以鑊炮徒扣橫川之背森尾又拂之橫川使忠政
 肩之退其處牧野彌次右衛門時步行同來代橫川而肩忠政猶敵競來森尾又
 拂敵屢也牧野疲時原治兵衛淺香角兵衛馳來森尾橫川共五士各奮戰禦多
 敵心力疲疼危急在於此矣時芦野谷權藏者馳馬過五士各謂曰忠政疲軍場
 使汝馬乘忠政芦野谷曰我有先登志終過其處忠政歸陣信州依之科使大和
 次擊芦野谷也見與市左衛門盛淺香憤曰我奪來敵之馬走行時原平七來直下馬

元和元年五月七日

八二

- 一同一 吉江長九郎重知右後九郎
- 一同一 加藤由右衛門(傳)
- 一同 澁田見縫殿助盛直
- 一同一 二木佐源太(政武)
- 一同一 祖父谷喜左衛門(景之)

右澁田見盛直以下首數を不知得首之傳に依り記之、

- 一同 上条主殿(重勝)
- 一同 福山權大夫(政信)
- 一同 堀伊右衛門(吉次)
- 一同 收彌次左衛門信重
- 一同 淺香角兵衛盛澄
- 一同 細加谷藤左衛門(實政)
- 一同 原治兵衛吉久
- 一同 原四郎兵衛雅綱
- 一同 岩村彌五右衛門康勝後治左衛門

以上○勝註ハ小笠原忠良年譜ニ據ル以下同○同番ニハコノ外吉江小太夫重政、渡邊清十郎、白岩八郎左衛門成爲野村治部太夫爲元高野六郎左衛門重俊杉生金右衛門守貞等ヲ獲首ノ部ニ攝シ、

右當家之手へ討取所之首數、古記之載る所四拾七級也、既其砌公朝ニ達シ、然るニ今此書面を以テ、是れ數る時々、戦死之者又之僕從ニ至リ取所之首惣テ七十餘級也、過分之至尤疑ひあき事ありハ、後人未だ正すへきなり、

死傷者

手負

- 横川佐野右衛門正吉(戰次)
- 江月次郎兵衛(元成) 加兵衛力子也、後氏ヲ改富永
- 法橋彦大夫
- 千野儀大夫正種 歩行侍

右之外獲首之内被疵者あり、又丸山將監直政内淺川茂右衛門、伊藤市兵衛景重内野澤名右衛

門等も被疵と、此外まゝ可有歟、○小笠原忠良年譜ニハ、此外春日茂助正成、永山大勝、重吉、柳次郎右衛門宗直、後三郎連、有賀甚平、後正、森川久内保實、四田才藏、延平、西道玄胤、清等ヲ攝シ、

戦死之覺

傳曰、首二級を取テ内一を信州ヨリ從ヒ來ル眞人高直仁左衛門小笠原主水政信、被在陣屋ニ踏テ死、二木勘右衛門政信、取テ戰死、岩波平左衛門重直、取テ戰死、二木庄左衛門宗興、取テ戰死、又曰、被疵陣屋ニ踏テ死、淺香太左衛門重政、取テ戰死、大日向次郎左衛門重吉、取テ戰死、ト、

- 白岩市右衛門光重
- 征矢野平彌廣重
- 森下善兵衛爲重
- 百束次郎右衛門勝清
- 渡邊喜六正久(庄七郎三長)
- 川井庄兵衛長吉
- 香坂太郎右衛門(安房) 左衛門
- 横川茂右衛門景直
- 江本彌次兵衛實次
- 林甚左衛門(高則)
- 百束六郎右衛門光氏
- 淺香太左衛門重政
- 多々井六兵衛友重
- 武井治兵衛氏信
- 原彌次右衛門長重
- 佐藤九郎兵衛長貞(俊元) 或長
- 落合喜平次盛重
- 新村傳兵衛正吉
- 鈴木九郎右衛門正重或長
- 澤井庄兵衛爲勝
- 賀與吉

元和元年五月七日

八三

元和元年五月七日

八四

右之外組付討死之面々雖有之、名不分明略之。○小笠原忠真年譜二八、手裏ノ部ニコノ外市調八郎兵衛發光、香坂三左衛門安房、林甚右衛門高則、増山與兵衛定信等ヲ擧ゲ、

於信州松本殉死

步行頭本多清三郎義重

多井小身

右終 氏名次第不順

〔笠系大成附録〕

忠真 碑銘

故豊前太守小笠原侍從源公墓碑銘有序

廣壽沙門明洞法雲謹撰

公諱忠真、總州古河産也。○中元和改元夏五月初、大權現將大相國、自發擊之、屯于岡山、公與父秀政兄忠脩共從步騎數千、啓向阿邊野、初七日味爽、秀政語二子曰、今日有進無退、以身殉國、是其時矣、不可失也、兄弟諾々曰、大人幸無勞慮、不肖輩不敢辱家聲、秀政大喜、士卒聞之、激勵彌倍其氣、阿邊野道路有坑塹、毛利豊前守、大野修理亮、竹田永翁等當塹而拒、分列精騎六千、翼軍左右、聲勢甚銳、秀政率二子、鼓行而進、衝其中堅、乘其敵陣辟易、追擊至踰塹、城中敵兵忽突出、合鋒急接、公父子兄弟勇悍、單槍奮力搏戰、血刃甚多、時公與秀政身被大創者七、小疵無算、公使士森尾横川牧野原氏等窮精脫急、忠脩身登群鋒、鎗其

秀政父子
死ヲ決シ
テ戰フ

敵氣、鏖戰亟力、當陣而歿、至是大權現暨大相國、方得連揭旗鼓、進擊破之、既而城陷、秀頼自殺、大相國麾下親見公與秀政力戰重傷、忠脩奮前死敵、特遣侍醫宗伯山岡某、至營視傷、賜醫藥、復遣內侍至弔忠脩、抵暮秀政殂、大權現父子深悼惜焉。○下

寬文九年歲次己酉八月甲戌○小笠原秀政年譜、小笠原忠真、年譜共ニ異事ナキヲ以テ略ス、

〔小笠原家正傳記〕

大坂御陣場物前の諸支

掬明日七日の日中、家康様（城昌茂）堀和泉守と申御使番被遣、兵部様へ上意の旨合戦初むへきとの上使あり、奉畏御受被成候て、兵部様御心底ふ老、昨六日、敵攻討も罷し、殘心今よ不晴と思召、上意を御聞被成や否、信濃守様と何やらん被仰き、其儘御出馬有て、御馬の上にも御酒一つ被召上、御人數の軍法作法もあく、老々く下知も不被仰付、敵陣に一文字ニ御乗込、散々ニ御働、深手を數ヶ所おとせられ、力ふ不及所へ、武者共二三人懸合引掛申て、久寶寺迄引取申候、久寶寺ニ御遠行あり、七日の日の御手柄無比類天下よ並者もあし、是子細多し、

信濃守様、兵部様へ御對面有る御底意を被聞てこそ有らん、即時よ御前茂

元和元年五月七日

八五

家康秀政
ズニ戰フ命

秀政勇進
シテ傷ク

久寶寺ニ
テ落命ス

忠脩ノ戰
死

元和元年五月七日

八六

御立被成、御馬よ召、合戰場へ一文字よ御乗込有、多勢の敵よ御向ひ勝負被成處よ、敵の信濃守様を大將と見付、多勢立向ひ、馬上こまきまに眞中ニ取籠、八方より鎧ふく突あけ、鎧たまを取、地よ落し、御首を取、敵を引取あり、去程よ御死か、計をうむい取あり、

兵部様、信濃守様の近習の侍共も、御軍法もまよく、さあ掛れと計の御下知有、御兩人様一文字ニ御乗込被成よ付て、菟角先陣をと心掛、前後不構敵前へ乗込たる故よ、近習の武者共、御兩殿様御馬近くもあらは、我まけじと敵前へ乗込かせきたる故あらんや、案の如く、兵部様御先にて討死仕たる者共有、高名仕たる侍とも多し、討死者三拾六人程あり、

兵部様の御討死被成候時、御年四十七、御名乗秀政公、

信濃守様御歳二十二、御名乗忠脩公、

七日の合戦よ、御兩所の御家中へ敵首四十七取まり、兩殿様御討死被成たると先々よ事聞、面々に早々乗歸り申たる故よ、首多くあり、御兩殿様御討死不被成、敵の首限りハ有間敷の批判あり、

〔寛政重修諸家譜〕

百八十八

小笠原貞慶

小僧丸、喜三郎、右近大夫

秀政 初貞政、幸松丸、信濃守、上野介、信濃守、兵部大輔、從五位下

女子 母之信康君乃息女、東照宮此御養女とれり、萬姫君と稱し、松平阿波

守至鎮の室せれり、

忠脩 幸松丸、信濃守 母は上におれり、小笠原信濃守長禎の祖、

忠真 初忠政、春松丸、大學頭、從五位上、右近大夫、右近將監、侍從 母は上におれり、

女子 母は上におれり、台徳院殿此御養女とあり、千代姫君を稱し、細川越

中守忠利の室とれり、

忠知 初貞政、虎松丸、壹岐守 母は上におれり、小笠原佐渡守長堯の祖、

重直 千松丸、長松丸、孫次郎、丹後守 母は上におれり、松平丹後守重忠の養子、

忠慶 初貞政、福松丸、因幡守 母は上におれり、子孫家臣とれり、

長俊 初長之、乙松丸、内匠助、出雲守、從五位下 母は上におれり、

政房 三十郎、式部 母は某氏家臣溝口美作貞康の養子、

昌行 長十郎、右衛門 母は上におれり、家臣原與右衛門昌聰の養子、

秀政 母を晴光野の女、永祿十二年、山城國綴喜郡宇治田原より生れ、乃ち

質とれりて岡崎にいさる、天正十三年十一月、石川伯耆守數正、おぼろふ

元和元年五月七日

八七

元和元年五月七日

八八

太閤みよ、治さし、淡通一逐電するのとた、秀政をいさねひ、大坂よりおもむく、より、秀政ハ一めて太閤み調見に、太閤懇り、治を淡遇し、十二月、信濃守貞政と稱せしむ、天正十七年正月七日、封を襲、このとき東照宮より太閤の命を治へらまて御書をたまふ、八月十三日、太閤の命より、岡崎三郎信康君の息女を娶、十八年、小田原陣のとた、東照宮乃供奉に列し、榊原康政、もに備へ、戦功を勵き、こ此役終る、ち、九月十日、信濃國松本をあらためて、下總國葛飾郡のうちをいて、東照宮より三万石の地を賜ひ、古河城に住す、文祿元年、朝鮮陣のとき御供り列し、肥前國名護屋にい、四年三月二十日、從五位下に叙し、上野介にあらたむ、慶長五年、上杉景勝御征伐乃とた、あひた、七月二十三日、秀政の居城古河よりつらさをさまふ、乃とき、饗膳、淡献き、二十四日、小山より着御のせ、石田三成反逆乃き、事あるに、より、まの治を征せらむむりため、台旆、淡上方にむき、乃時、秀政ハ、不せにより、景勝の押とし、下野國宇都宮城の守衛り、乃、六年二月、二万石、淡加賜せら、終、所領を、信濃國伊那郡比、うち、う、治、飯田城をたまふ、治、月、信

信濃五万石ヲ領ス

松本ニ移ル
大坂夏陣

六日ノ戦

濃守にあらせめ、十一年二月五日、兵部大輔りあらたむ、十四年十二月二十六日、台徳院殿、秀政の和田倉比邸に渡御あり、廣光の御脇指をよひ、小真、童、淡、ぬひ、男、忠、脩、忠、政、等にも物を賜ふ、治のとた、家臣、犬、甘、半、左、衛、門、久、知、御、前、に、め、さ、終、御、孟、淡、ぬ、ふ、十、五、年、正、月、二、日、御、諸、初、の、と、た、着、座、す、へ、き、む、治、不、を、か、う、ぬ、事、閏、二、月、よ、り、命、を、う、け、越、後、國、高、田、城、を、守、衛、に、十、八、年、十、月、十、九、日、石、川、玄、蕃、康、長、の、城、地、沒、收、せ、ら、る、乃、よ、り、御、使、を、う、た、た、る、り、て、信、濃、國、松、本、に、赴、く、こ、の、月、三、万、石、を、加、恩、あり、飯、田、を、あ、ら、た、め、て、舊、領、筑、摩、安、曇、兩、郡、乃、う、ち、に、う、治、さ、治、松、本、城、を、た、ま、ふ、十、九、年、七、月、二、十、七、日、佐、野、修、理、信、吉、罪、あり、て、あ、つ、巻、ら、治、元、和、元、年、大、坂、再、陣、乃、と、き、男、忠、脩、忠、真、と、俱、り、騎、士、二、百、七、十、餘、騎、步、卒、三、千、餘、人、を、ひ、き、お、あ、台、徳、院、殿、に、供、奉、に、列、し、彼、地、に、發、向、を、五、月、四、日、榊、原、遠、江、守、康、勝、保、科、肥、後、守、正、光、等、と、た、れ、り、河、内、國、須、奈、村、河内北河内、乃、出、陣、す、藤、田、能、登、守、忠、季、治、の、軍、監、り、五、日、阿、邊、野、に、む、あ、ひ、て、合、戦、す、へ、き、む、治、台、徳、院、殿、を、仰、を、か、う、あり、久、寶、寺、村、に、陣、を、う、持、し、六、日、乃、味、爽、よ、り、戦、場、に、乃、登、み、敵、の、出、を、あ、つ、ま、き、に、木、村、長、門、守、重、成、人、衆、を、出、し、弟、主、計、頭、宗、重、

元和元年五月七日

八九

元和元年五月七日

九〇

秀政等も備りむらひ軍を成せ、去るにより秀政急り接戦すへきむ存
士卒に下知せといへとを、藤田忠季いふと登乃圖り所とらすとて、強
と、むるにより、合戦りをよばさしめは、台徳院殿此御不審哉かうぬ
る、去りけり翌日本多出雲守忠朝等せられあしを、御麾下此先鋒を命せら
る、により、今日去、流よく一戦し、あ耻哉す、あむと必死を決し、父子
三人、天王寺前阿邊野乃邊にむらひ、大野修理亮治長、森豊前守勝永、武田
永應等と陣を對せ、せたり真田幸村、輕卒を秀政の陣の左に出せ、秀政去
を抜み、先手此人數を下知し、せ、むる永應をうり、か若陣さちまち敗
走せしうは、登此圖に乘し、森の後を襲ふ追うり、秀政の二陣は、きす
、見けるを、大野の勢登乃右備をうとむとす、秀政かへしあはせ、奮戦
し、いふと雌雄を決せけり、森勝永兵をいせ、大野の士卒拔せ、死横
さるに去を衝、秀政みつうら敵あふと苦戦し、終に鎗をうちれり
しあは、馬より下り、從者の鎗取て敵あまをけきふせ、其身も六ヶ所此
痛手を負、忠脩も亦去乃軍にせ入、鎗拔あはせ、勇を奮て相さ、うふ
のとる、敵兵きひしを去を圍、數多此鎗をもつて忠脩をたぐ、これ

により馬上に登らせしめておつるを、弟忠真むとしくせ、むてすくハ
むとせしに、敵又忠真をうこむ、忠真奮戦し、鎗うちれり、あハ、刀拔も
つゝ相せ、かふ乃所、敵の爲に墮中よつきれとさ、去りといふとを
あ、拔苦戦し、あやむに、殆あやうか、せしに、秀政の三陣を、見來てすく
ひ戦ひ、け、い、台徳院殿御旗をす、められしうは、敵に不い、敗北す、
去のとき忠真七ヶ所の痛手抜負といへせ、幸に死をぬれり、此
せ、あひり家臣二木勘右衛門政成をい、めせし、て、戦死せるを、の三十
人、創をかうぬる者二十五人、又小笠原隼人政直等をは、い、め、各力戦し、敵
首四十七級を得り、秀政はけきに創をかうぬり、從卒に助あられ、久
寶寺よあり、登、台徳院殿去、去、あ、い、ひ、れ、不、い、め、施藥院宗伯、山岡
五郎作景長、茂久寶寺に下さ、其創をせ、い、た、ぬ、ひ、か、い、忠脩の戦死、
とふら、い、せ、ら、れ、秀政去の日を去に及びて卒に、年四十七、義叟宗玄兩選
院と號せ、筑摩郡清水此臨濟寺に葬れ、後同郡林村の廣澤寺に改葬す、室
は岡崎三郎信康君此息女、

忠真 元和元年大坂乃役、父と、をり、去、さ、り、ひ、た、ま、は、り、五月七日、天

元和元年五月七日

九一

元和元年五月七日

九二

王寺口にむろむ力戦し、創をかうずねと七の所、○下略、閏六月二十七日、城舞樂興行ノ時、家康ノ賞詞ヲ受クルコトニ係ル、

寛政重修諸家譜

百八 小笠原忠脩 幸松丸、信濃守、從五位下、

女子 母は忠政の女、小笠原右近將監忠真の養女、

長次 幸松丸、信濃守、從五位下、 母は上に同じ、

忠脩 小笠原兵部大輔秀政の長男、母は岡崎三郎信康君の息女、文祿三年、

下總國栗橋に生る、慶長十一年二月二日元服し、台徳院殿より御諱字を

たふはり、忠脩と稱し、信濃守にあらむへき旨御判物を下さり、時、十

十五年、從五位下に敘せ、十九年、大坂の役に供奉し、元和元年、ぬゝ、ひ大

坂乃亂おこせるとれも、父秀政をよむ弟大學頭忠真と共に從ひてゐ

つり、五月七日、天王寺口よむりひ奮戦して討死す、年二十二、正甫宗中法

性寺と號す、信濃國淺間の法性寺に葬られ、かれかつ忠脩の開基と

す、ぬれり、乃ち此寺に茂豊前國中津にうたゝ、まゝ播磨國安志にうつせ、室

を本多美濃守忠政の女、

○秀政、秀吉ノ命ニヨリ、松平信康ノ女ヲ娶リシコト、天正十七年八月

忠脩ノ履歴

大森好長

寛政重修諸家譜

三百 大森好長 半七郎、

元和元年此役よ、五月七日、東照

宮御馬を天王寺口よす、たれぬふのとき、左のあふあふとて、多勢集

居、敵味方分明あらば、好長仰をうさへ、はり堀をたぎてせむらひ、一

人の侍よあひ、せの故を問はせ、小笠原兵部大輔秀政の人數あり、秀政討

死し、せの士卒茂集、はよりかく此ととまふ、その名をたけぬを、秀

政の旗頭鹽屋監物某といふ、又一人よあひ、せの名をとへ、鑛炮頭甘塚

元和元年五月七日

九三

佐左衛門某とこふすれはち我陣を歸りて、このおもむき言上は、その
ち先手の勢陣をすゝめえはせむらふ、好長ははく、味方此兵と相議し
て、御馬乃左右に列次、

〔寛政重修諸家譜〕

三百九十六

市岡正次佐太夫

元和元年大坂の役、小笠原

兵部大輔秀政に屬し、五月七日、甲首を得たり、其後戦功を賞せらる、采地三
百石をまふ、

〔寛政重修諸家譜〕

三百六

仙石忠政兵部大輔

大坂御陣に供奉し、元和元年若

役、御馬をまふ、さかひせうり、首十一級を得たり、

〔改撰仙石家譜〕

世譜二

忠政公譜

七日

月〇五

早旦、家臣岡田權六廣忠岡田

家譜、權六、後式部と改稱し、祿八百石を食て老職とす。本陣に來る、老臣奥

田伊織ふいひは、きのふ我陣榊原の部下に在て、はるくしき合戦ふ
ゐるさとし遺憾を、をかくく、はとろみもえせ、あまに、夜半のころ
より、敵方何となく騒あしく、城中より撃て出るを、おほへんまは、家僕等を
起して、人馬の糧食をもとのへり、かしくもいそぎ用意あつ、然る
るといひなるを、忠政聞て、予もささおもひたりとて、伊織に用意を命を

市岡正次

仙石忠政

岡田廣忠
進撃ノ準
備ヲナス
ヲ勸ム

天王寺ニ
向フ

毛利勝永
本多小笠
原ノ隊ヲ
破ル

へいと申けるふ、伊織申るは、權六さびら若氣はやりて侍ふ、さ此とい
そのせ玉ふぬやいふ、權六あさねいひけるは、かやうの事は、老功より若
若輩の申をあましあらめといひ合ひなるうち、果して城方さばあしく聞
えければ、いそぎ用意あるへしとて、權六は其ま、己の陣屋に歸る、其
あとふ引ちあへ、榊原遠州より陣觸あまれきた、ちよ權六をよひて、
汝う先り申せし違はを、敵兵いよく八尾表へ押出をよ、此陣ぬを
り、兼て軍令の如く三番貝よ、出馬をる、汝も粥の相伴せよとく、共み喫
し終り、權六坐を立んとせしを呼と、めて、著具の介副せしめ、時、伊
織、權六よ云、ねは、足下の監察實に圖に當て感するに餘あり、されとも
はやり過て、軍令よ背くるらばと誠めけ、以上岡田家譜、兎かうをる内、ほと
く相圖の貝聲きこえられ、則人數をく、出し、酒井忠次、榊原康勝の備よ
つ、いて、天王寺表に打向ふ、家譜、岡田、敵は多門前より東の方深田を前よ
て、小高き處に待あけ、り、我兵多くは馬上よ、て岸端よ、乗出を、家譜、岡田
とこ、ぬ、敵の毛利豊前守勝永筋違、小輪貫の馬標を、て、騎馬武者、大
あ、金乃半月の番指物して、味方の本多忠朝、小笠原秀政の備、小衝てか、

岡田廣忠ノ働

見見るありち小押やぬ、勝小乗て、御旗本を目さして撃て、は、忠政、秋田實季、兵ともふ進て是は當らんとせ、時、御方の前軍は、誰あるや誤りて鳥銃を放つものあり、變心のも此やあると總軍色めき、つ、我先鋒、奥田の備も擬議して進み得、岡田家譜○注略ス、烈祖成績ヲ引キテ、東軍ニ田の備も擬議して進み得、鳥銃ヲ放ツモノアリ、諸軍騷擾シテ敗走セシ記セリ、岡田權六馬を田の中ふ乗おろし、岡田家譜、御撰大坂記及保科家書と合戦然る所、總構垣築地の内より、土居に、きひしく鳥銃を放ち、味方難義せしむ、前ハ細よて岸高く、其間深田あり、各一戰を遂げ、敵を撃捕り、追崩し行く所、味方大崩れして、來る云々と載る、この槍を提て真先ふす、み、中島式部少輔堀田圖書助の備は、衝くか、一、一番槍を入る、六、六、つ、い、千葉内藏介、成田半之丞、荒木甚兵衛、中村善兵衛等も槍を入る、是を見て我軍一同ふ競ひ進む、もせより難所の戦ひあれ、千葉と成田は此所は討死し、荒木中村ハ深手を蒙るといへとも、權六助槍そと詞をあげ、は、もく、進て、敵兵岸勸解由を突伏せ、た、敵兵この勢ひふおそれ、十間計を引退く所を、權六すかさ、に押はめて、青野清庵を突斃し、ま、佐々九郎左衛門とわさり合ひ、遂其首を搔落し、分取して立、わらんとせし所へ、敵兵二人取て返し、一人は兵將羽柴河内と名乗て撃て、は、權六は先の戦ひ

太田正盛ノ働

り槍の柄を切折らせ、太刀を抜てきりむすひ、遂は組打の勝負となりし、は、廣忠、河内を捕ておしぬせ、既、首を搔んとせし所、は、河内か組子一人來て助んとせ、時、は、奥村小左衛門傍より、助槍をせてこれに當る、其内、は、權六は、河内の首を取て立たり、は、又敵の隊長長井傳兵衛、三上半兵衛、松田利助、は、といふもの取て返し撃てか、は、小左衛門、津田彌角と、もふこれ、は、あさり、は、は、い、よ三人を追ひ拂ふ、以上岡田家譜、こ、ふまた堀田圖書助、は、隊より、水谷久左衛門と名乗、我本陣、は、向て、は、おの、武勇の手なみを見よ、は、と高言吐て突、は、か、は、太田忠三郎正盛時、は、十八歳、は、十文字槍を打振てこ、は、ま、當る、堤の上よて、は、ま、は、ある間戦ひしか、組討とあり、は、雙方とも堤乃蔭、は、轉ひ落つ、は、あ、は、やと見るまに、は、正盛敵の首さし、は、け、堤の上ふ立て、は、水谷久左衛門を撃取た、は、ま、は、名乗、は、ま、は、な、は、れ、は、は、は、太田家譜云、は、水谷久左衛門、は、先、は、當家、は、ふ、は、來て、は、奉公、は、出、は、先、は、は、は、其、は、後、は、堀田の隊下となりし、は、ま、は、今日、は、我、は、旗、は、章、は、を、は、見、は、て、は、單、は、騎、は、陣、は、頭、は、は、は、進、は、み、は、番、は、を、は、勤、は、め、は、し、は、て、は、出、は、來、は、ま、は、を、は、大、は、坂、は、に、は、討、は、取、は、ま、は、か、は、の、は、久、は、左、は、衛、は、門、は、の、は、十、は、四、は、年、は、政、は、盛、は、を、は、大、は、坂、は、に、は、加、は、來、は、て、は、父、は、の、は、戦、は、死、は、の、は、狀、は、を、は、問、は、ふ、は、正、は、盛、は、其、は、始、は、末、は、を、は、懇、は、に、は、物、は、語、は、し、は、且、は、其、は、孝、は、心、は、を、は、感、は、し、は、て、は、分、は、捕、は、せ、は、し、は、父、は、の、は、刀、は、を、は、某、は、の、は、贈、は、ま、は、し、は、と、は、い、は、ふ、は、増、は、田、は、本、は、家、は、譜、は、に、は、水、は、谷、は、久、は、左、は、衛、は、門、は、の、は、息、は、某、は、正、は、盛、は、と、は、せ、は、し、は、を、は、正、は、盛、は、却、は、て、は、某、は、の、は、邸、は、つ、は、と、は、載、は、る、は、某、は、の、は、父、は、の、は、驛、は、を、は、報、は、我、は、軍、は、こ、は、ま、は、氣、は、を、は、得、は、て、は、ひ

とくと柵際へ押つめ、當るは幸ひも突ふせ薙伏せ、我もくゞ功名を時
ふ暑既よ午を過く、味方の諸軍も虎口くゞを乗取て城遂ふ陥いりぬ、此日
當家よ討取る首級百またある中ふ、名ある所の首十一級を行營に獻す、注
文左の如し、

- 二級 一ハ兵器羽柴河内守首、
- 一級 敵の姓名傳らば、
- 一級 水谷久左衛門首、
- 一級 敵の姓名傳らば、
- 一級 敵の姓名傳らば、
- 一級 敵の姓名傳らば、
- 一級 敵の姓名傳らば、
- 一級 敵の姓名傳らば、
- 一級 同上
- 一級 同上

右の外は戦功ある輩は、

- 岡田權六廣忠○注ハ略ス、以下同シ、
- 松井四郎兵衛不實名
- 太田忠三郎正盛
- 草川三右衛門一壽
- 柴山七右衛門加久
- 岡部長左衛門紀近
- 本間十兵衛不實名
- 汀半兵衛
- 奥村小左衛門
- 森甚五右衛門永吉
- 荒木甚兵衛重勝

敵兵古橋新介と闘て討死す、

浅村治右衛門

落城の頃、嶋野の邊まで遺兒を見る、其衣服に桐の蔓乃紋つけしを、依ておもへらく、秀頼
公の族ならんと拾ひ取けてよくよく見まは、護身刀も木下家治と姓名を志るしと、
てこそいよく華胄の兒ありとおもひ携へ歸て養育し、浅村勝八郎と名乗らせしを、
成長の後召出して、祿七百石を與へ、家臣とあし、杉原三郎兵衛家治と稱す、

又此役は相従ひし諸士は、

元和元年五月七日

100

奥田伊織	堀某	早川少九郎次之
本間左近	谷津主水	齋藤九兵衛信廣
片岡主馬	井上長兵衛賴盛	小林五郎左衛門
同庄左衛門	小山新十郎	山浦左門蕃貞
渡邊善三郎	土屋市左衛門	村瀬右京
今井田藤兵衛	岩下喜左衛門	福井勘左衛門
持槍奉行 飯野次郎兵衛	徒士頭 園田仁左衛門	同上 才田仁右衛門
使番 山浦角兵衛	司る所なきは 寺澤六郎兵衛	同上 島作兵衛
同上 千野清右衛門		

信州土着の郷士にて此役より相従ふ輩には、

大井清藏	佐藤庄九郎	佐藤伊織
安井新八郎	中澤善三郎	井出善三郎
高見彌九左衛門	津金主膳	井出作十郎
市川善内	山宮三六郎	須野原次郎
橋詰庄次郎		

保科正光

〔寛政重修諸家譜〕

二百五十一

保科正光肥後守

五月七日

台徳院殿岡山御陣

座北とき、丹羽長重等と共に幕府に左に備へ、天王寺表をいゝ戦を勵し、

首十四級を得たり、此とき家臣等數多討死す、

〔譜牒餘録〕

六

保科肥後守保科彈正忠

正光肥後守

元和元年乙卯大坂御陣

二、柳原遠江守組に御先手仕、於天王寺表致合戦、家中之者共數多討死仕候、

保科正貞

正貞假名甚四郎、號彈正忠、○正光養子

元和元年乙卯年夏大坂御陣、伏見迄不寢之御番被仰付、至彼地御前に被召出、養父肥後守、御先手に可參之旨被仰付、則罷越、柳原遠江守、小笠原兵部大輔丹羽五郎(長重)左衛門、仙石兵部少輔、諏訪出雲守、藤田能登守、保科肥後守、於天王寺表先勢、及合戦然處惣構堤築地之内より、外之土居へ鉄炮を出し、嚴しく打掛味方令難儀前、畑に岸高く、其間深田也、正貞馬を乗下、深田を越、鉄炮を乗崩、則各遂一戦、敵を討捕追崩、幕行所、味方大崩して來ル、正貞踏止る成下知を、早速敵を追散せ、扱四五町を乗込、小笠原兵部大輔秀政、出合、秀政も正貞も前之合戦、家頼之者共數多討死、又ハ敵味方入亂人數不續、兩人手勢雜兵、纔三四十計、天王寺を左よして七八町も乗込、百騎

元和元年五月七日

101

余之敵ニ向ひ、兵部大輔ト一所よて鎧を合、遂一戰、正貞自身之高名其外敵を討捕追崩せ、正貞鎧手三ヶ所、鉄炮ニ一ヶ所、以上四ヶ所、深手を負、兵部大輔も深手を負、郎等過半討死せ、大權現様、台徳院様御穿鑿之刻も、右之次第令言上也、

赤羽又兵衛

〔保科家譜〕

上 翌七日ノ未明ニ、赤羽又兵衛大坂天王寺口へ詰寄、前へニ

小高キ土手アル所ニテ馬ヨリ下リ居テ、城ヨリ敵ノ出ルヲ相待處へ、保科彈正忠正貞公肥後守正光公ノ御次男ニモ此所へ御出ナサル、柴助右衛門モ爰へ來ル、又兵衛、彈正殿へ申ケルハ、人數ニ不足無之候、宜キ時分ニ吾等聲ヲカケ申サン、其刻ミ一同ニ打出、追様ニ鎗ヲ入レ突キ崩シタルカ能キ者ニテ候ト語り居ル處ニ、如案、敵數多土手ノ向フヲ通ル、彈正殿、最早可出キ哉ト、又兵衛答テ云ク、未々早ク候、能キ時分聲ヲ立候ハント押シ留ム、サレ、彈正公待兼給イテ、打通ル敵ノ中程へ咄ト呼ヒテ打出ラル、是ノ故皆々一同ニ突テ懸リ、鎗ヲ合セ攻戰フ、互ニ入亂レ、雌雄イマタ不分處へ、小笠原兵部殿、同信濃殿、右近殿○忠父子三人、主從十四五騎ニテ、手々ニ鎗引提々、間原ニナツテ馳來リ、此攻合ヲ見テ、眞一文字ニ蒐通ラルヲ、又兵衛見テ、

小笠原父子ノ奮戰

小笠原ノ臣小宮主稅ノ奮戰

小笠原ノ父子戰死ノ理由

兵部様カト詞ヲ懸レハ、中々ト答ヘラル、又兵衛カ云ク、大將軍ノ蒐ル所ニ非スト云ヘハ、兵部大輔殿、何事ヲ云フ、又兵衛唯能見ヨト曰イテ、大勢敵ノ引退ク、眞中へ、親子三人主從共ニ乘入レ、火出ル程奮戰セラレケルカ、秀政兵部大輔ヲハ、敵七八人ニテ鎗玉ニ指上ケタリ、信乃殿御一所ニテ討死ナリ、右近殿ニハ湯中へ切倒レ給フ、既ニ危ク見ヘケル處ニ、普代ノ郎等蓋ニナリテ切レ、右近殿ヲハ奉救也、此節小笠原家中ニ名譽ノ勇士大力ノ者アリ、小宮主稅ト云フ、後レ馳ニ走來リ、主君父子ニ討死ノ分野ヲ見テ、甚々怒リ、匄リ、持タル鎗ヲ取伸、石付ヲ片手ニ握リ、左右ヲ拂テ、退行大勢ノ敵へ蒐入、奮戰シテ軍ヲ破リ、終ニ主君秀政ノ御死骸ヲ奪返シ、信濃殿御死體ヲ尋ルニ、敵味方討死多シテ、何レヲ其レト不見分、小笠原衆追々馳來リ、所々ヲ尋見ルニ、傍ラニ弓小手指タル死骸アケニナリテ有ケルヲ、若ヤト見ルニ、正シク信乃殿ナリ、御首ハナシ、色々尋ルニ不見、去レ、御裝束無疑死骸ナリ、ケ様ニ兵部大輔殿親子、無利ニ敵中へ蒐入り、詮ナキ討死セラル、莫、畢竟正光公ニ對シテノ憤リ深キヲ以テ如斯ナリ、其故ハ親父貞慶ノ耻辱而已ナラス、今度大坂表ニ於テ仕出タルコトモナク、剩へ昨今兩度ナカ

ラ、保科家ノ者共ニ先ヲ越レ、彌憤深ク述懐ノ心是ニ起テ、忽ニ討死セラ
 トナリ、○昨六日、秀政ノ保科隊ニ先ゼラレシヲ怒レルコトナリ、同日八尾若江合戦ノ條所載本書ニ見ユタリ、
 赤羽又兵衛、老年ナレ、依御雇御供仕リ、今度モ大坂天王寺口ニテ挑一
 戦、薄手ニケ所負候ユヘ、大坂落城以後、北國ヲ直ニ信州ヘ下ル、此節又兵衛
 歳六十七ト云、

於大坂表、正光公御舍弟、彈正忠正貞公ニモ、天王寺表御働キノ刻、御手ヲ負
 セラル、○本書他、四 扱高遠衆討死ハ七人ナリ、其人々ハ、井上金右衛門、松澤主膳、坂井
 左太夫、人載セズ、

大坂御歸陣ナサレテ後、又兵衛ニ五拾石ノ御加増被下、隠居御知行二百五
 十石ナリ、又兵衛死後ニ隠居知行二百五十石ノ内二百石ヲ、又兵衛三男與
 惣左衛門ニ被下、今ノ仁兵衛祖父也、二男弥次兵衛事、原氏ヘ養レテ續他名、
 殘、五拾石ヲ三歳ノ末女アリ、是ニ被下置、此女子ニ御知行被下置子細ハ、又
 兵衛病中ニ正光公度々御來駕ナリ、末期ニ及ンテ殿様御入遊サレ、又兵衛
 ニ御對面、氣色如何、御意ナリ、御答ニ、最早押付埒明申ヘキ由ナリ、正光公存
 置、置 置アヲハ何ニテモ相叶ヘトラスヘキ旨御意ナサル、則難有旨御禮ヲ申

上、其ニテ又兵衛御願申ケルハ、三歳、幼女持候、是而已臨終マテノ殘念ノ由
 殿様上意ニ、其事少モ苦勞ニ存スルナ、其方死後能々御勞、可被遊、仰ラル、又
 兵衛合掌シテ奉拜、今年又兵衛歳七十一ニテ病死、天文十八年、元和五年、卒、右此御約
 束故、又兵衛死後ニ隠居知行ノ内五十石、三歳ノ女子ニ被下也、此女子長生、
 中澤六右衛門ニ嫁シテ、子共數多儲ク、扱此五十石ノ御知行、肥後守正之公
 御代ニ成、諸寺諸社又ハケ様ナル無益ノ知行ヲハ召上ラル、此節五十石モ
 上ルナリ、

又兵衛惣領武兵衛事、三百三十石知行シテ番頭相勤、四十八歳ニテ於信州
 高遠病死ス、長男仁右衛門家督、三百三十石拜領シ、直ニ番頭役被仰付、其以
 後羽州、最上ヘ御國替ノ節八百石ナリ、其後奥州會津ヘ御國替ノ時、千石ニ
 被成下、番頭職三十三年相務、六十歳ニテ於會津病死ス、

〔譜牒餘録〕

五十二 諏訪因幡守

父 諏訪出雲守源忠恒

元和元乙卯年夏、大坂再亂ノ時、榊原遠江守康勝、小笠原兵部大輔秀政等ト
 同ク、天王寺ニ於テ敵ト戦ヲ挑テ、手ツカラ其首ヲ取ル、

元和元年五月七日

或泰親、長宗氏忠

斷家譜

四十 成田長忠 左衛門尉

重長 新十郎

成田氏宗

氏宗 左馬助

斷絶

某内記

慶長二十年乙卯大坂役、於天王寺表得首級、

〔牧野彦太郎氏所藏文書〕

追ふ申候其元之様子委承度候間、具可被申越候猶下着之砌、面上にて

可申入候、以上、

一書申入候、今度大坂落城之儀、天下大慶不過之候事、

一左馬助内記自身高名仕候由、何ふ以満足申候事、

一先手亂候所ニ、兄弟之者ニ十騎之内付申候由、其内貴所前後被相付、殊更

手前之高名左様ニ可在之と、常々存及候處ニ、彌以満足申候事、

一内記えらき竝持田右平次迄も高名、偏貴殿引廻故と存事候、

一其表相替義候者、早飛脚を以可申越候事、

一其元逗留路次中下々ミたりニ無之様ニ諸事被入御念を尤候、頓る内記

氏宗及弟内記ノ勤

青木義員

子盛俊秀 頼ニ仕フ

供候て、目出度歸陣待入候、其刻積御禮可申入候、恐々謹言、

六月九日

青木與兵衛殿 參

〔青木氏系圖〕

卅三代 義員 與兵衛尉

慶長廿年、攝劔大坂御陣ニ、成田氏長、息左馬助康

元、同内記殿、家康公之御味方ニテ、勢ヲ大坂ニ發ス、然ルニ氏長、義員ヲ以テ

康元之後見ト頼、大坂ニ赴カシム、同五月六日七日之合戦ニ、義員、康元ノ兵

ヲ下知シテ、自身討捕首五級、其旨家康公之上聞ニ達シ、不日ニ京ニ條之御

城ニ義員ヲ召而、大坂ノ働ヲ被爲成御感候、雖然嫡子辨之助盛俊、奉仕秀頼

公故、身退江劔古川村ニ引籠居申候、然所寛永七年、松下石見守重綱殿ヨリ、

義員大坂ニ而高名ノ様子ヲ、松平土佐守忠義殿へ御物語有之、忠義殿聞召

サレ、佐々木大膳太夫高知へ被申、高知、義員被申者、其方一家小倉少助、忠義

ニ居申候間、先當分可參之旨、高知被申候、義員心ニ應セスト雖、不得止土

劔へ下リ申候、忠義被仰候者、義員者武勇之者ニ候間、山内修理太夫忠直ニ

具足ヲ着セ申様ニト被仰忠直へ、義員具足ヲ着セ申候、則扶抱御附御頼候、

元和元年五月七日

元和元年五月七日

一〇八

扶持方仕様トテ知行千石之積有之所ヲ賜其後忠義義員ヲ御呼被成本丸
ヲ御預ケ被成候、懇意故江、不歸、土、高知山ニ而病死、弓之達人、成田泰略

親ノ感、狀ヲ載セタリ、收野彦太郎氏所藏文書ニ同ジ、

慶安元年三月廿九日卒、年八十二、法名光壽院殿松吟徳玄居士

盛次青木弁太郎、政興左衛門、〇義員ノ子母成田下總守氏康女、定元和元年攝劔大坂金月

六月七日ノ合戦ニ、父義員之軍ニ在テ、軍功ヲ勵ス、寛永十四年丁丑十二月

朔日卒、法名清月宗休居士

同盛次

〔寛政重修諸家譜〕六百九十九丹羽長重五郎左衛門

平野口ヲ出陣、家臣等勇戦して功を顯せ、この日討死せるをの二人、首を得ること、凡十四級よをよぶ、

丹羽長重

〔丹羽歷代年譜〕

長重 元和元年乙卯 四十五歳

同月〇五 七日ハ、諸手一同兵ヲ進テ大ニ戦フ、長重今日ハ平野天王寺江人

數ヲ出ス、此處城將眞田幸村等ノ猛將共越前家ノ面々相戦フ併微兵故、初ヨリ備ヲ崩シ、群ル城兵ヲ

討取趣也、同所二之谷ニ到テ城兵ヲ谷江追入、此時九兵衛尉秀重唯一騎前

ナル田ヲ乗越シ、聲ヲ發、當家高恩ヲ存ル者ハ、我ニ續クヘシト叫呼テ、先ノ

丹羽秀重等ノ戦死

長重ノ勇戦

田ヲ越馬ヲ乗放下立テ、城兵集リ扣タル中江突入、秀重ノ一言ニ勵マサレ、
駒塚義左衛門某茂右衛門、馳進、秀重城士ヲ鎗付首級ヲ得ル處、城士五六騎
來テ、秀重ヲ討、因テ此處ニテ伯父丹羽九兵衛尉秀重戦死、此處ニ駒塚義左衛門馳付、城士ノ
内一人ヲ討取、追退テ秀重ノ死骸ヲ又隊長ノ内丹羽淺見掃部忠政秀重ノ討
ヲ馬ニ乗セ陣營ニ退ケ引取之、又隊長ノ内丹羽淺見掃部忠政秀重ノ討
死ヲ視テ馳進テ、城士六七騎ト相戦ヒ戦死、長重臣掃部加藤嘉明ノ合戦其
外粉骨ヲ盡シ、城兵ニ當テ相働首級ヲ得ル臣大谷與兵衛元和、成田彌左衛
門正忠、高根三右衛門久次、後改壽久、長屋茂左衛門元吉、大谷左馬介元茂、大谷勝
左衛門某、長谷川瀨兵衛某、駒塚義左衛門某等也、尤此内高根久次、長屋元吉
二人ハ、茶臼山御陣營江到、自身コレヲ達上聞、此外戦功ノ士有、但歸陣以後、大谷元和始
首級ヲ得ル者共、戦功ノ者共、銘々右ノ如ク諸臣馳散テ、谷々所々ニテ城兵
ニ當ル、因茲長重單騎ニナリ馳廻テ下知スル處、白エツルノ城兵二百餘、但
士利勝永ノ長重ノ犀角ノ甲ニテ單騎ナルヲ視テ、一度ニ馳懸ラントス、于時
長重ニ從フモノ、步行僅ニ十二人ヲ召連、大ニ怒滿シテ、此大敵ニ當ルヘシ
ト馳向タル勇粧ニ、二百餘ノ城兵恐レ戦ハスシテ、天王寺ノ方江退散スル
ヲ、長重是ヲ追撃テ、步行ノ者十二人ノ内高橋少兵衛某、宮本長右衛門某、屋

元和元年五月七日

一〇九

元和元年五月七日

一一〇

内佐五右衛門某前川才兵衛某等粉骨ヲ盡シ追撃テ銘々首級ヲ得ル、口上
書附録之、此追撃ノ時、淺野采女正ニ面謁ノ外此處ニ來ラス、此度大坂陣長重
手江得ル首級都合十四、是僅ナリト雖、長重討死ニ決シ、微兵ヲ以テ粉骨
ヲ盡シタル戦功ハ、具ニ上聞ニ達シ公籍ニ載ラレ、且諸侯伯知之處也、但伯
重、慶長五年、小松ニテハ忠諫ニ及、幽居中モ全ク勤仕、此度大敵ニ當テ戰死、
長重、エノ忠節誠ニ稱美スル處也、○附録口上書ハ、次ノ丹羽文書ニ同ジキ
略ス、

〔丹羽文書〕

（端裏書）
大谷與兵衛

丹羽家臣
戦功書上
大谷元和

去五月七日之大坂表ニテ御合戦之刻、敵ニ相候所書付可進之由則書付
進候、

一御合戦ニ成候刻、御人數御立被成候前之田を越、畠野など罷過、先ノ田之
前ニ多敵ニ相申候、我等左勝左衛門（大谷）カ、リ申候、右をハ彌左衛門（成田）カ、リ
申候、我等先ニ敵六人居申候、それハ、カ、リ、鎧を脱きおろし申候、
田之中ニハ敵あまゝ居申候、左ニ勝左衛門セリあい申候、うゝれ可申
と存勝左衛門方へおけて罷越候處ニ、そや勝左衛門もくひを取申候間、

大谷勝左
衛門成田
正忠ト並
ビ戦フ

其所ニ敵あまゝ居申候て、我等ニあか、りくゞ脱き申候處ニ、くゞふせ、
則くひを取申候、かふと共ニ取申候て御めよかけ申候、其刻ゞうき衆鎧
を仕躰申上候へ共、我等年罷寄、鎧を仕くゞ打仕躰、いんけんかぬゝく申
上儀もいゝ、と存、無異儀候、只今御尋被成候間如此候、

以上

九月十五日 ○元和元年

大谷與兵衛（花押）

淺尾勘太郎殿

以上

御念之入る御書忝奉存候、去五月七日御かつせん之様子さいせん申上
候へ共、重ゝくゞき様子被成御尋候、御うつせんニ成候時、御人數御立被
成候前之田を越、先之田之まへへてき六人カ、リ參候、其てきと鎧を合、田
へおいふゞくゞうちを仕、くゞびを取申候、其様子成田彌左衛門の候間、彌左
衛門相尋候へハ、其段を彌左衛門申上候、さいせん如申上候、右之うゝへハ
彌左衛門カ、リ申候、左之うゝへハ少左衛門カ、リ申候、たゞいニことと

同

元和元年五月七日

一一一

元和元年五月七日

一一二

を合申候、少左衛門、彌左衛門、兩人之鑑之あり申候を、我等見申候、少もい
つゞり無御座候、上様へ御書付被成、御あけあさるへく候、又きこも見申者
於在之、御書付をさせ可進之由御意ニ候間、如此候、もろおろ彌三郎、もろお
か勘五郎、是ハ御てつづり者にて御座候、只今ハ安中ニい申候、又惣太夫と
そや此兩人ハ、我等若友にて御座候、此者共見申候間、如此候、恐々謹言、

九月廿六日

淺尾勘太郎殿

大谷與兵衛

元和(花押)

同

(端裏書)
成田彌左衛門

大谷與兵衛かへ御書ニ付、與兵衛鑑ヲ、あひせ候様子、我等見申候、と
御書之内ニ御座候、さいせん如申上候、我等より左ノウを與兵衛ハ、ハカ、
り候て參候處ニ、てき六七人ハ、り參候と見へ申候、其者共と鑑合、おいこ
ミ申候、我等た、りよ見申候、其時分一兩度まで如申上候、與兵衛と互ニこ
とををあひせ申候、少左衛門ハ、與兵衛へより又少左之かへハ、カ、り鑑合候

其所田之前後にてき大せい御座候へ共、兩三人鑑ヲいとし、あまとのてき
おいこと、三人ありらくひを取申候、少もいつゞりとあふめし候ま、りく
候、以上、

九月廿六日

上野左兵衛殿御申

成田彌左衛門

(正)
重忠(花押)

成田正忠

(端裏書)
成田彌左衛門

今度大坂ニある之様子、御家中之者共、めんくのえさらき書付候て上可
申候由、與兵衛へりさへ御書被成候、左兵衛へりさよりも、其分御意之由、各々
へ申越候間、大々書付上申候、
一拙者儀、御人數御さて被成候まへの谷ノ田ヲ越、二ノめ田之まへりと、其
田之えさにてき人數さふらい計四五十人計さきへ罷出候、い申候、其
口のひりりさへハ我等參候、四五間計西ノりさへハ與兵衛へ參候、それ
より又少西へハ少左衛門尉參候、右之てきの人數中よりも、三四十間不

元和元年五月七日

一一三

元和元年五月七日

一一四

と十人計つゝ、てきさきへかゝり候て參候我等よりさきへ四五人丕と御方之衆いつまやらんかゝり候り、其内ヲ壹人御方者にきたをさき候て、殘者おいたてらま候處ニ、我等をりこゝ候内ニ、そや十人計之てきひきのき、多人數中へそいり可申候様ニ仕候を、あいともなく我等壹人にておいこゝ候へ、其内三人かゑし我等と鎧ヲあまらせ申候、則我等ノ鎧たゝきあり、右ニ申候二ノめ田へおいこゝ、てきあまゝ御座候中にて、くゝたをくひを取申候、それ西ノうゝの田へハ、與兵へおいこゝ候又少西へハ少左衛門尉おいこゝ、くひヲ取申候と見へ申候、我等之様子與兵へ、少左衛門尉兩人見可申候と存候、其上御家中御てつゝの者ノ内、我等之鎧仕候も、又くひを取申候も、あよてたゝかよ見申候者、壹兩人御座候と申候間、めゝ出さま候て、御さつゝ可被成候、又我等之取申くひ御めよかけ如申候、うふとき候て御座候つゝ事、

成田彌左衛門尉

九月十五日

正忠(花押)

御小性衆 御申

大谷勝左衛門

(端裏書) 大谷勝左衛門

今度大坂表五月七日之御合戦之刻、我等敵ニ相申所、御人數御立被成候下ノ田を越畠へあかり、其末ニひろき野ノとくある畠御座候、其畠ノ敵七八人丕とかゝり申候、畠にて鎧を仕おひこゝ、田にてはきたをく、かふとあうらくひを取、御目よかけ申候、

以上

九月十五日

大谷勝左衛門尉(花押)

淺尾勘太郎殿

高根久次

(端裏書) 高根三右衛門

今度大坂七日之御合戦ニ、天王寺表ニおいて私之様子、御備おのり出、二谷めの少こゝあゝらゝり候て、敵おれいつめはきたお、鎧おとり申刻、弟の淺尾勘太郎聲をうけのりぬけ申候、私鎧取候て立あがり候へハ、登こを長谷川瀨兵衛、大谷庄左衛門、永谷茂左衛門、彌左衛門おいの勘三郎、

元和元年五月七日

一一五

元和元年五月七日

一一六

此者共のり通りありら、互ニ言葉をかまじし、私取申鎧いつきも見申、其後山田茂右衛門ニいき合、同前ニ見申、それる鎧を長重様可掛御目さめ、御旗本へ參候へハ、市助計にて、長重様御座不被成候間、それる馬ふてのり出し、御行衛を尋申候へハ、天王寺の後ニ有、永谷茂左衛門ニあり申、其時分茂左衛門も鎧を取、私同前ニ御行衛を尋申候て、則長重様に鎧を掛御目候へハ、將軍様御旗本へ持參仕候へと御ぢやう候間、茂左衛門兩人參掛御目、それるちやうそ山へ參候へハ、御所様種々御尋ニ御座候、それる天王寺長重様御旗本へ參候右之様子、右之者共ニ、後日ニ御尋可被成候、此等之趣御披露可預候者也、

高根三右衛門

九月拾五日

久次(花押)

上野左兵衛殿

駒塚茂左衛門

〔端裏書〕
駒塚茂左衛門

今度大坂にて、我等えさらき之様子申上候事

丹羽秀重
ト並ビ進

秀重ノ戦
死

一御そあへの前之田をこし、むき畠をこし、さきの田を二三間野之うたへあり、(丹羽秀重)九兵衛殿馬よりあり被成候所ニ、てき大せい御座候中るも、むまや五六人てやりをもちり申候所ニ、九兵衛殿其中へつき入被成候並ニ我等も長忍のやりをもち、てきの中へえせ入つき合申候て、三やりつらき申候、内一やりハ身ニあさり申候、我等もち申候やりとうて不申候間、刀にてきりころえう、くむを取申候所ニ、くそくへあさり、我等刀打あり、申候間、てきのうさあを引ぬき、則くむをとり申候所ニ、九兵衛殿打死被成候間、くむをてきにとらき申間敷と存、七八人付、九兵衛殿を馬ニうちかけ、いそき壹町計相のき申候所ニ、大谷與兵へ殿うらみやう被成、くむをもさせ、我等左之ひりしノ方を御えさ本之方へ御越被成候間、おい付申候て、我等與兵衛殿へ申候ハ、九兵衛ハ如此打死被申候、我等ハ如此うらみやう仕候と申候て、與兵衛殿へ、我等とり申候くむを御目ニうけ申候へハ、與兵へ殿被仰候ハ、九兵衛殿打死ハ不及是非、自分のうらみやうてりら之儀と被仰候、則我等もち、御前へくむ上可申と奉存候へ共、九兵衛殿をとりおき申ニう、り合、我等もてをおい申候間、不罷成候

元和元年五月七日

一一七

元和元年五月七日

一一八

多、九兵衛内彦九郎をたのミ、御ちんえへくむをもとせつつ尋させ進之申候へ共、尋合不申候多罷歸候ニ付多、次ノ八日ノ朝、惣兵へ殿を以、我等も御直ニ上申候、右之通有之間、ニ申上候、仍如件、

元和元年九月十五日

駒塚茂左衛門(花押)

上野左兵衛殿

大谷元茂

(端裏書)
大谷左馬

覺

一五月七日ニ、大坂表ニて之様子、天^(王寺)皇子之たうの東之道とをりを參、二谷目を越候ててきよあ申候、そこにて取おくれ、天皇寺之たうる五六町計も越候て、又てきよあいて高名仕候、以上、

大谷左馬助

九月十四日

元茂(花押)

上野左兵衛殿

永屋元吉

(端裏書)
永屋茂左衛門

茶白山附
近ニ戦フ

築地際ニ
進ム

秀忠長重
ノ安否ヲ
問フ

一五月七日大坂表之様子、御尋ニ依申上候事、

(マ、下男)

一我等をり合申所者、ちやうを山のき日に族貳百騎計と見え申候、其中の我等參申を見付、族五人我等ニこととおろけはきり申候、相つきはは、我等左ノ日きみあり申候、てはおもはき申くと覺へ申候、族きおいら、り申候時、我等右のてははくを申候、其時跡より身うと三人參、我等み力あはせはきり申候へ、族三人引申候、残る貳人之内壹人、我等はきた不候へ、残る壹人之者、鎧おきてのき申候、我等もやりおすておつりけ、はいちき日みてくふせとり申候、其時不うとい衆、又ハ上様衆ニもとえおろし置申候事、

一右我等鎧合申所、高橋庄兵衛見申候て通り申よ、ニ候、御尋可被成候事、
一其後殿様御座所を尋掛御目候へ、上様御前は急參候へ、御ちやう被成候間立歸、將軍様掛御目申候へ、おのらせさるか、と御尋被成候へ、共いそかじく候て、名乗せ不申候由有様ニ申上候、重多、五郎左衛門ハいつり、ニ罷有と御尋被成候間、久敷者共うちまみ仕を見候、りけこ

元和元年五月七日

一一九

元和元年五月七日

一一〇

申候り、何方ニ罷有も不存与申上候事、

一其後臆るべきより御所様御座被成候間、掛御目候へ、とり所ヲ御尋被成候ニ、則我等鎧合申近所ニ御馬立申候ニ依、むういぬてをり付、たいち日きぬてくふせ取申由申上候へ、將軍様に急可掛御目申由御ちやう被成候事、

右之様子、まなく多く御座候間、被召出御尋被成へ候事、
以上

九月拾四日

永屋茂左衛門

元吉(花押)

上野左兵衛殿

高橋庄兵衛

(端裏書) 高橋庄兵衛へ

五月七日之於御陣之様子之事

長重ノ馬側ニ從フ

一三つめの谷ぬて、族二度返し申候時迄御供致、御馬ニは、き申候、其所則中村理右衛門ニ堅とを合申候、それもうぬんニ被思召候、御馬は、

天王寺口ニ戦フ

き申候御馬屋の彌市、佐之助、小馬ゑるし持申候喜藏与申者ニ御尋可被成候事、

一族二度返し申候時分、御馬のさたへとしぬけ、天王寺口土山のき日ぬて高名仕候事、手堅御座候事、則其時鎧とり申を見申候て、互にとを合申候人ハ、森川金右衛門殿御内清太夫と申者ニ、其所ニ多言葉ヲ合申候、又御内之茂左衛門、慥成様子被存候、偽ニ被思召候、被尋御尤ニ候、

慶長廿年

五月七日

高橋庄兵衛(花押)

關八右衛門殿

小澤次郎右衛門

(端裏書) 小澤二郎右衛門へ

今度大坂おもてよて五月七日之様子之事

一丹羽かもんをてき六人仕はきふせおもてを取申候所ニ、我等かけぬけてきをあつたらひ、其後三人とはき合申候、あとも見うと參候ニ付、三人之てきものき申候、其後かもんゑういの所へ參候へ、うもん内助條長

元和元年五月七日

一一一

元和元年五月七日

一一三

兵衛馬取壹人まういことりつきい申候則まういをのけ申てきえい
 いまさい申候と存我等よておくり參候處ニ三丁をうりあよて大
 谷與兵衛ニ相申候其時九兵衛殿のまういも馬ニのせ申のけ申候ヲ與
 兵衛我等も其よて見とけのけ申候そまら長重様御座所ヲ方々さき
 ニて相尋申候へ共小馬まるし見つけ不申候ニ付御のり共尋候へ者
 上様之右之まきこたらい申候それへ參候へハ與兵衛彌左衛門少三郎
 ニあい申候兩三人ハ其時おもてを上様へ上ケ申へきとて被參候そま
 ら左近殿も御成被成候て與兵衛に次第ニ仕御のりさうき原たうた
 うニ殿御のりのまきま引よせ申候内ニ長重様御座所あれ候て御の
 りおのく同事ニさし參申候我等てき三人とまき相申時分ハた
 まも無御座候我等下人共も壹人もまき不申具足之をりきすハ五月八
 日之御陣取ニて長重様へ御目ニかけ申候様子之儀ハ書付ニても不被
 申上候間御尋も候者罷上り可申上候以上

九月十五日

上松左兵衛殿

小澤二郎右衛門(印)
(花押)

中井重旨

(端裏書)
中井勘三郎

今度大坂表拙者様子御人數御さて被成候前之田々二つめ之田ヲ越候
 甘間許參候へハてき居申候條則それニ馬のまをてりり申候處ニて
 きひきえらいのき申候間かちニておいつき不被申くひ取おくは候ゆへ
 そいふにいそき城ノうさへえり參候へハ其まきニ大谷左馬助ニあ
 い申候又其まきニ御まうとう衆久大夫ト申仁うとたうふ覺申候其
 人ニあい申候そまら町へおい入候二ノ丸ノまきとまきニてきこおい
 つき鎧ニあつきたおしひ取申候可罷歸と存候所越前衆まきとき
 ニ居らま申候人被申候城々只今ついで出可申候間こまら鎧可有之
 と拙者ニことえヲうけ被申候間まへうと取申候くひヲえあをかきふと
 ころへ入きと口ニ居申候所ニ壹町計西ノよこ町ハ馬のりノてき廿人計
 城へにけ入申候ヲ我等おいうけまきをえいり候へハそまらいらま候衆
 も同事ニえいり被申候そまらくひ取申候罷歸候處ニ天のふ寺す
 一の町あまより火ヲうけ申候て罷歸候事成不申候間西うさへまじり罷

元和元年五月七日

一一三

二ノ丸木
戸際ニ進

天王寺前
筋ニ火災
起ル

元和元年五月七日

一一四

歸候ゆへ、すいふんそやく城へ參、くひヲ取候へ共、少おそく御前へ罷歸候
此分可預御披露ニ候、

九月十五日

中井勘三郎

重旨(花押)

御小性衆 御申

上野左兵衛

〔端裏書〕
上野左兵衛

覺

一今度五月七日於大坂表ニ、二谷めよて敵ニ相申候へ共、とりそぐれ申付、
左ノ方へかゝり、茶うそ山を左ニいとし、天王寺本道へ乗上ケ申候へハ、
右左ニ敵人數を立居申候、又のき申者共在之内ニ、ぐんそいうち目の本
ニそぐまを付申武者のき申候、能者と存、是を念ヶけ一文字ニ先へかせ
き申候、そと町壹町も御座可有參付不申所よて、瀨兵衛我等ニ追付、跡
カ言葉をうけ申候、はゝき參候へと申所ニ、瀨兵衛跡よてはきたをさ
れ打死可仕を、我等をけ候てゝかけ通申候跡よて敵寄返し申由先よて

承候、跡之儀不存候事、

一そと町よてやり付候へハ、丹後者よて候と申候間、今度丹後と申ハ、ま
ゝニ名字をあのり候へと申候へハ、駿河衆と申候ゑと、かゝと存取不申
候、是ハ名左衛門見申由候事、

一右仕合よて先へかせき、本町へかけ入申候、其子細ハそぐめの武者ぐん
むいうちもち申者直ニ可參と存、心ヶけ參候へ共、見へ不申候ゑ、方々
尋前ノ口へ乗出し候時、遠江殿衆其町口へかけ入申候ゑ、乗迎、五郎左ハ
無御存りと尋候へ共、不知由申候間、それゑ東へ參候へハ、惣々まへの不
り成田殿と御埋被成候むらゐノ時分、其屋々ノ内カ鎗炮四ツ五ツう
ち申候、此内ニ敵い申候とて、飯ノ掃部殿衆と四五人門之、ときいゝをう
ちやぶりそい入候へ共、其内ニうらへにけい不申候間、何ももんゑそと
へ出申候、其時さくノむらゐニ名左衛門見へ申候間、人を遣一つニあり
にしへ參、越前衆ノ先手と一所ニ又候哉町へ入申候、先くつまかゝり申
候間、ときノ道をのり先へ參候へとも、燒出通り不被申候間、前ノ口へ罷
出候、其時才三郎久大夫ニ相申候、天王寺そと町ノ在之道を、我等カ先へ

元和元年五月七日

一一五

元和元年五月七日

一一六

御家中衆參候を見不申候以上、

元和元年九月十四日

上ノ左兵衛(花押)

御小性衆

中村理兵衛

長重ニ梅
漬ヲ上ル

(端裏書)
中村理兵衛

一御馬よ付申候事、てきの二度返申候所にて、梅だけおさし上申候、其後ハ
てきを心りけ御さきへ參申候、見申候物より、伊右衛門、長右衛門、小兵衛
兩三人之衆よことせもうけあい申候、同仁左衛門も我等之儀ハ存被申
候、

元和元年 卯五月七日

中村理兵衛(花押)

關八右衛門尉殿○コノ外、尙二十一通ノ書上アレドモ省略ス、

丹羽長重
ノ書上

五月七日御合戦ニ、丹羽五郎左衛門手前様子之覺

一我等事、人數を立罷有所る二ツ目の谷の少前よて敵ニ寄合、我等者共、鎧
つきを仕、則谷へおいこも首五つ討取申候、此所よて我等おぢ○丹羽秀重を

始、おとな兩人、此外ニも又貳人討死仕候事、

一同谷を越候て、我等者共、敵を方々へおいりけ參候ニ付、拙者ニハ
其方からの者十貳人相付、二三町計參候へ、白キゑつるのさし物仕敵
を一町計ニ見りけ申候、一貳百も可有御座候哉、一度ニ返し申候間、こた
ゑ申候所ニ何の働も無御座、天王寺の筋ニあさり引取參候間、跡をた
い申候へ、敵足を出し申付、天王寺近邊よて、我等からの者共、やうや
う首四ツ討取申候、無人故、右之分ニ御座候、其後つき山の先よて、人數を
あつめ有之所へ、別の筋へ參候馬乘共、首三つ取候て參候、御合戰場つ
き山までの間ニ、首數以上拾貳取申候、此外ハ大坂廻よて取申由候事、
一おいくづし申二谷目を越候て、ハ、我等參候筋よて、誰ニも相不申候、
其後つき山の先よて、淺野采女ニ出合申候、將亦高名仕者共、并拙者ニ付
申候からの者共、別紙ニ書付申候以來、我等所ニ奉公不仕者も可有御座
候間、以連々相聞え可申候以上、

九月廿五日

丹羽五郎左衛門

酒井雅樂頭殿

元和元年五月七日

一一七

元和元年五月七日

土井大炊助殿
安藤對馬守殿

一二八

長重隊首
帳

五月七日丹羽五郎左衛門内初の敵ニ相申時高名仕者共、

首壹ッ

大谷與兵衛

首壹ッ

同 少左衛門

首壹ッ

成田彌左衛門

首壹ッ

高根三右衛門

首壹ッ

駒塚茂左衛門

天王寺又ハはき山邊よて高名仕者共、

首壹ッ

大谷左馬助

首壹ッ

長屋茂左衛門

首壹ッ

長谷河瀬兵衛

首四ッ

かちの者四人

以上首數拾貳此外ハ大坂城まじりよて取申由候

將亦白キゑづるニ相申まで我等ニ付申かちの者共

首壹ッ

高橋 少兵衛

首壹ッ

屋内左五右衛門

首壹ッ

前川 才兵衛

首壹ッ

宮本長右衛門

首壹ッ

荒井仁左衛門

奥野 彦兵衛

渡邊 久大夫

岩田 長兵衛

玉川猪右衛門

中村里右衛門

山中 小兵衛

佐藤六右衛門

以上拾貳人

右之者共以來我等所ニ奉公不仕者も可有御座候間以連々相聞え可申候

元和元年五月七日

一二九

元和元年五月七日

一三〇

以上、

九月廿五日

丹羽五郎左衛門

酒井雅樂頭殿

土井大炊助殿

安藤對馬守殿

丹羽六衛門

〔蠹簡集殘編〕

〇七 土佐

先年於大坂表丹羽六衛門首尾之事

一大坂表於道明寺ニ、五月六日御合戰之刻、丹羽式部少供仕、母衣指隨分かせき申候へ共、手に逢不申候付、無念ニ存、則御合戰相濟、其場にて式部少首數吟味在之處に、使よて式部少私申候之、今日手ヲふさき不申候事口惜存候、皆共如及見候、かせきよ疎遠無御座候得共、天道ニたき候りと存知候併明日よも御合戰可有御座候間、其節一番首を討捕不申候者、二度御奉公仕間敷候間、此段只今急度申候様ニと、今井清左衛門と申者ヲ以申候へ者、式部少承り、私ニ出候へと被申、罷出候之處、直ニ被申候へ、只今之申分不届申様ニ候、其方之事家老も申付置候之間、若きもの共へ下知仕アそ尤ニ候、當分手ニ逢不申候義不苦儀と被申候條、私申候之、荒

六衛門ノ

角之入不申候、今日之首數へ入不申候儀、御家ニある高知をも被下候ニ口惜存候間、重御合戰之刻一番首取り、御目ニ不掛候へ、御奉公申上間敷と直々ニ申、其所立被申候、

一翌日七日、於天皇寺表ニ御合戰漸初り申鉢ニ候間、時分能候、昨日之言葉之通首尾合可申と乗出し候へ共、六衛門振り見事ニ候と、傍輩鈴木主水跡にて申聲を承り候、敵人數を立在之候之處へ馬ヲ入、丹羽六衛門と申えのニ候、鎧可仕と言葉ヲ合候て、鎧付、甲付之首ヲ討捕、式部少前に持參、昨日申上候通一番首取り申候、御覽候へと申候へ者、一段見事成、裁判手柄之段感入よ、ニ申候、我等申候者、是ハ右之言葉之首ニ候、昨日之手をふさき不申候間、今壹つ取り、昨日之分ニ可仕と乗り出し候之處、式部少被申候者、手柄ヲ仕候處ニ、又々何さる事ニ候哉、遣志申間鋪候とて、磯村忠兵衛と申えのヲ私馬之口ニとり、たけ留被申候、是非可參と申候へ者、沙汰之限ニ候、只今旗本も可及合戰よ候之間、手前ニ、あかせき尤ニ候、此上ニ參り、いゝ様之働仕候共、無其堪越度ニ可仕と事之外腹ヲ立達る留馬之口をも放不申候付キ、無是非留り申候、

元和元年五月七日

一三一

元和元年五月七日

一三二

一右之場所ニ由之證據人丹羽式部少殿内今井清左衛門磯村忠兵衛松平
(長尾)
安藝守殿内上田七郎右衛門右三人堅固ニ罷在候間能可存候、○中

寛永九年二月 日

佐久間信重

〔寛政重修諸家譜〕

五百三

佐久間信重左京亮五郎兵衛

元和元年大坂の役、

榊原遠江守康勝ヲ組ヲ屬して先鋒とれり、○中略五月六日七日天王寺表
ヲをい、森豊前守勝永ヲ兵と戦ひ、まゝ首級を得たり、

大久保忠據

〔寛政重修諸家譜〕

三百

大久保忠據右馬六郎

元和元年大坂陣北とき、榊

原遠江守康勝ヲ手に屬し、五月七日首級得せり、

○藤田忠季改易ノコト、本年十二月二十七日ニ其條アリ、參看スベシ、

○茶臼山方面ノ戦況、其三酒井家次竝ニ其組

酒井家次

〔寛政重修諸家譜〕

六十

酒井家次左衛門尉

元和元年、ぬゝ、ひ大坂に兵を

向らる、より先鋒乃第四に列し、五月七日、天王寺より出張し、戦を勵
み、首三十一級を得せり、

〔大泉叢誌〕

四十四

酒井家次

元和元年五月七日、大坂陣也時於

天王寺邊有軍功、

信正曰、○中略冬陣ノ翌元和元年乙卯の夏陣、宗慶公○家次ハ神君ノ
御右備よて、松平豊前守、松平志摩守と同列し給ふ、五月七日卯刻、神君平

岡を御出馬、平野表へ進み給ふ、夫より次第、天王寺の南へ攻寄らる、爰
よ於て御旗本勢と城兵苦戦、左衛門尉家次軍功有て、首數四十二討取、

○中略宗慶公、天王寺表よて御合戦の時、相良三郎左衛門か一番鎧、北爪九藏ヲ
高名の噂等、御家中よて今も残れる美談種々あり、と、事長なれ、これを

註さす、此下脱誤アリト見ユ、何れの御代よ、左之御書付公義へ被差出候由、
權現様御代、長柄金瓢朱之丸、籙先祖左衛門督忠次家よ、向後相用可申

旨上意御座候、其後度々相用申候、嫡子左衛門尉家次、大坂御陣の節
後右之兵器相用候、

月 日

〔寛政重修諸家譜〕

七

松平藤信吉安房守

五月七日の暁、かひに、先手ハ

を、ミ軍功、茂々、藤堂高虎、此よ、茶磨山、此御陣ヲ申け、信吉、茂
め、て、か、給、ふ、所、を、か、は、と、て、御、感、ヲ、預、致、是、日、此、戦、ひ、に、

松平信吉

元和元年五月七日

一三三

元和元年五月七日

二三四

同忠國

家從服部豐前某勝源助某うち死し、服部惣太郎某、杉浦九郎左衛門某、岩瀬久左衛門某、稻村左近義次、師岡帶刀政久等をのこし首級を得たり、

忠國初忠勝山城守信吉ノ子 元和元年大坂の役、五月七日、父とおあし先手にせ、兄、天王寺口にし、首級を獲、合徳院殿の御感をかう事、

森川重俊

〔寛政重修諸家譜〕

四百 森川重俊内膳正

七日、天王寺表ふをいて、まゝ敵

を討と、

戸田康長

〔寛政重修諸家譜〕

四百 戸田康長丹波守

元和元年の役、みゑさうひゑ

てまのり、御麾下此先隊小列し、五月七日の合戦、天王寺口小陣を、とたふ本多出雲守忠朝衆、み先立ち、敵陣に入り、戦死せ、まより同隊の諸軍おなしくせ、みゑ戦を挑む、まゝにをいて、康長もみゆら鎗を把て、み戦ひ、數所の創をかうふ、已み討まむとせ、從士近藤兵右衛門正次來て、まを救ふ、康長つゝ、其敵を斃し、正次をれ、ち首を獲り、まのとき、家臣等も戦死するもの六人、よ及ふといへども、首十三級を獲て、まのり、忠光加賀守 元和元年の御陣、み、父康長、よあさうひ、天王寺口に陣し、力戦して功あり、

同忠光

〔譜牒餘録〕四十四 松平丹波守 康長中元、元和元年夏、再赴大坂之役、五月七日、向天王寺口、與本多出雲守忠朝並軍陣列、從兵遽挑戰、康長制止、窺機然、忠朝曾有敢死之志、單騎直衝敵陣、其從者共亂軍馳、由是我兵忽背法馳出、康長不能止之、亦自把鎗驅敵、破堅摧銳、數受戈鋒、身被三創、而事已危、會從者近藤兵右衛門尉正次來救、時康長斃一人、正次乃斬其首、於是敵兵遁走、其間我兵戰死者六人、得首十三、今年康長五十四歲、

内藤忠興

〔譜牒餘録〕

四十四 内藤左京亮

内藤家傳下 帶刀忠興傳

五月七日、午下刻、帶刀忠興ハ、松平丹波守康長ト相備ニテ、忠次酒井家次ノ誤下同ジノ組也、其先ハ本多出雲守忠朝也、敵ノ鐵炮雨ヨリモシケシ、然ルニ忠朝少モ擬議セス、備ヲ堅ム、從卒甚ス、康長忠興ニ云イケルハ、忠朝アマリニマハラナリ、足輕ヲ加勢セントアリ、忠興モ最ト同シ、則軍使ヲ馳テ告知セケルハ、此方二三ノ備サヘ、鐵炮嚴シクノ立カタシ、御邊ノ形勢無下ニ危ク見エ候、鐵炮足輕二三十人モ被召寄、御先ヲ圍マルヘキヤト有ケレハ、忠朝怒レル氣色ニテ、使者ニ答被申ケルハ、某イマタ軍ヲ不始ハ、御加勢ヲ乞奉ルニ不可及、一戰之後、忠朝イカニモ成候バ、其節ハ頼ムヘキトノ返事ニテ、敢

忠興康長本多忠朝ヲ援ハン

忠朝之ヲ拒ム

元和元年五月七日

一三五

テ許容ノ氣ナシ、兩將重テ軍使ヲ飛メ、然ラハ御一戰ヲ始ラルヘシト云、忠朝軍使ニ向テ云ケルハ、上意ニ非スンハ、取カ、ル儀モ如何ト有、使者其時、左候ハ、上意ヲ窺ルヘキヤト云、忠朝ソコニテ、使者返テ兩將ニ告ヨ、上意ニ依テ合戰ヲ始ヘシ、使者不還内ハ始ヘカラス、心易カルヘシトテ被返ケルカ、早一文字ニ突テ出、散々ニ突戰ヒ、暫時ニ討死シケレハ、忠次ノ先陣モ、是ヨリ崩レ立テ、御旗本勢散亂ス、諸手一同ニ軍始テ、康長モ手痛ク働キ、自身疵ヲ蒙リ、郎等近藤兵衛門急難ヲスクフ、其外十餘輩高名シ、十三人討死ス、忠興朱具足ニ茜ノ指物、金ノヒラヤ付タルヲ指、蘆毛ノ馬ニ黒鞍ヲイテ、金棒ト云文字ヲ持、其鉢甚イチシルシ、側ラニハ大島半兵衛、兒小姓原田武藏、丹羽才三郎、步卒ニハ保鷹吉兵衛、渡邊六右衛門等也、爰ニ水谷伊勢守(勝隆)家八、奥山與兵衛ト云者有リ、御軍勢崩立テ皆引ケルニ、只一人忠興ニ向テ詞ヲカハス、忠興突懸レト與兵衛ニ下知ス、與兵衛一人取テ返シ、敵ノ中ヘカケ入相戰フ處ニ、森豐前カ從軍二十人、素膚ニ玉釋ヲカケ、各甲ハカ、笛卷ノ鎗ヲ一樣ニ握テ、忠興ヘ無二無三ニカ、ル、忠興馬ヲ平場ニ乗ヲロシ、敵一人矢場ニ突伏、ヲサヘテ首ヲカク、此時保鷹吉兵衛傍ニ有ケルカ、忠興ノ長

忠興ノ軍裝

毛利勝永ノ兵ト戰フ

刀ヲ取テ渡シ合ヒ、敵ヲ突伏セ、首ヲトラントスル處ニ、殘黨助來テ攻ケレハ、其儘捨テ相向、其外安藤清右衛門、吉田小兵衛思ヒ々ニ鎧ヲ合セ、鎗下ニテ首ヲトル、大島半兵衛ハ暫敵ト鎗合ケルカ、敵側ナル古井ヘヲチイリケレハ、上ヨリヒタ突ニ突ケル折節、カノ敵刀ヲ拔テ、井ノ中ヨリ切拂、兒小姓丹羽才三郎拔合セテ切結フ、大島頻ニ突ケレハ、敵又鎧ニスカツテ少モ不離カ、ル處ニ、敵一人弓ヲ以テ間近ク蒐ヨセ、大島ヲ射ル、其矢大島カ腰ノ刀ニ中テウラヲカ、ス、其内ニ井ノ内ノ敵ヲ突殺ケレ、首ヲ取事アタハス、又他ノ敵ト相戰フ、忍四郎兵衛此時ハ半九郎ト云ハ餘リニ深入メ、手ニ不合、サレ、レ、フ、リ、ヨ、キ、働、ナ、リ、步、卒、渡、邊、六、右、衛、門、深、手、ヲ、負、死、後、ニ、長、兵、衛、其、外、一、人、以、上、三、人、討、死、ス、兒、小、姓、原、田、武、藏、丹、羽、才、三、郎、モ、場、ヲ、不、去、才、三、郎、カ、刀、ハ、鋸、ノ、如、ニ、ナル、ト、云、依、之、森、カ、先、手、忠、興、ノ、武、威、ニ、恐、レ、ケ、ル、カ、軍、ヲ、返、メ、敗、逃、ス、右、ノ、與、兵、衛、御、治、世、ノ、後、罷、出、右、ノ、様、子、忠、興、ニ、訴、フ、忠、興、委、細、ニ、稱、美、シ、テ、蒲、生、忠、知、家、ニ、附、屬、セ、シ、ム、忠、知、朝、臣、卒、去、ノ、後、者、今、治、ノ、侍、從、定、芳、呼、出、シ、其、子、與、兵、衛、相、繼、テ、父、カ、遺、跡、ヲ、傳、領、ト、云、後、ニ、東、照、宮、諸、勢、ニ、向、テ、仰、ラ、レ、ケ、ル、ハ、左、衛、門、尉、カ、組、ニ、朱、具、足、ヲ、着、シ、蘆、毛、ノ、馬、ニ、茜、ノ、指、物、サ、シ、タル、若、者、一、騎、尉、カ

敗軍ニモ不騷立、聲花ナル武者フリ也キ、誰ナラント御尋アリケレハ、忠次御請不申上、忠興ハ忠次ノ掣ナレハ、御返答遠慮ニ及フ、忠興御前ニ有ナカラ、只謹テ候スル所ニ、或人、蘆毛ノ馬ニ朱具足ハ某甲也ト言上ス、東照宮御挨拶ナシ、只尉カ組ナリト再三仰ナリケルニ、忠次御返答申上サレハ、忠興猶モ無言ニ及フ、東照宮甚貴感マシマシ、御治世ノ後、二万石ノ新恩ニ浴セシモ、兩年ノ忠戰ニ依テナリ、

〔内藤家傳〕

下 五代帶刀忠興

(元和元年)

其年夏御手切ニ多、再び大坂に御旗を向

られし、忠興ハ万石の領主にて、自身軍役を經營し、新將軍家より扈從し奉ル、此度之酒井左衛門尉家次が組ニ屬して、松平丹波守康長を相備なり、忠興從兵より、

忠興ノ軍備

旗奉行 川澄五郎右衛門

鉄炮大將 上山市郎右衛門

弓大將 太田新九郎

鎗奉行 助太夫

騎兵

近藤惣兵衛

○安藤清右衛門

○大島半兵衛

原田次郎太夫

○忍半九郎

○吉田小兵衛

後ニ四郎兵衛と改

原田武兵衛

藤江庄助

○山下彌五右衛門

平澤九郎兵衛

長谷川茂右衛門

○原田武藏

丹羽才三郎

步卒三十人之内

穗鷹吉兵衛

渡部六右衛門

長兵衛

姓名不知壹人

雜兵共ニ貳百餘人也

皆、其節の働の士也

同五月七日、帶刀忠興ハ、朱具足ニ茜の指物金のびら／＼附せるを、指、芦毛の馬ニ黒鞍置、金棒といふ十文字の鎗を持、其躰甚掲焉シ、側より大島半兵衛、原田武藏、丹羽才三郎、步卒ニ者、穗鷹吉兵衛、渡部六右衛門等なり、此時軍未始さり、忠興ハ馬より下り、大島半兵衛が膝を枕として沈睡し、諸軍の騒動にも構はず、高軒時を移、大島時刻至りぬと起せば、則馬ニ打乗て扣る處に、穗鷹吉兵衛馬の口に取付、小高き處より引上、一足も引まじと言時、既に午の下一刻、松平丹波守康長ハ、忠興を相備ニ酒井家次の組也、○下略、忠興ハ、戸田康長、本多忠朝、奮戰ス、

元和元年五月七日

一四〇

〔寛政重修諸家譜〕

八百六十九

水谷勝隆

伊勢守

元和元年乃役に罷、家次酒井

ヲ屬し、五月七日乃合戦、一隊の士腕波の起るをき、馬乃遅速にほりせ
く敵陣にぞ、ミ入於、勝隆も相に、きき馬茂をす、轡ふるぬものわつかふ
十騎許先ニす、みし味方の兵入ミとまきひきまてせくといふとも、勝隆
あ茂進てせむらふ、ときに金の半月乃指物しける敵二十人あり、勝ヲ
乘し目前にす、み來る、勝隆かあせせういとみ戦ふ、家人戦死を承え
の五六人、その外創を蒙るも乃あり、勝隆鎗をとて馬より下らんとせ、家
臣鶴見内藏助某も茂と、むるゆるふ、馬をひりへく對陣に、敵兵きそ
ひ來るといへとも、終り其場をしりそり、其のとき勝隆の手に首五級を
得せり。

〔寛政重修諸家譜〕

三百八十四

稻垣重綱

初重種攝津守

元和元年大坂御陣のとき、

酒井家次ヲ屬し、事なきかむたてり、五月七日乃合戦、後陣に備へし
あ、先手松平丹波守康重(長)と、ミ戦ふ、殆危し、重綱遙み、茂みくはせ
戦ひ、康重を援ち、白幌の者を武人一人茂討取、其のとき重綱の手は獲せ
こは乃首二十九級あり。

〔長綱記〕

稻垣長茂嫡子平右衛門尉

後任攝津守

重綱

後重種

元和元乙卯年五月

七日、大坂御陣之時、重綱を、酒井左衛門尉ヲ組し、仰を蒙りて御供申たり、扱
重綱ハ、長茂より傳りたる吉相の朱具足ふ、かふるの甲、立物の白鷺のろ
毛茂をぶるふ立て、侍二十騎士卒三百計よて打出たり、天王寺表合戦始
り、爰かこめて相戦ふ中、天王寺の四五丁南庚申堂をり片下り成所、
て、秀頼の城兵五人と、重綱鎗合せ突合、其敵を追拂候内、白母衣の武者
一人残り、鎗合せて責戦ふ、是ハ秀頼の使番都筑丈右衛門直照とて、をり
きやうの若武者也、時重綱鎗をなげたり、茂よりなり、其鎗突捨よ、
る故、手を離れ、如何せんと思ひたる處、側よ在り、重綱侍細井彌左
衛門と言者、燕の紋我ヲ持し、鎗を重綱へ、是兼てせめしむる鎗ありと云て
差出し、れハ、直よその鎗おつ取て、かの丈右衛門を突伏せ、卒士新井勘右
衛門といふもの、其首茂揚させて、重綱今日の功名と高らうに呼り、
り、其首合戦の中、あれハ、實見まで、向の田の中へ埋置、晩よ取よ參り候様
ニ、重綱申付候、依り、新井も心得て、天王寺近所地獄谷といふ所の下々の
田乃中へ埋置、其所よ有たる古記障子骨茂印よさして置、晩よ成りて、重綱

元和元年五月七日

一四一

檢使可申付候間是を同道して、その首取て參まき新井へ申付たれハ、畏て
檢使の者を伴ひ首を取ら行たり、折節大雨降、田の水増てまれさりなり、檢
使の者、大切の首不見と有、甚其意不得事あり、老々と覺へをして置
るや、せいへは、新井、慥ニ覺有る事なり、向ふ當つて河内國金剛山を目當に
埋置候よし、夜の事大雨と云、水を乳丈ケも深々まは、闇さ日暗し、豎横十文
字ふ尋歩行、漸と足よて探り候へハ、彼の障子骨ふ當り、是そ天のゐとへ
と悦早々持歸、重綱の前へ差出せば、大悦不斜、扱重綱侍共も、爰かしこふ
取合ひ、敵對の折あらめて、ちりくよ成たれば、其場よ有ふ侍よは、稻垣
九郎左衛門、細井彌左衛門、高橋三四郎、小曾根久左衛門、新井勘右衛門、水野
勘十郎、松澤彌右衛門あとを聞へたる、

六郷政乘

〔寛政重修諸家譜〕

八百八十九

六郷政乘 兵庫頭

元和元年此再陣よは、政乘の

手よ首一級拔得たり、

松平成重

〔寛永諸家系圖傳〕

六

松平 大成重 右近衛將監

元和元年大坂再亂のとき、敵

兵酒井右衛門尉の組中のうあへ亂入せ、成重あらひ味方の勢いと
ま、あつ、そ此備をま、ま、ま、こ此とき成重の家人あるひ討死し、ある

ひハ疵をあらふりて戦功あり、水谷伊勢守の家臣稻葉市助馳きま、ま、成
重ウ戦功をあんし、成重よつけい、我も又一足もま、ま、ま、軍
功をえけま、ま、ま、ま、成重後の證據ま、ま、是よより御歸陣の、ち御
評議ありし時、右乃を言上せ、

〔寛政重修諸家譜〕

三十一

松平 給成重 右近衛將監

五月七日乃た、かひりも、首十

二級を獲てた、ま、ま、つる、

〔寛政重修諸家譜〕

五十一

松平 忠貞 甲斐守

元和元年大坂の役、自ら奮戦

し、敵一人討とり、家臣等も軍功拔えけま、ま、ま、首三十七級拔得た
り、

○茶白山方面ノ戦況、其四松平忠直

〔松平家譜〕

二世 忠直 年譜

二世 西巖公

翌日、五月 鶏鳴後、吉田修理

亮第一番ニ乗出シ、旗ヲ進テ先導シ、茶白山ノ西南ニ至リ、兵ヲ屯シテ大旗
ノ至ルヲ待ツ、既ニシテ日晏ル頃ニ及ヒ、上下悉ク糧食ス、公ハ湯漬飯ヲ命
シ、近侍眞子平馬ニ膳ヲ持セ、立ナカラ數椀快ク喫セラレ、食終テ公舒々ト
諸軍ニ向テ、最早皆々滿腹スレハ、討死シテモ餓鬼道へハ墮チス、死出ノ山

忠直隊ノ
戦況

松平忠貞

元和元年五月七日

一四四

忠直隊ノ先鋒

ヲ越シテ直チニ闇魔ノ廳ニ撃入ルヘシトテ馬ニ乗テ茶白山ニ向ヒ隊伍ヲ整ヘ段々ニ操詰ラル右ノ先手ハ山本内藏助多賀谷左近本多丹下(成重)笹治大膳高屋越後守荻田主馬左ハ吉田修理亮松平伊豫守同國松丸本多伊豆守山川讚岐落合美作以上十二隊ヲ鶴翼ニ立第二陣ハ六番組小姓組使番旗本之ニ續ク此地ノ前ニ高丘アリ丘ニ登テ望メハ茶白山ハ咫尺ニ在テ紅ノ旗吹貫ヲ立ツラ子躑躅ノ花盛ニ開クカ如シ皆曰是コソ真田ノ備ナリト吾先鋒ト相距ル九町餘アリシモ只一二町ノ如ク見ヘワタル真田左衛門佐ハ茶白山ノ上ヨリ庚申堂迄取續ケ段々ニ備ヲ立伊木七郎左衛門大谷大學助渡邊内藏助ハ山ノ南ニ陣ス其東ハ福島伊豫守同兵部真田采女古田玄蕃篠原又右衛門石川肥後守津田左京結城權佐淺井周防守竹田榮翁相並テ陣ス森豐前守同式部山本左兵衛樞井勘解由ハ庚申堂ノ前ニ陣シ兩軍相持シテ互ニ其間合ヲ守ル時ニ大御所未タ至ラス本多三彌米倉丹後守ヲ使トシテ尾張遠江ノ二公子ヲシテ戰ニ臨マシメラル間其至ル迄ハ必ス戰ヲ始ルコナカレ馬ヲハ二三町跡ヘ殘シ徐歩シテ漸ク進ムヘシトノ命アリ公武者奉行梶原美濃守太田安房守二人ハ兄弟ニシテ太田三樂カニ三男

大坂方ノ陣備

真田隊ト戦フ

幸村等ノ戦死

リ水谷兵部大輔菅沼伊賀守ヲ斥候ニ遣ハサル此四人ハ見切早ク軍事ノ機變ヲ熟知スルヲ以テナリ本多丹下四人ニ向テ卿等ハ老練ノ事ユヘ戰フヘキノ時機ヲ指令セラルヘシト申セハ四人曰ク我等關東ニテ屢戰場ニ臨ト雖モ二三百人ノ小敵ニ過ス千軍萬馬ノ平原曠野ニ接戰スルニ至テハ未タ試ル所アラス今日ノ事ハ諸君ノ見切次第ニアリト本多伊豆曰ク昨日我等ハ命ヲ待テ發セス并伊藤堂ヲシテ功ヲ專ラニセシメ我等却テ台情(怠カ)ノ名ヲ受シ遺憾ノ至ナリ今日ノ事一刻モ早ク我手ヨリ戰ヲ始ムヘシト評議スル内ニ敵軍吾先鋒ニ對セシ森豐前守カ白旗ノ備ヲ真田カ赤旗備ト俄ニ入替ヘ二隊相騷擾スル機ニ乘シテ第一番ニ吉田修理續テ大野伊豆乙部九郎兵衛荻田主馬豐嶋主膳等突出シ七八挺ノ銃砲ヲ打掛ケ一人手二ノ手二萬ニ近キ大軍一同ニオシ寄せ殊ニ修理ハ兵卒ヲ勸マシテ死子ヤ死子ヤト呼ハツテ真先ニ進ミ全軍先ヲ競テ突掛ケレハ真田兵士ヲ指揮シテ血戰時ヲ移シ伊木大谷渡邊等モ善ク防戰ス吾軍益奮撃シ呼聲天地ヲ動カス城兵支フルコト能ハス遂ニ敗走ス真田左衛門身數瘡ヲ蒙リ猶縱橫馳突ス西尾仁左衛門槍ヲ接シテ之ニ克其首ヲ獲タリ

元和元年五月七日

一四五

元和元年五月七日

一四六

吉田好寬
等ノ溺死

石川佐左
衛門等落
城ヲ家康
ニ報ズ

眞田勸解由、大塚清安、高梨主膳等一所ニテ戰死ス、御宿勸兵衛ハ、岡山口ノ部將タリシカ、所用アリテ眞田カ陣ニ趣ク途中ニテ戰始リケレハ、力戰數合、終ニ野本右近(正利)ニ討ル、其外城中有名ノ兵士多ク死ス、公弟伊豫守、國松丸皆親ラ敵ヲ斬リ功アリ、我總軍ハ眞田カ備ヲ二ツニ突割リ、黒門ヨリ直ニ本丸迄攻入、四走シテ火ヲ放ツ、修理ハ卒五十人ヲシテ、先ツ入テ放火セシメ、自ラ敗兵ヲ追撃シテ天満橋ニ至ル、橋半ハ、燒テ渡ルコ能ス、修理數騎ト轡ヲ駢テ川ニ乘込ケルニ、前日城兵下流ヲ堰シテ水ヲ湛ヘ、且梅雨ニ水漲テ淺瀬モ替リケレハ、馬ノ足タ、ス、悉ク溺レテ死ス、公ハ馬ヲ城頭ニ立テ、墨汁ヲ取テ、忠直只今城ヲ乘取火ヲ放チ候間、御安心成サルヘキノ旨ヲ記シ、石川佐左衛門、小栗治右衛門ヲ召、汝等此書ヲ持テ御本陣ニ報セヨト命セラル、二人馬ヲ鞭テ馳行キ、大御所ノ茶白山ヘ登ラル、途中ニ出逢ヒ、之ヲ呈シケレハ、大御所大ニ喜ヒ、兩使ヲ馬前ニ召シ、親シク委細ノ事ヲ御尋ノ上、御返答アリテ後、兩人ヘ仰ケルハ、汝等先年譴ヲ受テ逃亡シ、近ク少將カ方ニ潛居スルコ甚以テ不届ナリト雖、今日天下分目ノ軍ニ城ヲ乘取シ使ヲ勤タル功ニ面シテ、其罪

ヲ免スト有ケレハ、二人拜謝シテ退去セシカ、一二町行テ小家十軒許リアル方ニ鎮炮ノ音聞ヘケレハ、二人馬ヲ下リ刀ヲ抜キ内ニ入テ檢閲シ、又騎シテ還リシヲ、大御所遙ニ之ヲ見テ、團扇ヲ揚テ其方ヲ指シ、少將カ部下ノ者共カ所爲ヲ見ヨ、弱年ヨリ仕入タル故、其心ヲ用ユルコ此ノ如シト感賞セラル、

是日合戰始ラントスル時、兩本多兼テ加州勢ト約シテ、一同戰ヲ始ント、狼烟ヲ舉テ報セシカ、加軍應セス、後ニ其故ヲ尋ルニ、敵軍案外多勢ニテ、廣ク備ヲ張出スニ依テ、味方モ跡備脇備ヲ前ヘ操出シ、敵ト一面ニ味方ノ備ヲ合セントテ、混雜シテ狼烟ヲ合スル事モナク、空ク時ヲ移セント云フ、事終テ、公茶白山ノ本營ニ至ル、大御所、公ノ手ヲ執テ、今日ノ舉動稀世ノ大功感賞餘リアリ、眞ニ我孫ナリトテ厚ク賞譽セラル、

〔譜牒餘録〕

五 松平越前守

伊豫守忠昌

同月○五七日未明、忠昌引具手勢、從平野邊押出、對于天王寺茶白山而備、手勢之備進于忠直、城兵者備茶白山之前、守先手也、漸及午刻、與城兵相挑、于時風

松平忠昌

元和元年五月七日

一四七

元和元年五月七日

一四八

烈吹起、亂敵之旌旗、忠昌乘此勢、勦士卒急攻戰、城兵敗北、忠昌彌進于先登、於黑門通八町之町口自戰、討取敵兵、猶追討城兵、破天王寺口之柵、直攻入、立旗于櫻門、忠昌大手口之一番乘也、於此所忠昌又討取敵兵、忠昌并手勢討取首都合五十七、

松平直政

出雲少將直政家譜

俘虜ヲ赦シ去ラシム

元和元年、直政十五歲、五月、再圍大坂城、直政亦從行、○中略、大津ニテ、忠直、直政ニ背ヲ與フルコトニ係、七日、進而攻大坂城、直政躍馬、麾下勇氣奮發、有武藤多兵衛者、持馬章爭先而赴、已入城門、立馬章於直政戎馬傍、呼曰、今日先登松平出羽也、呼之三、今般天下諸軍之先鋒者、越前軍士也、於越前軍著祖生之鞭者、直政也、當時墮塵於某處、松原三左衛門執之、歸上之、直政叱曰、汝何取之來哉、速可置本處、三左衛門畏置之於本處、直政回馬而執之、今日得首三十餘級、俘敵二人、其一柏原權內、其一失其名、共握塵之士也、來直政戎馬前、而拜誓首願矜憐、左右欲兵之、直政曰、彼既乞降、殺之不仁也、扶而去之、且賜白銀衣領、使人護送之、凱旋之後、屢來感恩、天野久兵衛正純力縱殺其敵、佐乙女三郎右衛門勝利先諸士獲首級、使家臣悉傳首達于家兄之陣、大神君秀忠公聞之、大賞戰功、忠直及直政奉拜

大神君秀忠公于陣中、大神君手自賜打飼袋於直政、打飼袋納粟、斗餼乾栗、大神君戲於直政、執其手曰、出羽者今日何敗北乎、直政曰、我全不敗北、大神君笑曰、辭氣最壯也、何可敗北、大被稱譽之、石川彌左衛門、太田采女資宗後名備中守等、在御前聽之、打飼袋于今爲家珍、

松平越前守家臣

覺○中
台德院樣被下置
一黃金時服

右於大坂御陣、討取真田左衛門、爲御褒美、西尾仁左衛門頂戴仕候、家來西尾市郎大夫と申者之祖父ニテ御座候、

權現樣被下置
御鎧 青江

右於大坂御陣中、參河守忠直爲使者、小栗次右衛門差上候處、出御之節、御目見被仰付、御家立退候得共、參河守方罷有候故、御免被遊之由、以上意御鎧被下置候、○下

〔越藩史略〕

忠直公

七日○

五味爽、對天王寺茶白山陣、初兩本多○富正、隆

元和元年五月七日

一四九

芳公相竝行，至是隆芳公先於兩本多，可三十步，兩本多使使謂曰：少退，隆芳公聞之曰：大丈夫之赴戰，欲進而不欲退，卿等進而吾陣比矣。時城兵毛利豐前守背天王寺茶白山陣，真田左衛門佐幸村對神君先鋒，菅沼伊賀、太田安房、梶原美濃、水野兵部次大河原藤太夫、江川安右衛門伊藤長太夫、藤田大學、次真子刑部等，往察敵之體勢，其勇壯足賞矣。亦見新兵衛謂富正曰：今日之軍配始戰於西南，則利過午，吾必勝也。時既已，幸村俟明石掃部擊神君之尾，不肯戰。富正令岡谷隼人放鐵砲，然幸村持而不戰。富正大怒，進陣頭，親指麾奮擊，增田作十郎早獲首，州公、號木工真田毛利軍大潰。隆芳公先士卒戰，其鋒不可當也。真田回兵大戰，山形伊賀入崩際鎗，獲伊木左近首，敵亦血戰，欲決勝負於此一舉，而吾兵破利摧堅，進不避水火，敵兵又潰。吾追北進，有念立左太夫者，以勇悍鳴世之士也。見隆芳公來戰，公以鎌鎗突折其片鎌，遂相搏而俱墜馬，公幾殆矣。永見志摩吉次、吉田五左衛門來救，五左衛門代公與念立，ハ、力宛轉上下，公按刀在傍，無所加。五左衛門放聲言，并臣斬焉。於是公遂斬念立也。公屬念立首於池山茂右衛門，致諸中營。五左衛門者，櫛人也，依此功，擢為隊士，賜二百石。裔今存西尾仁左衛門宗次，獲敵將真田幸村首，野本右近正利，獲御宿勘兵衛正倫首。

正倫相模人，始仕吾藩，為鳥銃頭，秩五百石。後有故去，是役與城兵而約封越前，故預號越前守。然城兵不利，正倫視事之不可成，死。後召兩本多於二條，問條々事。次及宗次正利，宗次云：幸村自名戰死，マ、勁健可賞。正利云：臣從六七騎，過數下，見有一老將下馬，息路傍喚正利，顧之即正倫也。遂授首，蓋依舊好云爾。神君將軍家善其不飾言。

吾兵乘勝進，隆芳公於八丁目町口，手斬一士，夫姓名、甲公佩刀刃缺亦不可用。栗原作兵衛賤卒，執屨在後，以已佩刀進之，公善之。既而吾先鋒將入櫻門，城之南門富正臣佐久間權三郎先登，所刺墮。富正從花園踰墻入，井上內匠先捕其手，大貫吉右衛門正勝以肩受其足，小嶋權太夫相並入，サシ搽物支不能行。伯父與五右衛門在側叱之，於是折搽物而入。富正旌奉行平野清兵衛，纏奉行大貫土佐相繼入，關根治右衛門、丹羽八兵衛、丹羽角兵衛、梶川助三郎、酒入佐五右衛門等繼之。自餘諸隊魚串登，旌奉行上三川左衛門實基招榊原新兵衛，相與謀而勸進一旗，卷四旗入。時從千貫橋筋有進旗至者，實基等問曰：吾越侯兵既入城，今所勸不知何侯旗邪？答曰：此是水野日向侯旌。奉行神谷久右衛門實基曰：然則以此地任卿等，遂進入城內，無防禦者。成重臣小笠原忠兵衛放火於大野主馬宅。

元和元年五月七日

一五二

從是以內上三川實基奉旗先登城既陷
火發時吾公使母衣之士石川佐右衛門小栗治右衛門於中營告拔城神君召
二士親聞喜之這二士獲罪於神君亡迹仕于藩此時神君赦二士之罪略注
永見志摩守吉次狛木工孝澄杉田權之助三正酒井外記重成等從隆芳公有
功略注

吉田好寬
岡部豐後
等ノ溺死

吉田修理好寬岡部豐後其子淡路入于天滿河卒

好寬美濃人性素有遠識兼精兵事始仕于豐臣後關白關白自殺之後所徵仕

于淨光公秀康殊所寵遇每侍左右謀從入藩受封於南江守秩一萬四千石隸士若

干改築國城之時好寬爲總管是役也以委地理奉命爲鄉導マ、藩兵終立大功軍

散溺於天滿河卒葬北庄マ、彼南寶泉寺諡節叟義道居士無子絕マ、祠寶泉寺今之

豐仙公之音改
之略注

豐後駿河人二休月二岡部伊豫一ニ自休トアリ慶長十七年十一月一之氏族爲隆

芳公重臣其子淡路及家士五人溺死次子時三歲家士岩崎與左衛門携之屬

將軍家仕士岡部萬五郎經三年徵豐後子弟時出仕賜千五百石後號豐後
吾藩所獲首三千餘

吾公所獲 三千六百五十二級

隆芳公所獲 五十七級

御家中侍討取首之覺

越前家首
帳

首一	山上甚左衛門	同一	田口源左衛門	同一	田口源藏
同二	大熊九右衛門	同一	江間勘彌	同一	朝比奈小隼人
同二	小隼人家來	同一	窪崎長五郎	同二	高木長右衛門
同一	增田作十郎	同二	齋藤無意	同二十六	吉田修理
同八	牧野主殿	同六	柴田帶刀	同一	稻葉馬左衛門
同十八	山川讚岐	同八	山岡備前	同十九	高屋越後
同十六	笹治 <small>マ、</small> 大膳	同三	富永刑部	同六	日下部左馬助
同五	安島宇右衛門	同四	淺羽左衛門	同四	橫江彌五左衛門
同二	長田儀太夫	同一	落合八郎左衛門	同三	富岡彌右衛門
同十三	西尾仁左衛門	同五	服部三太夫	同二十一	荻田主馬
同十一	長谷部右馬助	同二	山名土佐	同四	谷左衛門
同十二	永見民部	同三十八	多賀谷左近	同三	大藤小太郎
同二十六	落合美作	同三	岩上越中	同三	平松三十郎

元和元年五月七日

一五三

元和元年五月七日

一五四

同六 谷 伯 普 同二 林 甲 斐 同 岡 谷 隼 人
 同 青 木 新 兵 衛 同十五 高 須 半 市 同百三 本 多 伊 豆 守
 同六十四 本 多 飛 驒 守

以上

通計四百七十八級其餘則脫姓名蓋此首簿不當時正簿後人以其所聞私記之而已故以增田
 作十郎爲第十脫山形伊賀然上世之書記不能改正也
 富正之陣所獲首簿亦傳之如隆芳公其數雖不多不可不傳而不傳焉何故也邪

本多伊豆守富正備江討取首之覺

首三 本多志摩守 同 一 若代彦左衛門 同 一 青柳勝右衛門
 同 一 鳥井猪兵衛 同 一 川村三十郎 同 一 梶川助三郎
 同 一 三戶邊源十郎 同 二 西尾三四郎 同 一 市村四郎兵衛
 同 一 大貫土佐 同 一 松岡傳彌 同 一 若林五郎兵衛
 同 一 今井惣兵衛 同 一 大森甚兵衛 同 一 山村喜兵衛
 同 一 野村三右衛門 同 一 藤井勘左衛門 同 一 近藤九郎兵衛
 同 一 村田長左衛門 同 一 大畑藤九郎 同 一 杉山理右衛門
 同 二 桑窪惣右衛門 同 一 坂本加右衛門 同 二 松本金左衛門

同 二 安 保 彌 五 助 同 二 谷 内 膳 同 一 後 藤 十 右 衛 門
 同 一 大 塚 次 郎 左 衛 門 同 二 齋 藤 彦 五 郎 同 一 渡 邊 市 郎 兵 衛
 同 一 久 野 角 太 夫 同 一 稻 澤 九 郎 右 衛 門 同 一 赤 見 新 兵 衛
 同 一 齋 藤 平 八 同 二 山 田 彌 五 左 衛 門 内一家來錄屋七之助討取也 同 一 佐 久 間 兵 左 衛 門
 同 一 三 宅 三 之 丞 外一自分後候故首級不取 同 一 落 合 大 和 同 二 金 澤 吉 左 衛 門
 同 二 青 木 内 記 同 一 佃 半 之 丞 同 一 高 嶺 助 兵 衛
 同 三 山 川 清 太 夫 同 三 稻 垣 彦 右 衛 門 同 三 赤 見 新 五 左 衛 門
 同 三 大 石 四 郎 右 衛 門 同 一 原 三 郎 左 衛 門 同 一 三 戶 邊 久 三 郎
 同 一 本 間 八 郎 兵 衛 同 一 畑 茂 兵 衛 同 一 梶 川 助 三 郎 組
 同 一 高 嶺 助 兵 衛 同組 同 一 熊 本 左 平 治 同 一 立 田 久 次 郎
 同 一 内 之 者 同 一 名 村 角 助 同 一 平 野 清 兵 衛 同 一 熊 本 左 平 治
 同 一 岩 崎 茂 太 夫 同 一 安 西 勘 解 由 兵 衛 同 一 平 野 清 兵 衛 同 一 吉 田 藤 左 衛 門
 同 一 平 野 清 兵 衛 組 同 一 高 崎 助 作 同 三 内 之 者 同 一 吉 田 藤 左 衛 門
 同 一 菅 谷 與 次 兵 衛 同 一 關 根 治 左 衛 門 同 一 板 橋 善 九 郎
 同 一 堀 込 仁 右 衛 門 同 一 同 左 源 治 同 一 石 上 三 平 渡部三九郎相討云
 同 一 岡 部 三 左 衛 門 同 一 高 木 段 右 衛 門 同 一 井 上 内 匠 之 者
 同 一 同 人 組 同 一 同 人 組 同 一 同 人 組
 同 一 横 尾 拾 太 夫 同 一 小 方 久 藏 同 一 窪 田 兵 太 夫

元和元年五月七日

一五五

元和元年五月七日

一五六

同一	手塚太郎右衛門	同一	青柳勝右衛門組	同一	西嶋藤藏
同一	山路茂兵衛	同一	内之者	同一	丹羽善右衛門
同一	原久右衛門	同一	口藤善右衛門 <small>(五人誤人而)</small>		

城兵討死

真田左衛門佐幸村 御宿勤兵衛正倫 伊木左近祐光

鹽谷宗滿齋 仙石清右衛門 南部左衛門

佐々木左平太

以上各勇悍士而藩兵擊之、

〔松平家譜〕中納言秀康嫡男 二 越前守忠直 七日月〇五 曉丑ノ刻頃ヨリ、先手之勢を操

出、藤堂和泉守高虎陣所前を押越、天王寺を押行、略先手旗本を初、搦軍無難ニ押通、天王寺と茶白山ニ向ひ、真中ニ伊豫守忠昌、右ニ本多丹下、左ニ本多伊豆守將某頭ニ相成、都合十六隊ニ相備、夜之明るを待居處に、家康公本陣ヨリ使番本多三彌を以、今日之合戦ハ急申間敷旨下知ニより、暫猶預候得共、兼る先陣之心組ニより、軍奉行梶原美濃守を初、追々物見を指出、三番目之物見眞子刑部差出候處乘歸り、先手者既ニ鎧炮相始、頓る鎗合ニも可相成様子之旨申開るニより、直ニ旗本を可相進旨觸出、立掛り湯漬を喰、

京橋口ヨリ入ル

忠直隊ノ分捕

吉田好寛軍令違背ノ責ヲ負フテ自殺ス

最早是ニ而餓鬼道に落間敷間、真先ニ閻魔之廳ニ可着、(七脱カ)力足を踏馬ニ打乘相進處ニ、先手丹下、伊豆守等眞一文字ニ攻還り、大將真田左衛門佐幸村之備を追崩、森豊前守勝永等を追立、京橋口之敵兵を討取、西門ニ押入、此時忠直ニハ城門ヨリ旗を押入、二ノ丸ニ火を放チ、本丸迄乘取、未之刻落城ニ及、討取首數都合三千七百五十三級也、此節旗本ハ啓書記筆之七賢人之畫之屏風、家臣本多伊豆守手ハ、本丸に乘入候後日之證として、千疊敷大床之繪張付を剝、千鳥之畫之屏風一双、水車之畫之二枚折屏風一、金山寺圖四幅對掛物、茶臼一分捕之戰終る吉田修理ハ今度軍令違背之罪を一人ニ引受、天満川に入水して相果ぬ、右之趣を本多伊豆守ニ可告旨、修理臣大館備前与申者ニ申含置し故、備前、伊豆守は是を告、再天満川に罷越、入水して相果ぬ、

〔藩祖御事蹟〕ニ 七日月〇五 東照宮諸將ノ手分ヲ定メ給ヒ、將軍家ハ右軍

ノ大將トシテ、御自左軍ヲ引率セラレ、左軍ノ先鋒ヲ越前ニ命シ給ヒテ、公直ツノ越前ノ第三ノ御備ニ就キ給フ、事、御年譜ニハ先錄ニ備ハリ給ヒシ、政、直冬夏軍記ニ、家康公ノ大先手ハ、越前少將忠直、舍弟伊豫守忠昌、同出羽守直政トアリ、其三番備ニ就キ給フ事ハ、越前家譜ノ一説ニ載セテ、彼是符合

元和元年五月七日

二五七